ＩＳとＷ　コアに続く新たな戦いＩＳ大戦

六甲水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳとＷ　コアに続く新たな戦いＩＳ大戦

【Ｎコード】
Ｎ００５７Ｒ

【作者名】
六甲水

【あらすじ】
仮面ライダーコアをオーズと共に倒したｗ。だが、二人はドーパントと戦ってる中、異世界に来てしまった。ＩＳ（インフィニット・ストラトス）と仮面ライダーｗの異色コラボ。オーズとディケイドも合流し、新たな戦いが幕を開ける

しばらく更新停止します。とりあえず、復活は８月の中盤あたりに……

第1話　Tとの出会い／訪れた世界は異世界？（前書き）

六甲水「インフィニット・ストラトスとWのコラボが始まります。設定的には、セシリアとの戦いが終わった辺りです。」

第1話　Tとの出会い／訪れた世界は異世界？

『サイクロン・ジョーカー・エクストーリム』

仮面ライダーWは今、ガイアメモリの売人である男が変身したワープドーパントと戦っていたが、すでに追い詰めている。

「さぁ、観念しな」

エクストリームメモリを一度閉じ、また開いた瞬間、

『エクストリームマキシマムドライブ』

となった瞬間、緑と黒の2色の竜巻に包まれながら上昇し、エクストリームメモリのエネルギーを宿して放つ両足蹴りをワープドーパントに食らわせようとした瞬間のことだった。突如、ワープドーパントの体から放たれた光の粒子をWに食らわせた。

「な、何だこれは」

『これは、次元転送じゃ……』

「うあああああああああああああああああああ」

次元の彼方に吹き飛ばされた翔太郎とフィリップ。さっきまで戦っていたドーパントは逃げ出した。だが、ドーパントが持っていた26個のガイアメモリが入っていたケースも同じ次元に流されていってしまったのだった。

風都がある世界とは別の世界の日本にある『ＩＳ学園』。

そこの敷地内にある競技場『ＩＳアリーナ』で近未来的な装甲を身に着けた二人の少年少女がいた。

「行くぞ、一夏」

「あぁ、箒」

一夏と呼ばれた少年は黒髪で容姿が整っており、白を基調とした装甲を身に着け、箒と呼ばれた少女は長髪の黒髪に凛とした可愛らしさがあり、黒を基調とした装甲を身に着けている。二人は何度も剣を交えていると空が急に暗くなった。

「何だ？いきなり空が暗く……」

「箒、危ない」

突如、空から雷が二人目がけ落ちた。一夏は箒を助けるため抱きつき、その場所を離れた。

「い、一夏。いきなり何を……」

「わ、悪い。箒が危なかったから……」

箒は抱きしめられて顔を赤らめていたが、一夏はそれに気づいておらず雷が落ちた場所を見ると……

「つぅ、大丈夫か？フィリップ。」

「あぁ、だが、エクストリームメモリが少し壊れたかもしれない」

黒いソフト帽に黒いスーツを着た男が隣にいる鳥のおもちゃをもった男性に話しかけていた。一夏と箒はとりあえず事情を伺うために、装甲を解除し、体のラインががくっきりとでるスーツ姿となり、二人の所に向かった。

「あの大丈夫ですか？」

一夏は二人に話しかけると、鳥のおもちゃをもった男が……

「翔太郎。どうやらここの関係者みたいな人みたいだね」

「そうだな。なぁ、ここは風都のどこら辺だ？」

ソフト帽の男が質問してきたが、一夏と箒は『風都』という言葉に聞き覚えがなかった。

「あの、ここはＩＳ学園ですけど、」

と箒が言うと二人は驚いていた。

「ＩＳ学園？風都じゃなくって？」

「どうやら、さっきのドーパントの攻撃で別次元に飛ばされたみたいだね」

「マジかよ。異世界って……ディケイドじゃあるまいし……」

「とりあえず、ここの責任者に話を聞きたいんだけどいいかな？」

一夏と箒は少し悩んだが、とりあえず二人を織斑先生のところにつれていくのだった。

第1話　Tとの出会い／訪れた世界は異世界？（後書き）

六甲水「出会い編はこんな感じで、ちなみにWとしてのＩｓはあのバイクです」

第2話　Tとの出会い／世界について（前書き）

六甲水「今回は翔太郎とフィリップが千冬と出会うところです。」

第2話　Tとの出会い／世界について

翔太郎とフィリップは一夏と箒に連れていってもらった場所は、ある部屋だった。そこには二十代半ばのスーツ姿の黒髪の女性がいた。女性は一夏と箒をアリーナの掃除を頼み、二人は部屋を出ると…

「お前たちが突然現れた二人だな。私は織斑千冬」

「俺は左翔太郎」

「僕はフィリップ」

「早速で悪いが、色々と話を聞かせてもらうぞ」

翔太郎とフィリップは顔を見合わせ、翔太郎が説明することに……

「何から話せばいいか……俺達は風都でドーパントと戦ってたときにドーパントの攻撃を受けてこの世界に来たんだ。」

と説明すると、千冬はこう言った。

「風都？ドーパント？なんだそれは？」

翔太郎とフィリップは自分たちの世界、風都やドーパントについて説明をした。そして……話が終わると千冬は少し考え込んでいた。

「風都にドーパント。聞いたことがないな。二人は別の世界の人間ということか。さっき二人が話していたガイアメモリというものを見せてもらっていいか？」

翔太郎とフィリップは千冬にジョーカーメモリとサイクロンメモリを見せた。

「ガイアメモリには地球のありとあらゆる記憶が記憶が詰まってる。俺の場合は切り札の、フィリップは風の記憶がある。他にもあと六つある。俺とフィリップはこの二つを使って、仮面ライダーに変身するんだ」

「翔太郎。実際に見せたほうが早い。」

「そうだな。左、フィリップ。付いてきて……」

と千冬が言いかけた瞬間、突然一夏が入ってきた。

「千冬姉、アリーナに……」

「ここでは先生と呼べ。」

千冬は出席簿で一夏の頭を叩く。どうやら二人は姉弟のようだ。

「それで、どうした?」

「そうだった。アリーナに急に黒と緑のバイクが出てきたんだ。」

一夏の言葉を聞いて、フィリップは……

「どうやら、ドーパントの攻撃に巻き込まれたのは僕らだけじゃなかったみたいだね。」

四人はアリーナに向かうのだった。

第2話　Tとの出会い／世界について（後書き）

六甲水「次回は戦闘あたりとWのＩＳが登場です」

第3話　wの覚醒／二人で一つのＩＳ（前書き）

六甲水「今回はＷのＩｓ登場です。ちなみに翔太郎とフィリップの専用のはありません」

第3話　wの覚醒／二人で一つのＩＳ

四人がアリーナに向かっている

「そうだ。異世界の住人なら、先にお前達にはＩＳの事を話しとかないとな」

「ＩＳ……？」

「ＩＳ。正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツだが、従来の兵器よりも能力が高い。そして、このＩＳ学園はＩＳ操縦者育成機関だ」

「いわゆる変身可能なスーツか。」

「Ｉｓか。興味深い。ゾクゾクするね。僕らには乗れないのかい？」

「残念ながら、何故か分からないことにＩＳは女にしか使えない」

「ん、そこの奴は男だけど……まさか、」

「左、一夏は男だぞ。オカマなんというつまらないギャグを言うなら叩くぞ」

と千冬が翔太郎を睨みながら言った。翔太郎は「すみません」と言うのだった。

「確かにＩＳは女にしか使えないが、一夏は異例で『世界で唯一ＩＳを扱える男子』なんだよ」

「世界で唯一か……」

「着いたぞ。ここがＩＳアリーナだ」

ＩＳアリーナに入ると、フィールドの中心に緑と黒のバイクがポツンとそこにあった。

「どうやらハードボイルダーもこちらに着いていたみたいだな」

バイクの前には箒がまじまじとバイクを見ていた。

「箒、先生呼んできた。」

「篠ノ之。待たせたな」

箒は四人の姿に気が付き、一礼をし箒は翔太郎とフィリップに挨拶をした。

「はじめまして、篠ノ之箒です。」

「左翔太郎だ。んで、こっちは……」

「フィリップです。」

挨拶が終わり、翔太郎とフィリップはハードボイルダーに乗り壊れてないか確かめた。

「どうやら、壊れてないらしいな」

「そうみたいだ」

二人は確認し終わると、千冬が二人にある頼みをした。

「お前たちが言っていたWに変身をしてもらっていいか？」

「そうだな。」

と翔太郎はポケットからダブルドライバーを取り出し、腰に当てるとベルト状のデータ転送ケーブル・コネクションベルトリングが伸長し、装着されると同時にフィリップの腰にも同じ物が出現して装着される。

ジョーカー

と翔太郎はスロットにメモリを挿し込み、フィリップは……

「篠ノ之箒。僕が倒れるから体を頼んだよ」

「え、はい」

箒は戸惑いながら答えると、フィリップはスロットにメモリを挿し込みメモリが翔太郎の方に転送され、フィリップは倒れた。

「あ、危ない」

箒は何とかフィリップの体を支える。翔太郎は両手でスロットを左右にひらくと

サイクロンジョーカー

と翔太郎の体がだんだんと変わり始め、左側が黒、右側が緑。首にはマフラーを身につけた姿となった

「これでどうだ？」

と三人に声をかけると三人はそれぞれ

「これが仮面ライダーか」

「すげぇ、」

「かっこいい」

と感想を述べる。すると右側の目が点滅した。

「これで仮面ライダーについて認識してもらったみたいだね。」

とその時だった。いきなりハードボイルダーから声が聞こえてきた。

『ＩＳ、初期設定モード開始します』

「『はぁ？』」

突然音声が流れ、何が何だか分からなくなったＷ

『マスター認証、左翔太郎、園崎来人改めフィリップ。ハードボイルダー改め、個体名称を登録してください』

「個体名称？」

「二人とも、何でもいいＩｓに名前をつけろ」

千冬に言われ、Ｗは悩んだ。

「どうする？フィリップ？」

『そうだね。ハードボイルダーでもいいけど、せっかくだからこんなのどうだい？ｗボイルダー」

「いいぜ、気に入った。ｗボイルダーだ」

『了解。個体名称・ｗボイルダーを登録しました。ＩＳモード、初期設定完了。起動します』

ハードボイルダーが分解され、ｗの体全体に黒と緑の装甲が纏う。状況を理解できていない一夏たちは驚きを隠せなかった。

「千冬姉、これは……？」

「わからん。だが、男で二人目と三人目のＩＳ起動者が現れたと言うことだ」

「違うぜ。先生。これは俺達の」

『僕達の』

「『二人で一つＩｓだ。』」

と言う二人。千冬はある事を決意し、

「左、フィリップ。二人に提案がある。」

『提案？』

「二人とも学園に入れ」

「「……えええええええええええええええええっ！？」」

一夏と箒は絶叫し、wも何が何だか分からなかった。

（【俺ら（僕ら）学生という歳じゃないんだが】）

こうして、翔太郎とフィリップの二人は学園に入ることに……だが、それは探偵業よりも仮面ライダーよりも辛いことだった。何故ならこのＩＳ学園の生徒は男子は一人でそれ以外が全員女子だからである……。

第3話　wの覚醒／二人で一つのＩＳ（後書き）

本当は、リボルギャリーも来てハードタービュラーで戦う設定にしたかったけど、折角のＩｓなので……

設定　更新　5月7日（前書き）

今回はｗのＩｓ設定と時間軸です

設定　更新　5月7日

時間軸。

Wはオーズと一緒に仮面ライダーコアを倒して、亜樹子の結婚式を終えてからの数日後の話です。

Ｉｓはセシリアとの戦いが終わった後です。

ちなみに、コレとは別でやってるオーズとまどか☆マギカのオーズとは同じです。少しネタバレですが、Ｉｓの世界にディケイドも来て、ディケイドと一緒にまどか☆マギカの世界に行き、再びＩｓの世界に戻るという話を考えてます。

Ｉｓ設定

ｗボイルダー

仮面ライダーＷの専用Ｉｓ。基本的には量産機と同じ性能だが武器がついていないが、メモリチェンジで性能が変わる。

基本フォーム

サイクロンジョーカーモード

武器を持たないが、格闘戦で主に戦う。Ｉｓ状態でのマキシアムドライブが可能。

ヒートメタルモード

メタルシャフトを使って攻撃が可能。

ルナトリガーモード
トリガーマグナムを所持している。ルナの力で弾道を曲げることもできる。

ハーフフォーム

三つの基本フォーム以外のフォーム

サイクロンメタルモード

サイクロンとメタルの機能を持ち合わせたフォーム

サイクロントリガーモード

風の弾丸を撃つことが可能にしたフォーム。

ヒートジョーカーモード

サイクロンジョーカーモード以上の肉弾戦向きのフォーム

ヒートトリガーモード

炎の弾丸を打ち込むことが可能なフォーム。だが、力が強すぎるため長時間での使用が難しい

ルナジョーカーモード

肉体の形状を自由自在に変化させるため変則的かつ正確な攻撃が可能になるモード。中距離での戦闘向き

ルナメタルモード

武器の形状を自由自在に変化させる攻撃が可能。メタルシャフトをムチのように使える。

ファングジョーカーモード

ファングジョーカー専用のモード。両腕と両肩と両足にセイバーが展開可能である。Ｗでのファングジョーカー以上の性能がある。

エクストリームモード

エクストリーム専用のモード。通常時のエクストリーム以上の能力がある。現時点で最強のモードであるが、まだ本来の力が発揮されていない。

アクセルトライアル

アクセル専用Ｉｓ。左腕にガトリング砲『アクセルバスター』右腕に『アクセルブレード』を装備しており、エンジンメモリを入れると『ジェット』『エレクトロリック』『スチーム』などの攻撃が可能。トライアルメモリを使うと装甲が外れ、白と青のＩｓに変わりスピードも上がる。

メモリスロット

フィリップが作った一夏たち専用の装備。メモリを入れることでそのメモリの能力にあった攻撃が可能。

『火熱天牙月』

鈴がヒートメモリを使うことで、炎熱変化で相手に向かって炎の剣で攻撃が可能

『鋼落白夜』

一夏がメタルメモリを使用することで、零落白夜の刃が銀色となり攻撃力も上がり、固い装甲も貫くことが可能。ルナとヒートとサイクロンの組み合わせで能力が追加せれていく。

『切落白夜』

ジョーカーメモリを使うことで、零落白夜の刃が黒になり、使用者自身の身体能力も上がる。一撃必殺の切り札の力を持っている。

『疾風・風椿』

空裂に風の力が宿り、神速の斬撃が使えるようになる。現時点ではジョーカーとの組み合わせでどうなるかは分かっていない。

エクストリームメモリ

銀の福音戦で一夏と箒が使用した。本来なら気もちが通じ合った二

人で使用した場合のみ、膨大のエネルギーで相手を倒すことが可能。一人でも使用できる。形はメモリではなく、指輪となっている。現在は箒が所持している。

悪のライダー

仮面ライダーブラット

オルターリーンが黒いベルトを使用し変身した姿。自分の血を自由自在に扱うことが可能。だが、通常時では実力の半分も出しておらず、Ｉｓを使用することで本気の実力を発揮する。それでもディケイドを圧倒するほどの強さ。必殺技は血を自分の脚に纏わせ、ドリル状に変えて相手を貫く『ブラッティーブレイク』

他にもあと二人ほどライダーがいるらしい。

第４話　ｗの覚醒／男子３人他女子（前書き）

今回は翔太郎たちが転入してきます。

第４話　ｗの覚醒／男子３人他女子

翔太郎とフィリップの二人は千冬の提案でＩＳ学園に入ることとなったが……

「おいおい、この歳になって制服着るのか」

「さすがに僕らは着なくていいんじゃないのかい？」

と千冬に与えられた部屋で二人は制服を着るかどうか話し合っていた。とりあえず翔太郎はいつものソフト帽に制服を、フィリップも制服を着た。

「そういえば、フィリップ。地球の本棚に入ることは可能なのか？」

地球の本棚とは、地球の記憶の全てが存在するアカシックレコードのような精神世界でフィリップのみがそこにアクセスすることが可能だ。だが、今翔太郎とフィリップがいる世界は異世界だ。なら地球の本棚に入ることは出来ないと翔太郎は思っていたが……

「昨日の夜、試しに入ってみたけど、入ることが可能だけど、しばらくこの世界に慣れさせないと完全には検索することが出来ない。」

「まぁ、入れることは出来るんだな。とりあえず時間だ。行くか」

「そうだね。」

二人はダブルドライバーとメモリを持って、部屋を後にした。

ショートホームルームの時間が迫り、二人は職員室でＩＳ学園の教師に挨拶すると担当教師である千冬ともう一人。

「始めまして。私は１年１組の副担任の山田真耶です」

緑の髪に優しそうな容貌の女性、山田真耶だった。

「俺は左翔太郎。ハードボイルドな探偵だ」

「フィリップです。よろしく山田真耶先生。」

「はぁ、ハードボイルドな探偵ですか。」

「ハードボイルド？左の性格からしてハーフボイルドじゃないのか？」

「織斑千冬先生。正解。」

「おい、」

と軽い挨拶を交わし、そして、これから一緒に過ごしていくことになる１年１組の教室の前についた。

「左、フィリップ。私が呼ぶまで待ってろ」

と千冬はそう言い残し、真耶と一緒に教室に入っていった。

「それにしても、高校か。懐かしいな」

「僕の場合は行くことができなかったからね」

「なら、今ここで学校生活を楽しめばいいさ。」

二人は学校生活を楽しみにしていたが……千冬に呼ばれた瞬間、苦労が続く学校生活になるとは思っていなかった。

「入れ、左、フィリップ」

千冬の呼び出され、翔太郎とフィリップが教室の扉を開けて中に入る。

（な、なんじゃこりゃ。一夏以外全員女子かよ。おい、フィリップ知ってたのか？）

（翔太郎。Ｉｓは女性にしか扱えない。なら学生は全員女性に決まってるだろ）

（そうだった。）

と二人は小声で話していると、千冬は咳払いをし、二人に自己紹介をするようにとアイコンタクトをされ、心を落ち着かせて自己紹介を始めた。

「はじめまして、左翔太郎だ。ハードボイルドな探偵をやっている。」

「フィリップ。翔太郎の相棒だ。」

二人は頭を下げ、自己紹介を終えると教室は沈黙に包まれた。

（し、失敗したか？）

（いきなりハードボイルドな探偵なんていうからね。当たり前の反応だと思うよ）

「き」

「「き？」」

「きゃあああああああああああああああああああああああああああああああ」

突然、クラスの女子全員（篝とセシリア以外）が大声で叫びだした。

「男子よ。男子」

「二人ともイケメン」

「ハードボイルドな探偵ですって」

「フィリップくんも不思議な感じがしてなんかいい」

（とりあえず、）

（あぁ、歓迎されているみたいだね）

「二人とも、空いてる席に座れ。」

こうして、翔太郎とフィリップの学生生活が始まるのだった。

第４話　wの覚醒／男子３人他女子（後書き）

次回こそは戦闘をやりたいです。

第5話　Sとの勝負／新しき必殺技（前書き）

今回は模擬戦などをやりたいです

第5話　Sとの勝負／新しき必殺技

一夏と翔太郎とフィリップの三人は更衣室で汗だくになっていた。
一時間目は訓練だが、更衣室まで行くまでずっと女生徒に囲まれ、何とか逃げ延びていたのだった。

「大丈夫ですか？翔太郎さん。フィリップさん」

「はぁ、はぁ、これはさすがにきついな。」

「あぁ、これが噂に聞くハーレムというものなんだね」

と翔太郎とフィリップは息を整えながら答えた。

「とりあえず、着替えましょう。遅刻すると先生に怒られますから」

そう言って、一夏は翔太郎とフィリップにＩＳスーツを渡すが……

「俺達は着替えなくっていいだろう。」

「あ、そういえば……」

「とりあえず、このまま行こうか」

翔太郎とフィリップの二人は一夏の着替えを待ち、三人でグランドに向かった。

グランドに着くとフィリップは千冬の方に行き、何かを話していた。
ちなみに、翔太郎とフィリップは学生服のままで授業をうけることに女子たちはぼそぼそと話していた。

「あの二人、Ｉｓスーツいらないのかしら？」

「きっと、必要がないくらい凄いのよ」

「それだったら、織斑くん以上に強いってことよね」

といった具合の話をしていた。

「よーし、全員整列。」

千冬は手をたたきながら、全員を整列させると、千冬はある言い始めた。

「左、フィリップ。お前ら、セシリアと織斑と模擬戦をしろ」

「なっ！？」

「ｗボイルダーの性能を確かめたいからね。さっき織斑千冬先生に提案したのさ」

「お前、最初から言えよ」

「あら、左さんとフィリップさんは専用機をお持ちなんですか？」

と翔太郎とフィリップの前に金髪の少女、セシリア・オルコットがやってきた。

「いや、俺とフィリップがそれぞれ専用機持ってるんじゃなくって、Wとしても専用機だ」

「？話がよくわかりませんが、いいでしょう。私と一夏さんが一緒に戦いましょう」

セシリアは耳についている蒼のイヤーカフスが一瞬輝き、セリシアの専用機、中距離射撃型ＩＳ『ブルー・ティアーズ』を起動させる。

「俺無しで話すすめるなよ。はぁ、しょうがないか」

一夏も腕輪が一瞬輝き、一夏専用機、近距離型Ｉｓ『白式』を起動させた。

「じゃあ、行くか。フィリップ」

「あぁ、」

「「変身」」

二人は仮面ライダーｗに変身した。ちなみに、フィリップの体は千冬が抱えた。セシリアや他の女子は翔太郎の姿に驚いていた。

「な、な、なんですの？あの姿は」

「フィリップくんが倒れちゃった。どうしたんだろう？」

「かっこいい。何あのスーツ。」

他の女子が驚いてる中、一夏や箒はとくに反応がなかった。

「じゃあ、行くか。」

Wはスタッグフォンでハードボイルダーを呼び出し、さらにwボイルダーを起動させた。

「あの、左さん?そんな武装もなしで戦うんですの?」

セシリアの言うとおり、wボイルダーには武装らしきものがない。

だが、フィリップはセシリアにいった。

『それは戦ってみれば分かるよ』

「あら、ずいぶん強気ですこと、行きますわよ一夏さん」

「あぁ、」

「では、セシリア&織斑対仮面ライダーwの模擬戦を始める」

千冬の合図にセシリアはレーザーライフル「スターライトmk――」でwを狙い撃つ。

「行きますわよ!」

「セシリアは中距離射撃か。どうする?フィリップ」

『まずは、織斑一夏を倒そう。近距離戦ならサイクロンジョーカー

で戦える』

「よし、行くぞ。一夏」

Wはセシリアの攻撃を避け、一夏に接近した。

「こ、来い」

一夏は雪片弐型でwを攻撃するが、あっさり避けられ、蹴りを食らった。

『やはり、このフォームはWとしての基本能力は変わらない。なら、一気に行くよ翔太郎』

「あぁ、」

wはジョーカーメモリを右腰にあるマキシマムスロットに挿し込む。

『ジョーカーマキシマムドライブ』

その瞬間、wボイルダーの装甲が緑と黒に輝きだした。

「普通なら、ジョーカーエクストリームだが、この状態なら……ISジョーカーエクストリームだな」

『名前は君に任せるよ。』

Wは高く飛び上がり、そのまま一直線に一夏に向かっていくと同時に体がまっぷたつに割れた。

「わ、割れた」

「な、なんて非常識な技を……」

一夏とセシリアは驚いていた。確かにこんな攻撃方法なんて絶対に見たことがないはずだ。

「『Ｉｓジョーカーエクストリーム』」

攻撃は見事に通り、白式のシールドエネルギーは一気に減らされ、一夏はそのまま戦闘不能に、

「一夏さん!?やりますわね。お二人とも。ですが、私はそうは行きませんわ」

セシリアは銃口をｗに向ける。だが、ｗは二つのメモリを取り出した。

「今度はこれだ、」

『ヒート』『トリガー』

ｗの姿が赤と青の姿に変わると、ｗボイルダーの色や形も変わった。色は右側が赤、左側が青になり、左手には普段使うトリガーマグナムが二丁あった。一つはいつもの、もう一つはＩｓ専用の普段のトリガーマグナムの一回り大きくなっていた。

「今度はお前だ。」

「来なさい」

第6話　sとの勝負／零ｖｓ月

「フォームを変えることができるのか」

地上で、セシリア＆一夏ｖｓ仮面ライダーｗの戦いを見てそう呟く千冬。他の女生徒はｗのフォームチェンジに驚いていた。

「それに、バリアエネルギーを一気に削り切って、一夏を落としました」

箒も三人の戦いを見て冷静に分析をしていた。

「あのマキシマムドライブというのはいわば必殺技みたいなものだろう。あのフォームチェンジに必殺技、一体いくつまであるんだ？」

何度目かの爆発音、ｗはセシリアの攻撃をさっきから炎の弾丸で相殺している。セシリアにも少し焦りを感じていた。

（やりますわね。左さんとフィリップさん。ですが、私もまだ本気を出しておりませんわ）

セシリアはビット型の武器を展開させ、四機もビットが不規則な動きをしてｗを翻弄する。

「これはすごいな」

『あぁ、だがこれならどうかな?』

『ルナ』『トリガー』

wはフォームを変え、今度は金色と青の姿になった。そして、トリガーマグナムから金色の弾丸を撃つ。だが、その弾丸はビットに当たらなかった。

「あら、さすがに早すぎて全部破壊することができませんでしたか?」

『いいや、これでいいんだよ。』

フィリップがそう言った瞬間、ビット全てが爆発した。セシリアや箒、他の女生徒も何が起きたか分からなかった。だが、千冬だけが気がついた。

「弾丸が曲がった。これはすごいな」

「な、弾丸が曲がるなんて……どういった能力ですの」

『ルナのメモリの力だ。腕を伸ばしたり、さっきみたいに弾丸を曲げたりね。』

「これで決めるぞ。フィリップ」

『あぁ、』

『トリガーマキシマムドライブ』

トリガーメモリをトリガーマグナムのマキシアムスロットに挿し込み、セシリアに向かって撃った

「『トリガーフルバースト』」

放たれた弾丸はさっきまで撃っていた弾丸とは大きさが変わっており、四つも金色の弾がセシリアに直撃し、勝負を決した。

「模擬戦勝者左&フィリップ。いや仮面ライダーw」

下に降りると同時に変身を解除すると、千冬から言われたのがそれだった。

「お強いのですね。左さん、フィリップさん。いいえ、仮面ライダーw」

「何もできずにやられちった」

セシリアと一夏が翔太郎とフィリップに近づく。

「二人とも強かったぜ。一夏もあの刀が当たってたら結果が変わってたかもな」

翔太郎はそう言って、一夏に握手をした。フィリップはというと

「セシリア・オルコット。君のビットも展開中に君自身で攻撃していたら危なかったよ」

「えぇ、展開中は他の攻撃ができませんから……ちなみにフォームチェンジはいくつまであるんですか？」

「全部で１２種類に変わることができるさ。だけど、三つは少し違った変身をしなければならないからね。」

「それを抜いても、全部で９つなんて仮面ライダーって凄いんだな」

こうして、三人の模擬戦が終わりを告げた。だが、このあとあるクラス対抗戦であんな事件が起きるとはこの時、誰も思っていなかった。

第7話　Rの登場／歓迎パーティー（前書き）

六甲水「今回は鈴が登場するまでやります。ちなみ全身装甲との戦いでファングを活躍させます。」

第7話　Rの登場／歓迎パーティー

模擬戦を終えたその夜。

「織斑くん、クラス代表おめでとう～！」

一夏のクラス代表就任パーティーと。

「左さん、フィリップくん。これからよろしく～」

翔太郎とフィリップの歓迎パーティーが行われていた。一夏や翔太郎はこういうのは苦手で、苦笑いをする。フィリップに至っては普段どおり隅のほうで本を読んでいた。

「一夏さんと左さんはこういうパーティーは苦手ですの？」

一夏の右隣に座るセシリアが二人に質問してきた。ちなみに左隣は箒であるが少し機嫌が悪かった。

「ま、まぁ、あんまり慣れてないし」

「俺も依頼とかで行ったことがないからな」

「そういえば、左さんとフィリップさんは探偵やってるんだっけ？」

一夏が翔太郎に質問をしてきた。確かにこの世界ではあんまり探偵としての能力は必要にされていないような……

「まぁな。俺とフィリップ。あとは自称所長の亜樹子の三人でやっ

てるんだ。」

「自称？」

「まだ俺はアイツを所長だって認めてない。」

翔太郎は拳を震わせながら言った。一夏とセシリアは違う話題にした方がいいと思い、セシリアが翔太郎の帽子について質問した。

「そ、そういえば、左さんはいつも帽子をかぶっていますが、何か思い入れでもあるんですか？」

とセシリアが聞いた瞬間、翔太郎は一瞬暗い表情をした。そのことについて、箒だけが気がついた。

「あぁ、帽子は男の目元の冷たさと優しさを隠す。ある人が俺に教えてくれた言葉だ。それからずっと帽子が似合うように努力をしているんだ」

「まぁ、帽子というのはそういう意味が……」

「その人は今も……」

「あぁ、今も俺とフィリップを見守ってる。（心の中で……）」

（心のなかで？もしかしてその人は……）

翔太郎の小声でいった言葉を聞いた箒は翔太郎の大切な人はもういないんだと気がついた。すると、ボイスレコーダーとカメラを持ったメガネをかけた女子が来た。

「話題の新入生のインタビューに来ました！　新聞部副部長二年の黛薫子です！」

薫子は一夏にインタビューすると、次に翔太郎にインタビューする。

「仮面ライダーである左さんに質問を、お二人は一つのＩｓを使えるらしいですが、何か感想は？」

「あぁ、アレは俺とフィリップの大切なモノだと思う。これでいいか？」

「はい、フィリップさんも同じことを言ってました。それじゃあ、みんなで写真を撮ろうか！」

クラス全員で集まり、写真を撮る。その際、箒とセシリアは一夏にくっついた。それを見てフィリップはあることに気がついた。

「なるほど、あの二人は織斑一夏に好意を持っているのか。彼にはそこまでの魅力というものがあるんだね」

数日後。

一組ではとある話題で持ちきりだった。それは、中国の代表候補生

の転校生が来るらしい。そんなことを一夏達が話していると、箒とセシリアが一夏に迫る。

「今のお前に女子を気にする余裕はないぞ！　来月にはクラス対抗戦があるんだからな！」

「そうですわ一夏さん！　対抗戦に向けてより実践的な訓練をしましょう！」

クラス対抗戦とは一年生のそれぞれのクラスからクラス代表を一人ずつ選び、トーナメント式で戦うのだ。

「お、何か盛り上がってるな」

すると翔太郎とフィリップも教室に入ってきた。

「どうやら、隣のクラスに代表候補生が来たことで盛り上がってるみたいだね。」

「代表候補生？あぁ、セシリアと同じヤツのことか。だけど、そいつが今度あるクラス対抗戦で必ず出るってわけじゃ……」

翔太郎がそう言った直後だった。

「残念だけど、二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には勝てないから」

一組の教室にツインテールの可愛らしい少女が入ってきた。

「お前……鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。久しぶりね、一夏！」

第7話　Rの登場／歓迎パーティー（後書き）

次回は鈴の話とファングメモリの話をやります

第8話　Rの登場／牙との出会い（前書き）

六甲水「今回はファングメモリが登場です。」

一夏「前書きからネタバレか」

第8話　Rの登場／牙との出会い

昼休み、一夏、箒、セシリア、翔太郎、フィリップの五人は食堂に向かっている時のことだった。鈴は一夏を待ち伏せするために早めに食堂に向かう途中、あるものを見つけた。

「何？このおもちゃ？」

廊下の隅に恐竜のおもちゃが落ちていた。鈴は最初誰かが落としたおもちゃかと思い、拾い上げると……

「きゃあ、動いた。」

拾い上げた瞬間、必死に抵抗してきた恐竜のおもちゃ。でもボロボロで直ぐに動くのをやめた。鈴はどうしようかと思い、とりあえず、一緒に食堂に向かうことにした。

鈴と合流すると、翔太郎とフィリップは鈴が持っていたものに驚いていた。

「お前、それどこで拾ったんだ？」

「えっ、廊下の隅で拾ったんだけど、もしかして、二人の物なの？」

鈴は翔太郎に恐竜のおもちゃを渡すとフィリップはおもちゃの損傷

をチェックしていた。

「うん、次元転送に巻き込まれたせいでいろんなところが壊れてるね。でも、直せば何とかなりそうだ」

「それ、一体何なんですか？」

一夏がフィリップが持っているものを挿すとフィリップは答えた。

「これはファングメモリ。Wの新しい力さ。礼を言うよ。凰鈴音。翔太郎。僕は早速直しに行ってくる。先生には適当なことを言っておいてくれ」

「あ、おい、昼飯は？」

「大丈夫さ。」

ファングメモリを持って食堂を後にしたフィリップ。だが、一夏達はある事を思い出していた。

「「「「次の時間、織斑先生の授業なのに（なのですが）……」」」」

その後、フィリップは千冬によって強制的に部屋から引き連れ出され、グランドを１０周するハメになったのはまた別の話である。

第8話　Rの登場／牙との出会い（後書き）

六甲水「次回はクラス対抗戦の話です」

第9話　Hの強襲／突然現れた未確認（前書き）

今回は鈴との戦いです。

第9話　Hの強襲／突然現れた未確認

クラス代表戦当日。

ファングが来た数週間、フィリップは放課後になるといつも部屋に引きこもり、ファングメモリとエクストリームメモリの修理をしていた。だが、フィリップがいなかった間、鈴と一夏の関係が何故か悪化していた。気になったのでフィリップは箒に尋ねると……

「『料理の腕が上がったら毎日酢豚を作る』……？　なるほど、凰鈴音は結婚してくれと言ったつもりが、織斑一夏には、ただ酢豚を作ってもらえると思っていただけか。彼は稀に見ない鈍感だね」

「一夏は本当に鈍感だからな。それなのに三人もの女性を惚れさせてるからな」

翔太郎の言葉を聞いた瞬間、反応する箒とセシリア。

「な、何を言ってるんだ。左さん。私はべ、べ、別にあんなヤツのことを……」

「そ、そ、そうですわ。左さんはどうなんですか？そういった人はいるんじゃなくって？」

翔太郎はしばらく考え込んだが、

「そういえば、そういった人はいなかったな。」

「意外ですわね。フィリップさんは？」

「……僕はいたけど……」

フィリップは暗い顔をした。セシリアと箒は何かを察し、これ以上は聞かないことにした。

ＩＳアリーナにて、一夏と鈴音が対峙する。鈴音のＩＳ『甲龍』は一夏の『白式』と同じ接近戦型である。大型の青竜刀『双天牙月』を構え、一夏を見つめる。

「行くわよ、一夏！」

「望むところだ！」

一夏と鈴音の戦いが始まる。開始早々、鈴音の両肩の衝撃砲『龍砲』により、一夏が追い込まれていく。そして、一夏は姉の千冬がかつて使用していた剣、『雪片弐型』を握り締め、『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』と呼ばれる技能を使っての奇襲攻撃を行おうとした。

「うおおおおっ！」

雪片弐型の刃が鈴音に届きそうな時だった。

その時、空から突然ＩＳアリーナに直撃した。その姿は紛れもないＩＳだが、『全身装甲』の異形だった。

「アレは……ＩＳなのか？」

翔太郎はモニターで突然現れた全身装甲について千冬に聞いたが、翔太郎の質問にフィリップが答えた。

「今、あんなＩＳは作られていない。それにあれは無人機のようだ。」

「無人機って、一体誰があんなものを作ったというのですか？」

セシリアが千冬に問い詰める中、箒だけはある可能性を思い浮かべていた

（まさか、姉さんが……だけど……）

一夏と鈴音は先生たちが来るまで敵ＩＳを食い止めると言い出した。だが、問題はそれだけではなかった。ＩＳアリーナの遮断シールドがレベル４に設定され、扉が全てロックされているしない。つまり、避難することも救援に向かうこともできない。

「どうにかしてお二人の元にいけませんの？」

「早く、ロックを解除しないと会場にいるみんなが……」

箒とセシリアが山田先生に詰め寄るが、山田先生は焦りながら答えた。

「無理です。こうなった以上、解除するのが困難です」

「そんな、それでは私たちはあの二人をここで見守るしか無いですの？」

「……一夏」

二人が落ち込む中、フィリップがファングメモリをもってある提案をした。

「それなら、僕があの二人の援護しにいくよ。」

「フィリップ。お前、ハッキング能力でもあるのか？」

千冬がフィリップにそう質問すると、フィリップは首を横に振り答えた。

「文字通りネットワークの中に入るんだ。頼んだよ。エクストリームメモリ」

すると突然現れたエクストリームメモリがフィリップを粒子化させた。それを見て驚く三人。エクストリームメモリは扉をぶち破り、アリーナを目指した。

一夏と鈴音は敵ＩＳの攻撃を回避し続けていた。そんな中、一夏は敵ＩＳの姿や行動から、人間ではなく、機械で動いているとわかった。すると。敵Ｉｓが一夏に向かって攻撃をしようとした。一夏は防御が間に合わず攻撃を喰らいそうになった瞬間、突然現れた鳥型のロボットに攻撃が妨害した。

「あれは……」

そして、粒子ウェーブが現れるとそこからフィリップがいた。

「間に合ったみたいだね。エクストリームはロックの解除を、」

エクストリームをロック解除向かわせるとフィリップはファングメモリを取り出しダブルドライバーを装着した。

「まさか、フィリップさんも変身を……」

「あぁ、行くよ。翔太郎」

「あぁ、箒、俺の体を頼んだ」

「え、は、はい」

『ジョーカー』

『ファング』

「「変身」」

ファングメモリを変形させ、ダブルドライバー挿し込み、送られてきたジョーカーメモリを挿し込むと

『ファング・ジョーカー』

フィリップの体が右側が白の、左側が黒の仮面ライダーWになった。
今までの変身と違って、体中にはギザギザがあった。

『「さぁ、お前の罪を数えろ」』

第１０話　Ｈの強襲／二枚の牙（前書き）

今回はファングジョーカーの新しい武器が登場。とは言っても、タイトルからしてネタバレですけど、

第１０話　Ｈの強襲／二枚の牙

ファングジョーカーに変身したフィリップ。一夏と鈴はＷの元に行った。

「まさか、フィリップさんも変身できたんですね」

「あぁ、普段は翔太郎がボディサイド、僕がソウルサイドだけど、このファングジョーカーは僕が戦うためのフォームだよ。」

「あのおもちゃがこんな能力があったなんて……」

初めてＷの変身を見た鈴は驚きを隠せなかった。二人がフィリップの変身について話していると、ソウルサイドの翔太郎が……

『おい、話してる場合じゃないだろ。今はあのＩｓをどうにかするぞ』

「そうだったね。二人とも、ここは僕がやる。二人は観客の救助を……」

「いやだ。俺も最後まで戦う。」

「そうよ。ここまでやったんだから最後までやるわよ」

「そうか、なら、二人とも援護任せたよ」

「「はい」」

wは敵Ｉｓに向かって行く。敵Ｉｓもその動きに反応しビーム撃ってくるが、そのビームをWは避け、ビームは地面に当たったが、地面に2メートルほどのクレーターが出来た。

「これはすごい威力だね。」

『一夏達のおかげでアイツは今は飛ぶことが出来ないみたいだが……』

「そろそろ、飛ぶね」

二人の予想通り、敵Ｉｓは空に飛び上がり、上からビームを何発も撃ってきた。

「これはすごいね。なら……」

スタッグフォンを取り出し、ハードーボイルダーを呼び寄せるとwはあるメモリを取り出した。それ気がついた一夏は……

「フィリップさん、それは……」

「あぁ、Ｉｓを起動させるための鍵だ。今までは翔太郎が呼びかけるだけで起動できたけど、今度のためにこのメモリを作っておいたのさ。」

そう言って、wはメモリをハードボイルダーに付けたスロットにメモリを差し込んだ。

『インフィニット・ストラトス』

そう流れた瞬間、ファングジョーカーの体にＩｓが装備された。今までの装備と違って今度は白と黒の色になった。

「さぁ、行くよ」

ファングメモリのタクティカルホーンを一回弾くと『アームファング』と電子音が流れ、普段のｗなら右腕にアームセイバーを出現させているが、今回は違った。両腕にアームセイバーが出現したのだ。

『こりゃ、Ｉｓの力か？』

「そうみたいだ。行くよ」

二本のセイバーを外し、敵Ｉｓに突っ込むｗ。敵Ｉｓはビームで迎撃しようとしたが、Ｗの後方から鈴のＩｓ『甲龍』の龍咆にビームを相殺され、Ｗは接近する前に一夏が敵Ｉｓのシールドを破り、ｗは敵Ｉｓの両腕を切り裂いた。

「やった。」

「いやまだだ。」

敵Ｉｓは敵わないと思い、逃げ出そうとした。だが……

『ショルダーファング』

両腕にあったセイバーが今度は両肩に移り、ｗは二本の刃を敵Ｉｓに向けて放ち、敵Ｉｓは動きを妨害された。そして……

『ファングマキシマムドライヴ』

タクティカルホーンを三回弾くと今度は両足に移り、Ｗは高く飛び上がった。

「『Ｗファングストライザー』」

Ｗの二発の回し蹴りに二本の刃が敵Ｉｓを切り裂き、敵Ｉｓは爆発したのだった。

こうして、謎のＩｓ襲撃事件は終り告げた。だが、一夏と鈴とＷの戦いをある男が見ていた。それは……

「へぇー、おかしな世界に来たと思ったら、仮面ライダー会えるなんてね」

「メズールここにいるの？」

「さぁ、探してみないと分からないけど、今はここでメダル集めをしないか？ここでメダル集めたら、メズールも喜ぶよ」

「本当？なら、集める」

帽子に金髪の男と銀色の服をきた黒髪の男がいた。金髪の男の手には銀色のメダルがあった。

第１０話　Ｈの強襲／二枚の牙（後書き）

まさかのあの二人が登場です。まぁ、正体はあの二人ですが……

第１１話　Ｈの強襲／戦いを終えて……（前書き）

今回は全身装甲との戦いが終わった後の話です。とはいえ、ただの日常パートみたいなものです。

第１１話　Ｈの強襲／戦いを終えて……

一夏、鈴、フィリップの三人は戦いが終わった後、念の為に医務室で治療を受けていた。三人とも軽いケガだけだったので直ぐに治療は終わったが……

「一夏、無理しすぎだ。」

「そうですわ。いくら二人だけであんな恐ろしい物を相手にしようとして、」

「ご、ごめんなさい。」

「ちょっと、私やフィリップさんの心配は？」

「「あなたは（貴様は）黙ってて（ろ）」」

お見舞いに来た箒、セシリア、翔太郎の三人だったが、箒とセシリアは一夏に説教をしていた。鈴もその中に入り、喧嘩をする。翔太郎とフィリップはそんな４人の光景を眺めていた。

「こいつら、元気ありすぎだろ」

「確かにあんな戦いの後でよくやるよ。それにしてもあの無人機は一体何なんだろうね」

謎のＩｓの残骸は千冬と真耶の二人が今調べている途中だった。フィリップもその中に入りたかったが、千冬に断られた。ちなみに試合は無効となり、そのままクラス対抗戦は中止となった。

「あの場面で襲撃してくるというと、何か目的があると思うけど、」

「何のためにだよ」

翔太郎とフィリップは無人機の目的について話し合っていた。フィリップはある考えが思い浮かんだ。

（もしかすると織斑一夏が目的だったりして……だったら彼だけを狙えば良いはずだ。なのに、僕らも襲った。アレの目的は……）

フィリップはその考えは心のなかにしまいこんだ。まだ可能性だからだ。こうしてクラス対抗戦は終りを告げたのだった。

翌日のお昼、一夏、箒、セシリア、鈴は屋上で昼食を摂ろうと上がると、そこには翔太郎とフィリップの疲れ果てた姿があった。

「あのどうしたのですか？」

セシリアが二人に質問すると、翔太郎が答えた。

「昨日の事件。新聞部が写真撮ってたらしく、そのせいで女子に追い掛け回されてたんだよ。」

「これが噂のハーレム地獄か。なるほど、織斑一夏も大変だね。」

「翔太郎さん、フィリップさん。お疲れ様です」

「「「この三人も大変だな（ですわね）（だね）」」」

こうして翔太郎とフィリップは真の意味でハーレム地獄を味わうことになったのだった。

ドイツ、そこのある空港にある男女がいた。少女の方は銀髪に左目には黒い眼帯をしている。男の方は白いソフト帽に白いスーツを着ていた。

「教官、見送りありがとうございます。」

と少女は男に敬礼をする。女尊男卑の世界だが少女がこうして男性に敬礼をするのは珍しいことだ。

「礼はいい。学園の方に行ったら千冬の言うことを聞くんだぞ」

「はい、ですが、私は……教官の弟、織斑一夏の事が……」

「分かっている。あちらにいって彼の事をよく見ておくのだ。」

「はい。」

少女は荷物を持ち、そのまま立ち去ろうとした。だが、男が呼び止めた。

「ラウラ、例の事分かっているな」

「はい、１３個のガイアメモリの回収と破壊。分かっています。」

「俺も出来れば行きたかったが、まだやるべきことがある。千冬にガイアメモリについて報告しておく。もし何かあれば直ぐに俺を呼べ」

「はい、鳴海教官」

男の名前は鳴海荘吉。翔太郎の師匠で、フィリップに生き方を教えた人物だ。

第１１話　Ｈの強襲／戦いを終えて……（後書き）

おやっさん登場。なんで生きているかは臨海学校でやります。合流はするかどうかはまだ未定です。

第１２話　Ｖの衝撃／二人の転校生（前書き）

今回はシャルとラウラの登場です。

第１２話　Ｖの衝撃／二人の転校生

それは朝のショートホームルームの真耶の一言からだった。

「今日はなんと転校生を紹介します！　しかも二名です！」

『えええええええええええええええっ！？』

クラスの女子が驚く。当たり前の事だ、翔太郎とフィリップが入ってまだ一ヶ月ぐらいしか経過してないのに転校生が来るのだから。

「失礼します」

「……」

そして、クラスに入ってきた二人の転校生に、ざわめきがピタリと止まる。一人は金髪に人懐っこそうな顔のまさに『貴公子』の名にふさわしい男だった。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

シャルルはにこやかに一礼する。

『キャアアアアアアアアアッ！！！』

そして、このクラス二回目の歓喜の絶叫だった。

（どっかで見た光景だな）

と翔太郎がそんな事を思っていた。

「男子！　三人目の男子！」

「しかもまたうちのクラス！」

「美形！　守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてきて良かった～～！」

「もう、このクラスは最高！　全く違う五人の男子が居て！！！」

またクラスの女子が発狂し始めた。翔太郎と一夏は苦笑いをしていたが、フィリップはシャルルを見て何かを思いつめていた。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだ、自己紹介が終わってませんから！」

千冬と真耶の制止により、とりあえず静まるのだった。もう一人の転校生は銀髪に、黒眼帯をつけ、まるで氷のような空気を纏った『軍人』のような少女だった。

「……」

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

どうやらその少女――ラウラは千冬のことを知っているようだった。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

その一言でクラスに沈黙が走る。

（おい、クラスが白けてしまったぞ……）

翔太郎は溜息をつく。すると、ラウラは何故か一夏を睨みつけた。

（ん、何だ？まさかこの場で告白とか……）

ラウラは手を振り上げた。翔太郎はまずいと思い、止めに入ろうとした瞬間、

バシッ、

「っ！？」

すると、ラウラの手が何かによって弾かれた。ラウラの足元にはファングメモリがいた。

「やれやれ、いつの間に鞄に入り込んだんだい？ファング」

とフィリップが立ち上がりファングメモリを拾い上げた。

「全く何をやってるんだよ。フィリップ。」

翔太郎もフィリップのそばに近寄った。

「貴様ら、何者だ。」

ラウラは翔太郎とフィリップを睨んだ。翔太郎は帽子のかぶり直しこう言った。

「ただのクラスメートだ。」

「それにしては妙なものを持っているな。」

ラウラはフィリップが持つファングメモリを見る。確かにあまり見慣れたものではないから少しばかり興味が有るはずだ。

「まぁいい、今は私に喧嘩を売っているということだな。なら……」

ラウラは黒いレッグバンドを見せる。それは、ラウラの専用ＩＳの待機状態だった。

「ここでやるっていうなら……」

二人はガイアメモリを取り出すと、ラウラは少し驚いていた。

「それは……なるほどな早速見つかるとは……」

今にも喧嘩が始まりそうだった。クラス中にピリピリとした空気が広がる。

「二人共、その辺にしておけ」

千冬が仲介し、三人を止める。ラウラは無言で開いている席に座る。

「それとフィリップ、あまりそういったものを持ち込むな」

「分かった。ただまたファングメモリが紛れ込むかもしれない」

「今後、フィリップは私が持ち物検査してやる」

こうしてＨＲは終わったのだった。

第１３話　Ｖの衝撃／二人の過去と暗躍する男（前書き）

今回はあの人が登場です。今週のラウラの変化が凄かったです

第１３話　Ｖの衝撃／二人の過去と暗躍する男

朝から二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行うことになった。翔太郎とフィリップは着替える必要がないので、先にグランドに向かっていると、そこにはラウラがいた。

「貴様らか、着替えなくっていいのか？」

「あぁ、俺達は着替える必要はないからな」

「専用のスーツがあるからね」

「ふん、まぁいい。一つ聞きたい。お前らがさっき持っていたものは何だ？」

ラウラが翔太郎とフィリップが持っていたガイアメモリについて聞いてきた。その質問にフィリップが答えた。

「ガイアメモリだよ。興味があるのかい？」

「いや、別にないな。」

ラウラはまた翔太郎たちを離れた場所に行った。しばらくしてぞろぞろと女子たちが来た。

（彼女はガイアメモリについて何か知っているのか？）

グランドに全員が揃い並ぶと、千冬はセシリアと鈴音を呼び出す。
すると……。

「あああああーっ！　ど、どいてください～っ！」

空からＩＳを纏った真耶が制御不能で急降下してくる。

ドカーン！

一夏と激突し、土煙が舞う。土煙が止むと、翔太郎とフィリップはため息を付いた。どうしてそうなったのか、一夏が真耶を押し倒す形となっている。しかも、あろうことか一夏の手が真耶の豊満な胸を掴んでいる始末。

「うわっ！　ご、ごめんなさい！」

一夏は急いで真耶から離れる。

「ほう、これが俗にいうラッキースケベか。織斑一夏興味深いね」

「いや、そんな事言ってる場合じゃないだろ。一夏が鈴とセシリアに追われてるぞ」

一夏はセシリアのレーザーと鈴の双天牙月に追われていた。とりあえずｗに変身して一夏を助けたのだった。

真耶ＶＳセシリア＆鈴音の模擬戦闘が行われる。しかし、二人のコンビネーションが悪く、さらに元日本代表候補生である真耶の高い実力により、結果はセシリアと鈴音の大敗となってしまった。次に、訓練機ＩＳ『打鉄』で乗り方や動かし方の訓練を始まる。専用機を持つ、翔太郎＆フィリップ、一夏、セシリア、鈴音、シャルル、ラウラが教えることになる。すると、女子達は翔太郎＆フィリップ、一夏、シャルルを目当てに集まってくるが、千冬の一喝により静まるのだった。翔太郎＆フィリップが担当することになった数名の女子にＩＳの動かし方をわかりやすいように丁寧にフィリップが教える。そして、訓練が終わると、翔太郎とフィリップは一夏に呼び出される。

「左さん、フィリップさんお昼一緒にどうですか？」

「おぉ、いいな。」

「悪くないね」

「それじゃあ、またあとで、」

翔太郎とフィリップが屋上に行くとそこでは一夏争奪戦が始まっていた。箒、セシリア、鈴音はお手製の弁当を一夏に食べてもらおうと、奮闘している。それもあーん付きで……

「大変だな。一夏も」

「そうだね。」

一夏達をほっとくことにした翔太郎とフィリップは弁当を食べ始めるとシャルルが話しかけてきた。

「そういえば、翔太郎さんとフィリップさんはいつもいますけどどうしてですか？」

「ん、俺とフィリップは探偵をやっていて、フィリップは俺の相棒なんだ」

「あぁ、翔太郎には色々と助けられたからね。」

「へぇ～、探偵なんだ」

シャルルは嬉しそうにしていた。

「やっぱり誰かの影響だったりするんですか？」

と聞くと翔太郎とフィリップは表情を暗くした。

「あぁ、俺の師匠、鳴海荘吉って言う人がいるんだ。だけど……俺が勝手なことをしておやっさんは……」

翔太郎の話を聞いて、話を聞いていたシャルルだけではなく、騒いでいた一夏達も黙って話を聞いた。

「鳴海荘吉は僕にも生き方を教えてくれた。」

「生き方って？」

一夏がそういうとフィリップは自分のことを話しだした。

「僕は翔太郎と出会う前、子供の頃の記憶、家族の記憶がなく、ただガイアメモリを作っていたんだ。
自分で決めずにメモリを作った。それが僕の罪だった。今は僕と翔太郎の二人で罪を背負っているんだ。」

全員が静かになってしまった。

二人の男が屋上にいる一夏たちを見ていた。

「なるほどね、女子がほとんどいないんだ。」

「メズールいるかな?」

「さぁ、どうだろ。でも強い欲望を感じるよ。」

金髪の男が見た方向にはラウラがいた。

第１４話　Ｋの暗躍／新しき力（前書き）

今回は白式に新たな機能を付けます。

第１４話　Ｋの暗躍／新しき力

翔太郎、フィリップ、一夏、シャルルの四人はＩＳアリーナにて一夏の白式や戦い方について話し合う。

「ええとね、一夏がオルコットや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？　一応わかっているつもりだったんだが……どう思います？左さん、フィリップさん」

「そうだな、俺達の場合はフォームごとに戦い方が変わるからな。近距離、中距離、遠距離に分けられるから、」

「翔太郎さんとフィリップさんのＩｓはかなり特殊だよね。全部で１０フォームだっけ？」

「いや、僕たちは全部で１２フォームだよ。まだ見せていないフォームが二つあるからね。それに翔太郎一人で変身できるから」

「通常時でもかなり強くて、さらにＩｓでも生かせるなんて……反則じみてませんか？」

一夏は大きなショックを受け、落ち込む。

「あ、あはは……えっと、一夏の白式には後付武器がないんだよね？」

「ああ。何回か調べてもらったんだけど、バススロットが空いてないらしい」

「一夏の場合は織斑先生と同じワンオフ・アビリティー『零落白夜』に使用している」

フィリップが説明した『零落白夜』はシールドエネルギーをコストに、雪片弐型で相手のシールドを断ち切る技で、千冬曰わく、諸刃の剣である。

「姉弟だからで同じ能力を使えるのかな……？」

シャルルは腑に落ちない表情をする。

「なら、シャルルの銃でも撃ってみたらどうだ？色々と役に立つし」

「そうだね、一夏。僕のライフルを貸すからちょっと試し撃ちをやってみようか」

シャルルは一夏にライフルを貸し渡す。

「ああ。えっと……」

「そうじゃなくて、もっと脇を締めて」

「お、おう」

当然初めて銃を扱う一夏にシャルルはくっついて指導する。

（やっぱり妙だ。シャルル・デュノア、彼は男に見えない気が……）

フィリップはシャルルのことをずっと気になっていた。しばらくして射撃の指導が終わると、一夏は『速い』と言う感動を得た。

「織斑一夏、白式に新しい機能をつけてもいいかい？」

「へっ、いきなりどうしてですか？」

「まぁまぁ、ちょっとこれを白式の腕に付けてみてくれないか？」

そういって、フィリップが渡したのはマキシアムスロットだった。一夏は言われたとおりに付けるとフィリップはさらに二つのメモリを渡した。そのメモリをみて翔太郎は驚いていた。

「おいおい、それって、メタルとトリガーだよな。まさか俺のじゃあ……」

「いや、新しく作ったんだよ。ちょっとした実験も試したくってね」

「俺実験台にしないでくださいよ」

「まぁ、いいから、」

一夏はしょうがなくトリガーメモリをマキシアムスロットに入れると、

『トリガー』

と反応した瞬間、一夏の手にトリガーマグナムが現れた。それもｗが普段使っているものではなく、白いトリガーマグナムだった。

「それは白式専用のトリガーマグナム。これで射撃が何とかなるね」

「おぉ、これは凄い。こっちのメタルの方は……」

「そっちは雪片弐型にスロットを付けて、入れてみてくれ」

一夏が言われたとおりに入れると、

『メタル』

その瞬間、雪片弐型の色が銀色になった。

「これでしばらくはシールドエネルギーの消費が減るから、でも、マキシアムドライヴは使えるけど、一気にエネルギーが減るから気をつけて」

「分かった。」

すると、女子達がざわめきだした。上を向くとラウラがＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』を起動させ、こちらを睨みつけている。

「おい」

「……なんだよ」

ラウラの呼びかけに一夏が応える。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

と、いきなり戦いを挑んできた。

（なぜそこまで一夏にこだわる……？）

ラウラの一夏に対する異常なまでの執念に翔太郎は不快感を持つ。

「イヤだ。理由がねえよ」

一夏はすぐに断ったが、ラウラが逃がさなかった。

「貴様にはなくても私にはある！」

すると突然、左肩に装備された大型の実弾砲が発射された。すかさず翔太郎はWに変身し、ヒートメタルのメタルシャフトで砲弾を弾いた。

「危ないことをしやがって、」

『一体彼に何があるっていうんだい？』

「貴様……」

『そこの生徒！　何をやっている！　学年とクラス、出席番号を言え！』

騒ぎを聞きつけた担当の教師の声がスピーカーから響く。

「ちっ……今日は引こう」

ラウラはＩＳを解除し、アリーナゲートへと去っていく。こうして、この日は終わっていくはずだった。だが……

夜、ラウラはアリーナに一人でいた。

「織斑一夏、彼は私の手で排除する。だが、あの左とフィリップと言う男、何故彼らが教官と同じメモリを持っている。彼らは……まぁいい。今は織斑一夏を……」

「へぇ～強い欲望だね」

ラウラが後ろを振り向くとそこには金髪の男が立っていた。ラウラはすかさずＩｓを起動させようとしたが、突然突風に吹き飛ばされ、アリーナに落ち、そのまま気絶してしまった。

「さぁ、君の欲望を解放するんだ。」

男は怪人に姿を変え、ラウラの額にメダルを入れた。

「あとは生まれるのを待つだけだ。」

第１４話　Ｋの暗躍／新しき力（後書き）

カザリの活躍はラウラが暴走した後です。

第１５話　Ｋの暗躍／シャルルの真実（前書き）

今回はラウラがカザリに襲撃されている時と同じ時間に起きた話です。

第１５話　Ｋの暗躍／シャルルの真実

フィリップは一夏の部屋の前にいた。理由は昼間に白式にメモリの力を使えるようにするための試作品の改造が終わったのでそれらを渡しに来たのだ。

「織斑一夏。僕だ。入……」

『きゃあ』

扉越しから誰かの悲鳴が聞こえてきた。フィリップは部屋の中に入り、一夏とシャルルの話し声がする場所に向かうとシャワールームだった。フィリップはシャワールームに入るとそこにはボディーソープを持った一夏と男の筈なのに胸に女独特の二つの膨らみがある、裸のシャルルがいた。

「ふむ、やはりそうだったか。織斑一夏、このままでは彼女が風邪を引いてしまう。一旦出よう」

「あ、うん。」

一夏はボディーソープを置いて、シャワールームを後にしたのだった。

それからしばらくして、シャルルがジャージに着替え自分のベッドに座る。

「あの、フィリップさんは僕の事いつから気付いていたんですか？」

「最初からだよ。ずっと妙だと思っていた。だけど君が女だって言うことは誰にも言っていない。」

「ありがとうございます。二人に全部話すよ。どうして男としてこのＩＳ学園に入ってきたか……」

シャルルの実家のデュノア社は量産機ＩＳシェアが世界第三位であるが、第二世代型しか売られてなく、第三世代型の開発に遅れてしまい、経営危機に陥った。そこで、デュノア社の社長は愛人の娘であるシャルルを利用し、男子に変装して一夏に近づき、白式のデータを盗ませようとした。

話を聞き終わると一夏は怒りをこみ上げていた。そして一夏はシャルルの肩を掴んで言った。

「い、一夏……？」

「親がいなけりゃ子供は生まれない。そりゃそうだろうよ。でも、だからって親が子供に何をしてもいいなんて、そんな馬鹿なことがあるか！　生き方を選ぶ権利だって誰にだってあるはずだ。それを、親なんかに邪魔されるなんて無いはずだ！」

「織斑一夏。一旦落ち着こう」

フィリップは一夏をなだめた。

「あ、ああ……悪い」

「一夏……どうしたの？」

「俺は――俺と千冬姉は両親に捨てられたから」

一夏の明かした過去に、シャルルは驚く。

「……両親に捨てられたか。僕も同じようなものだ」

フィリップは暗い表情をしながら言った。シャルルと一夏は黙ってフィリップの話を聞いた。

「僕は……12年前に既に死んでいるんだ」

「「えっ！！」」

二人が驚いていた。今もこうして元気そうにしているフィリップが既に死んでいるなんて信じられなかった。

「僕の本名は園咲来人。12年前家族と一緒に自分の家にあるガイアゲートと呼ばれる穴に落ちて死んでしまった。だけど、それによって「地球の本棚」の力を得て、肉体がそのデータそのものから再構成された存在だ。それから僕は自分の記憶を失い、「地球の本棚」で自分の家族、記憶を見れないようにされていたんだ。それから僕はガイアメモリを作っていたんだ。だけど、翔太郎の師、鳴海荘吉と翔太郎の力で助けられたんだ。けど、鳴海荘吉はその時に死んでしまった。この話は屋上で話したね。それから僕と翔太郎は戦い続けて、自分の父親を倒した。」

「もしかして、家族同士で殺しあったんですか？」

「風都を脅かす元凶は僕の家族だった。でも、その時の戦いでデータを構築しているデータが壊れてしまい、変身を出来るのが残り一回だったんだ。僕はその変身を若菜姉さんを助けるために使った。それで僕は完全に消滅した。けど、若菜姉さんが僕に肉体を与えてくれた。その時家族の絆を取り戻すことができたんだ。」

フィリップが話し終わるとシャルルと一夏は黙ったままだった。

「僕らは同じ境遇みたいだね。」

「そ、そうですね」

「何かフィリップさん達は辛い戦いをしてきたんですね」

「話を聞いてくれて有難う。今はシャルル・ディノアをどうするかだが…」

「どうって……時間の問題じゃないかな。フランス政府もことの真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじゃないかな」

「それなら問題ない。ここに居る限りは」

フィリップはＩＳ学園の生徒手帳を見せる。

「……そうか！　特記事項第二十一、本学園における生徒は在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同

意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする！」

一夏は暗記していたテキストをスラスラと言う。

「つまり、この学園にいれば、すくなくとも三年間はフランス政府も手出しが出来ない。その間に方法を見つければいい」

見えてくる希望の光明に三人はホッとする。その時、ドア越しからノックと声が聞こえた。

「一夏さん、いらっしゃいます？　夕食をまだ取られていないようですけど、体の具合でも悪いのですか？」

いきなりのセシリアのノックと呼び声に一夏とシャルルは慌てるが、フィリップは冷静に判断した。

「とりあえず、シャルル・ディノアは風邪の振りをするんだ。」

「あ、はい。」

「織斑一夏は僕と一緒に行こう」

「おう」

一夏とフィリップはその後セシリアと共に食堂に向かったのだった。

その頃、アリーナでは……

翔太郎は一人アリーナにいた。理由はフィリップを探しているからだ。

「たく、いきなりいなくなりやがって、ここにはいないな……ん、」

翔太郎はアリーナに倒れるラウラの姿に気がついた。急いでラウラのもとに駆け寄った。

「おい、大丈夫か？」

「ん、お、お前は……左翔太郎。私は……」

「ここで倒れてたみたいだが、誰にやられた？」

「それが、妙な男だ。いきなり欲望がどうとか言って攻撃されたんだ。」

「欲望？一体誰だか知らねぇが、暗闇で女の子を襲うなんて許せねぇ、」

翔太郎は怒りをこみ上げていた。そして、翔太郎はガジェットに捜索を頼み、ラウラにジャケットを着させた。

「とりあえず、今日は戻っておけ。」

「あ、あぁ、左翔太郎。何故私にここまで優しくするのだ。昼間だって織斑一夏を……」

ラウラは翔太郎に質問すると、翔太郎はしばらく考え、こう言った。

「なんだか昔の俺を見ていてな。危なっかしくって……」

「……ある人にも言われた。私のことが一番弟子に似て危なっかしいと、だが、私には……」

「一夏との間に何が合ったかは知らねぇが、あんまり無茶するなよ」

「……織斑一夏を傷つけてしまうかもしれないが……それでもいいのか？」

「まぁ、限度があるけどな。それじゃあ、さっさと部屋に戻れよ」

「あ、あぁ」

第１５話　Ｋの暗躍／シャルルの真実（後書き）

ちなみに今後の予定ではラウラと翔太郎は仲良しに、フィリップはシャルや束と仲良くなったりするかも……

第１６話　Ｙの呼び声／メモリスロット（前書き）

今回はちょっと話が少し飛びます。

第１６話　Ｙの呼び声／メモリスロット

翔太郎とフィリップの二人は自室に篭もり、あるものを作っていた。
それは……

「よし、これで完成だ。Ｉｓ専用のメモリスロット。これで織斑一夏たちはメモリの力を使える」

作っていたのは一夏達専用のメモリスロットと翔太郎たちが持っている力をコピーしたガイアメモリだ。全部で６つある。

「それにしても、ラウラ・ボーデヴィッヒの分まで作る必要があるのかい？」

「ん、あぁ、ちょっと気になってな。」

翔太郎はラウラの事を気にかけていた。過去の自分に少し似ている気がしてしょうがなかった。

「まぁいい。これらを織斑一夏達に渡しに行こう」

二人は一夏達の行方を探していると、女子生徒から保健室にいると話を聞き、向かうと鈴とセシリアは傷だらけでベットにいた。一夏とシャルルはその側にいた。話を聞くとラウラが原因らしいが……

「お前らあんまり無茶をするなよ。いくら一夏の事を……むぐ」

翔太郎が何かを言いかけた瞬間、セシリアと鈴に口を塞がれた。一夏とフィリップは何のことだか分からなかった。

「俺が何だって？」

「「なんでもない（ありませんわ）」」

「これでは今度の試合で戦うことが出来ないみたいだね。織斑一夏、シャルル・ディノア。これを……」

フィリップは一夏とシャルルの二人に渡したのはメモリスロットだった。

「これは？」

「ガイアメモリの力を使える装備だ。織斑一夏にはメタルのメモリを、シャルル・ディノアにはルナのメモリを、セシリア・オルコットと凰鈴音には僕がつけておくよ。あとは……」

「あぁ、残り二つは俺が渡しに行ってくる」

翔太郎は残り二つのメモリスロットをフィリップから受け取り、渡しに行ったのだった。

翔太郎はまず箒に渡しに行くために剣道場を訪れると、箒が道場内で素振りをしているのを発見した。

「箒、今いいか？」

「ん、左さん。何か……」

箒は素振りをやめて、汗を吹きながら翔太郎に近づいた。

「これ、俺達が作ったメモリスロットだ。」

「メモリスロット？まさか左さんたちの力が使えるということだな」

「あぁ、箒にはサイクロンメモリを渡しておくから後でＩｓにつけておけよ」

「ありがとうございます」

箒は少し嬉しそうにしていた。翔太郎はそのままラウラの元に向かった。

ラウラはまたアリーナにいたが、様子が違った。

「ぐ、何だこの声は……」

（さぁ、お前の欲望を解き放つんだ。さっきも弱き者を痛ぶり快感だったろ）

「そ、そんなことは……」

（織斑一夏を許さないんだろ。俺に身を委ねろ）

「おまえなんかに……力は……ぐぅ」

「お、いたいた」

（ちっ、邪魔が入ったか）

アリーナの入り口を見るとそこには翔太郎が立っていた。さっきまで聞こえた声は聞こえなくなり、ラウラは翔太郎の所へ向かった。

「左翔太郎。わたしに何か用か？」

「大丈夫か？苦しそうだったけど、」

「あぁ、大丈夫だ。」

翔太郎はラウラの様子がおかしいことに気がついた。だが、翔太郎は気のせいだと思い、ラウラにメモリスロットとジョーカーメモリを渡した。

「これは……」

「お前の新しい力だ。切り札の記憶が宿っている。結構使いやすいからな」

「……有り難く使わしてもらうが、何故私にここまで……昼間私は……」

「ん、そうだな。前にも言ったろ。お前は、昔の俺に似ているって」

「……」

翔太郎はそのまま立ち去った。ラウラは翔太郎から受け取ったメモリスロットをポケットにしまい込み、アリーナを後にしたのだった。

それから時が過ぎ、月末の学年別トーナメント当日となる。そして、発表された対戦表に翔太郎たちは驚いていた。なんと、一夏とシャルルの相手はまさかのラウラと箒のペアだった。

（これは、何というか千冬辺りが仕組んだのか？）

翔太郎は対戦表をみて思った。ちなみに翔太郎とフィリップはタッグではなく、一人で出場することになったが、一夏かラウラとは決勝でしか戦うことができない場所にあった。

そして一回戦が始まった。フィールドにて、一夏とシャルル、ラウラと箒が対峙する。

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

「そりゃあなによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

ラウラと一夏のその話の直後、試合が開始された。

「「叩きのめす」」

一夏はラウラとすぐさま刃を交える。

シャルルは箒と対峙し、ラファール・リヴァイヴ・カスタム――とシャルル自身の器用の特技である『高速切替（ラピッド・スイッチ）』で徐々に追いつめていく。

それと同時に、ラウラに向かって攻撃していき、一夏の援護を行う。

（篠ノ之さん……悪いけどすぐに終わらせるからね！）

シャルルは一気に畳みかけ、箒を圧倒する。

「くっ、ぐあっ！！」

そもそも、訓練機と専用機の性能に大きな差がある。
更には戦い方の相性が悪いため、箒には初めから勝ち目が薄かったのである。

（これで、終わり！）

シャルルは箒に最後のトドメの一撃を喰らわせ、箒の打鉄のシールドエネルギーをゼロにする。

「くっ……」

箒は悔しがりながら地面に降りる。

シャルルはすぐさま一夏の元へ行く。

「一夏、お待たせ！」

翔太郎とフィリップは観客席で鈴とセシリアと共に観戦していた。

「どっちも互角だな」

「そうみたいだね。」

「でも、一夏達にはメモリスロット渡してあるんでしょ、それなら勝ち目が……」

鈴がそう言うとフィリップは首を横に振っていった。

「彼らは使わないよ。試合前にメモリスロットは使わないって言っていたよ」

「ど、どうしてですの？」

「あいつらは、メモリの力を使わずにラウラと戦いたいらしい。」

「彼らみたいな人間が風都にもいたらね」

翔太郎とフィリップは元の世界のことを思っていた。セシリアと鈴はただ呆然としていた。すると、観客の歓声が大きくなった。見ると一夏とシャルルの二人がラウラを後一歩まで追い込んだんだ。

「これなら、勝てますわね」

「うん、」

セシリアと鈴は嬉しそうにしていたが、翔太郎とフィリップは少し疑問を浮かべていた。

「おかしいな。ラウラの動きが悪い気が……」

「確かに、彼女なら一人でまだ持ちこたえるはずだが……」

その時だった。突然ラウラの周りの地面から大きな穴が空いた。そ

してそこには二人の男性がいた。

「き、貴様らは……」

「そろそろいい感じだね。この装備があって上手く育っていなかったけど、頃合いだ。」

金髪の男がラウラの眼帯を奪った。その瞬間、ラウラの体が黒い物体に包まれた。

「ふむ、別の存在が合ったのか。でも、」

「があああああああああああああああああ」

ラウラの姿、いや、Ｉｓごと巨大な虎の怪物となってしまった。

「な、何だその姿は……それにお前らは……」

一夏は男達に問いかけると金髪の男と銀色の服の男の姿がだんだんと変わり、怪人となった。

「僕らはグリード。欲望を糧にするものだ。僕はカザリ、こっちはガメル」

金髪の男は黒い猫の怪人に、銀色の服の男は銀色の怪人となった。

そして、その間には姿が変わったラウラがいた。

「さぁ、来いよ。ガキ。」

「くそ、何とかしないと……」

第１６話　Ｙの呼び声／メモリスロット（後書き）

ラウラの暴走は無くして、ヤミーに姿を変えました。

第17話　Yの呼び声／駆けつけた男（前書き）

今回はさらにドーパントまで出現するつもりです。さらに、あの人も登場です。

第17話　Yの呼び声／駆けつけた男

一夏とシャルルの二人は、カザリ、ガメル、そしてトラヤミーと対峙していた。翔太郎はとフィリップは急いで駆けつけるために、変身の準備をした。

「行くぜ、フィリップ」

「あぁ、翔太郎。セシリア・オルコット。僕の体のを頼んだよ」

「はい。」

「「変身」」

『サイクロン・ジョーカー』

フィリップはそのまま倒れ、セシリアはフィリップの体を支えた。翔太郎の姿はWの姿に変わり、一夏達の元に駆け寄った。

「大丈夫か?」

「翔太郎さん」

一夏とシャルルと箒はWの元に駆け寄った。するとカザリがwの姿を見てこう言った。

「へぇー、前に現れたコアを倒した時にオーズと一緒にいた奴か」

『あの時のことを知っているみたいだね。なら君たちはオーズの敵

みたいだね』

「まぁいい。楽にメダルを稼げると思ったけど、君たちが邪魔だから……殺す」

カザリは手から竜巻を放った。一夏は箒を守るためにその場を離れようとしたが、ガメルの重い一撃で箒と共に吹き飛ばされた。

「一夏!!。」

「があああああああああああああ」

トラヤミーがシャルルに襲いかかってきた。シャルルは持っている武器でトラヤミーの爪を防ごうとしたが武器が破壊されてしまった。

「くそ、一夏達は怪物相手の戦闘なんて無理があるだろ。フィリップいい手はないか?」

『まずはあのヤミーをどうにかしよう。あのヤミーは宿主に寄生するタイプだ。下手な攻撃をすれば……』

「ラウラが傷つくか。」

『多分だが、メダルをはじき飛ばして、ラウラの姿を露出させれば何とかなるはずだ。』

「なら、ヒートメタルだ」

Wはメモリを換え、サイクロンジョーカーからヒートメタルのメモリを差し込んだ。

『ヒート・メタル』

メモリチェンジを終えて、Wはメタルシャフトでトラヤミーに近づこうとしたが、カザリに妨害された。

「邪魔はさせないよ。」

カザリの攻撃の嵐によって、Wは動けずにいた。さらにカザリをある物を取り出した。

「もっと、面白くしてあげるよ。ガメル、その女にこれを使え」

「分かった。」

ガメルは箒の首を掴んだ。、そしてガメルはカザリから受け取った物を箒に使った。それは……Mと刻まれたガイアメモリだった。箒の体だんだんと変わり、Wが以前戦ったマグマドーパントに姿が変わった。

「ほうきぃいいいいいいいいいいいーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー」

一夏は零落白夜を発動させ、ガメルに斬りかかったが、ガメルはその刃を受け止め一夏を投げ飛ばし、一夏は壁にめり込んだ。

「一夏。きゃあああ」

一夏に気を取られたシャルルは、隙を突かれトラヤミーの攻撃を直撃してしまった。

「これで、残りは君たちだけだね。仮面ライダーw。」

「くそ、箒まで……」

『これはピンチだね。だけど、』

「あぁ、俺達は諦めない。それが風都を……いや、この世界を泣かす奴らは決して許さない。それが仮面ライダーだ」

「世迷言だね。死ね」

カザリの竜巻、マグマドーパントの火球、トラヤミーの爪、ガメルの拳が一斉にWに襲いかかろうとした。Wは全部防ごうとした。

その時だった。突然空から雷が落ち、W以外を吹き飛ばした。そして煙が晴れるとそこには赤いジャケットを纏った男がいた。

「ここは……」

「お前は……」

『まさか……』

「誰だい？僕らのジャマをするのは……」

カザリが突然現れた男に質問すると男はジャケットからドライバー

を取り出し、ガイアメモリを取り出すと……

「俺に質問をするな。変…身」

『ＡＣＣＥＬ！』

「変……身！！」

男はガイアメモリをアクセルドライバー中央上部にあるスロットに挿入して右のパワースロットルを捻る。

『ＡＣＣＥＬ！！』

男が纏うのは赤を基調とした装甲。フルフェイス・ヘルメットのような仮面で覆われ、奥の青い円形の複眼が輝く。男が使用したガイアメモリは「加速の記憶」が内包された「アクセルメモリ」。そして男が変身した姿は風都のもう一人の仮面ライダー。その名は「仮面ライダーアクセル」。男の名前は……照井竜。

「さぁ、振り切るぜ」

第１８話　Ｙの呼び声／怒りを込めた一撃、悲しみを解き放つ一撃（前書き）

今回もまた三部になっちゃった。今回はラウラ戦が終わります。

第１８話　Ｙの呼び声／怒りを込めた一撃、悲しみを解き放つ一撃

突然現れたのはもう一人の仮面ライダーアクセルだった。Ｗはアクセルと背中を合わせた。

「照井。お前もここに飛ばされたのか？」

「あぁ、ドーパントの攻撃を受けてな。所長に心配をかけてしまうな」

『今はそんな事を言っている場合じゃないよ。照井竜、君が来たお陰で、何とかなりそうだ。トライアルに変身してくれ。』

「何？」

アクセルはまだあんまり状況をつかめずにいた。だがフィリップは言葉を続けた。

『トライアルの力であのトラの怪物の中にいる少女を助けて欲しい。』

「そうか、トライアルならメダルを全てはじき出せる。」

「何が何だか分からないが、やってみよう。」

『ありがとう。織斑一夏、シャルル・ディノア。まだやれるね。』

倒れた一夏とシャルルに声をかけると二人は何とか立ち上がった。

そして、フィリップはある事を言い出した。

「メモリスロット。持っているよね。ラウラ・ボーデヴィッヒを助けた瞬間、シャルル・ディノアはヤミーを織斑一夏はドーパントを頼んだよ」

「フィリップさん。箒は大丈夫ですよね」

「あぁ、大丈夫さ。彼女たちを救いだそう」

「「はい」」

二人はそれぞれ、自分の専用機に取り付けられたメモリスロットにガイアメモリを差し込んだ。

『メタル』

『ルナ』

一夏が持つ雪片弐型の色が銀色に変わり、さらに刃が伸びた。シャルルの場合は全ての武器が再生され、色も金色に変わった。

「では行くぞ」

取り出したのトライアルメモリ。それをアクセルドライバーのスロットに差し込み、二回レバーを引くと、赤から黄色、黄色から蒼の装甲になった。

「すごいよ～、カザリ。色が変わった～」

「色が変わったところで……」

その瞬間、アクセルの姿が消えた。そして、アクセルは後ろに回りこむと…アクセルトライアルはトライアルメモリをアクセルドライバーから引き抜き、マキシマムモードに変形させる。スイッチを入れるとストップウォッチがスタートした。トライアルメモリを上に投げるとアクセルトライアルは音速の速さで再びトーレの間合いに入り、音速の連続蹴りを喰らわせる。トライアルメモリの戦法の真骨頂は一度に連続攻撃をしてダメージを蓄積させる。そして、アクセルトライアルのマキシマムドライブ、「マシンガンスパイク」は十秒間の最大加速を行い、超高速の連続蹴りを『T』の字を描くように対象に叩き込むこと。トラヤミーの体に『T』と言う文字が刻まれながら、メダルが弾きだされ、ラウラも出てきた瞬間、シャルルが全弾丸を放ち、軌道を変えながらヤミーに命中し、そして腕を伸ばしてラウラを救い出した。そして、ストップウォッチを止め、ストップウォッチに書かれている数字は『9．8』

「それが貴様の絶望までのタイムだ」

トラヤミーが爆発し、メダルが散らばっていったのだった。

「箒、今助けだす。」

一夏はマグマドーパントと対峙していた。一夏は雪片弐型を構える。

「零落白夜――発動」

雪片弐型に全てのエネルギーを消し去る絶対無効の刃が現れる。それは今までの刃と違って銀色の光を放っていた。

「行くぜ。零落白夜改め、鋼落白夜よ。全てを切り裂け。うおおお

『マキシマムドライヴ』

「『メタルツイスター』」

シャフトの先端から緑色の旋風を発生させ、Wを中心として緑色の竜巻を発生させるように回転しながら、ガメルとカザリをシャフトで連打した。

「ぐうう、これはヤバい。ガメル」

「分かった。」

ガメルは地面に穴を空けてトドメの一撃を避けて、どこかへ逃げて行ったのだった。

ラウラが目覚めるとそこは保健室だった。

「私は……そうだ、怪物が現れて……」

「よ、起きたか？」

ラウラの側には一夏が椅子に座っていた。

「織斑一夏。何故お前が……くっ、」

「あんまり動くなよ。ヤミーっていう怪物から救い出すときに怪我してたみたいだから……」

「そうか……私は……すまない。迷惑を掛けたな」

「別にお前が悪いわけじゃないだろ。あんまり落ち込むな」

そう言って、一夏はラウラの頭を撫でた。ラウラは少し恥ずかしそうにしていたが、直ぐにうれしい気持ちになったのだった。

その頃、翔太郎たちは、千冬に照井のことについて話していた。

「なるほどな。二人目の仮面ライダーか。今回は助かった」

「いや、俺も事情が分からなかったところだ。これからは左達と一緒に戦っていきたい。いいか？」

「いいが、照井はＩＳは……」

確かに翔太郎とフィリップと違って、元となるものが無いために照井の専用機がない。だが千冬の心配は直ぐにフィリップが答えたのだった

「なら、僕が一から作ろう。そのための技術を提供して欲しい」

「なるほど、分かった。後で山田先生に伝えておく。照井はちょっと残れ」

翔太郎とフィリップの二人は職員室を後にした。すると、真耶がやってきた。今日は大浴場が点検日で使えない日だったが、点検が早く終わり、特別に男子に使ってもらおうという吉報だった。

「なら、先に一夏とシャルルに入ってもらおうか。俺達は後でいいから」

（二人が一緒にか。これはあとあと大変なことが起きそうだな）

その次の日のことだった。フィリップの予想が的中したのだった。

真耶は何故か疲れた表情で教室に入り、ホームルームを始めた。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生といいますか、すでに紹介は済んでいるといいますか、ええと……」

いまいち理解が難しい説明に、クラス全員が頭に『？』の疑問符を浮かべる。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

教室に入ってきた一人の少女に、一夏達はぽかんとする。

「シャルロット・ディノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」

ぺこりと、スカート姿のシャルル改め――シャルロットが礼をする。

さらに、もう一人の男が教室に入ってきた。それはスーツに着替えた照井だった。

「照井竜だ。今日から教育実習生としてやってきた。」

照井は生徒としてではなく実習生としてやってきたが、今はそれどころではなかった特にこの男は……

「照井が実習生？いや、一番驚きなのが……シャルルが女だと、ということは昨日の夜、一夏と一緒に……」

教室のドアが派手にぶっ飛んだ。

「一夏ぁっ！！！」

鈴音が修理を終えた甲龍を身に纏い、教室に殴り込んできた。

「死ね！！！」

両肩の龍咆をフルパワーで開放される。

ズドドドオンッ！

「ふーっ、ふーっ、ふーっ！」

撃ち終わると、毛を逆立てて怒る猫のように肩で息をしている。

「……あれ？　俺……生きてる……？　俺生きてる！？」

「……」

間一髪のところで、一夏と鈴との間に割って入り、一夏を助けたのは――。

「……ラウラ？」

シュヴァルツェア・レーゲンを纏い、ＡＩＣを発動させたラウラだった。一夏は助けてくれたラウラに礼を言う。

「助かったぜ、サンキュ。……っていうかお前のＩＳもう直ったのか？　すげえな」

「……コアはかろうじて無事だったからな。予備パーツで組み直した」

「へー。そうなん――むぐっ！？」

突然ラウラは一夏の胸ぐらを掴み、そのまま引き寄せて一夏の唇を奪った。

「！？！？！？！？」

あまりに突然の事にその場の全員があんぐりとしている。ラウラは頬を赤く染めながら宣言する。

「お、お前は私の嫁にする！　決定事項だ！　異論は認めん！」

「……嫁？　婿じゃなくて？」

「日本では気に入った相手を『婿にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

（本当に面白いことになってきたね。）

フィリップは一人だけ笑いをこらえていたのだった。すると、ラウラが翔太郎の所に来た。

「左、いや、兄貴と呼ばせてくれ」

「あ、あぁ、別にいいが、何で？」

「あなたは私にいろんなコトを教えてくれた。だからだ。別に家族になってくれということではなく、信頼する男性にこう呼べと言われて……」

「まぁ、別にいいが……その前にだ。まずはアイツを助けなくっていいのか？」

翔太郎が指を挿すと一夏が鈴に攻撃されていた。

「アンタねえええええっ！！！」

再び龍咆が開く。

「待て！　俺は悪くない！　どちらかというと被害者サイドだ！」

「アンタが悪いに決まってるんでしょうが！　全部！　絶対！　アンタが悪い！」

『ヒート』

鈴はヒートメモリをメモリスロットに入れ、双天牙月が真っ赤になり、炎付加まで付いた。」

「あつ、あつ、焼き殺す気か」

「焼き死ね」」

（殺される。待てよ。まさか……）

一夏が振り向くと、セシリアがトリガーメモリを持っていた。

（やっぱりぃいいいいっ！！？？）

「ああら、一夏さん？　どこかにおでかけですか？　わたくし、実はどうしてもお話しなくてはならないことがありまして。ええ、突然ですが急をようしますの。おほほほほ……」

『トリガー』

ブルー・ティアーズを起動させて、メモリスロットにトリガーメモ

リを入れ、両手にトリガーマグナムが握られていた。

「ちゃんと撃ち殺してあげますわ」

（こ、こ、こ、こ、こ、殺される。逃げるしか……）

一夏は窓から逃亡を図ろうとするが、目の前に日本刀が突きつけられる。このクラス……否、この学園で日本刀を扱う人物はおそらく一人しか存在しない。

「ほ、箒さん……？」

「……一夏、貴様どういうつもりか説明してもらおうか」

「待て待て待て！　説明を求めたいのは俺の方で――おわあっ！？」

箒は聞く耳持たんと言わんばかりに日本刀で鋭い斬撃を繰り出す。

（さすがは女子剣道日本一！　太刀筋が凄く綺麗！　って、感心している場合か！？）

「安心しろ。ズタズタにしてやる。」

箒は日本刀にメモリスロットを装着させ、サイクロンメモリを取り出した。

『サイクロン』

メモリを差し込んだ瞬間、日本刀に風の付加が付き、振った瞬間、鎌鼬が発生した。

（それだと俺、ボロ雑巾に……）

一夏は今度はドアから逃げようとしたが、何かに捕まれ転んだ。脚を見ると、金色の腕を伸ばしたシャルロットが笑顔でいたが、Ｉｓ起動させている時点で一夏は殺される覚悟をした。

「大丈夫だよ。ルナメモリって弾道を曲げられるから他の人には迷惑がかからないから」

「心配するところちがーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーう」

一夏は翔太郎とフィリップに助けを求めたが……

「諦めろ。お前は一度殴られるべきだ」

「これ、殴る次元じゃないです。フィリップさんは……」

「凄い、全員メモリの力を扱いきれている。もっとデータが取りたい。織斑一夏、頑張れ」

「何か違うことに興味もってるぅぅぅぅぅぅぅぅーーーーーー」

一夏は四人に粛清を受けたのだった。そして照井は……

「何というかドーパント以上に大変な目にあいそうだな」

第１９話　Ｄの再来／みんなでお買い物（前書き）

地震やばかったです。１２日の９時に電気が復旧したけど、その日の午後に水道止められて大変だった。

今回はあの怪盗が登場です。

第１９話　Ｄの再来／みんなでお買い物

ある日、自室で着替えをしている千冬にある人物から連絡が来た。

『やっほー皆のアイドル篠ノ之束さんでー』

ブチッ、ツーツー

千冬は無言で電話を切るが、直ぐに掛かってきた

『いきなり切らないでよ。ひどいな～ちーちゃん』

「その呼び方はやめろ。今になって何の用だ？」

篠ノ之束……箒の姉であり、ＩＳの開発者でもある。束は数年前に謎の失踪をして現在行方不明であるが、箒と千冬には連絡を取っているのだ。

『えっとね、この前ちーちゃんが話してくれた仮面ライダーｗだっけ？』

「あぁ、左達か。お前に話したらもう一人の仮面ライダーの専用機を作ってくれると言う話、断るのか？折角フィリップが設計図まで作ったのに」

『違う違う。確かに、そのフィリップくんが書いた設計図は興味持ったよ。実際会って話してみたいけど、今回はその話じゃなくって、泥棒に入られたの』

「なんだと、じゃあ『紅椿』や照井の専用機は……」

千冬はかなり心配していた。どこの誰かは知らないが、現在所在不明の束の研究所に入り込み、ＩＳを盗まれたとしたら、大変なことになる。だが……

『盗まれてないよ～、ちゃんとその泥棒撃退したんだけど、仮面ライダーがどうとか言ってたから捕まえてみたんだ～、それにこの間送ってくれたメダルの解析も終えたから今度全部持ってくるよ』

「あぁ、分かった。」

千冬は電話を切り、考え込んだ。

（左達の他に仮面ライダーか。フィリップじゃないが少し興味深いな）

日曜日、翔太郎、フィリップ、照井の三人はショッピングモールに買い物に来ていた。基本、お金の工面は千冬から貰っている。だが、照井は入ってきたばっかりなので手持ちの金が少なかった。

「悪いな。出してもらって」

「いや、いいさ。困ったときはお互い様って言うだろ」

「翔太郎、僕は別に水着はいらないんだが……」

「そんなこと言うなよ。海に行くんだぞ。水着くらい新調しないと……」

三人はそんな会話をしていると、前に歩く一夏とシャルロットに気がついた。よくよくみると一夏とシャルロットは手をつないでいる。

「お、仲がいいな。デートか？」

翔太郎がそんな事を言った瞬間、殺気を感じたのだった。三人が捜すと自動販売機の裏でセシリアと鈴がいた。翔太郎は声をかけようとしたが……明らかにセシリア達の様子がおかしかった。

「ねぇ、あれって、手繋いでデートしてるよね」

「えぇ、そうですわね。」

「じゃあ、殺そう」

鈴はそう言って、左手だけＩＳ起動させた。やばいと思った三人慌てて止めに入った。

「待て待て待て、落ち着け鈴。」

「妨害という案が出る前に殺すという案を出すのはまずいから」

翔太郎は鈴を抑え、フィリップはセシリアを抑える中、照井は鈴とセシリアに向かってこう言った。

「まず警察がいる前で殺すというのはまずいだろ。」

三人がセシリア達を説得しているとラウラがやってきた。

「む、兄貴。どうしたのだ？」

「おう、ラウラか。お前もどうしたんだ？」

「いや、一夏が心配でな。」

「とりあえず、あっちにいるから皆で行くか？」

「うむ、そうだな」

鈴とセシリアを落ち着かせている中、シャルロットは六人の存在に気がついた。シャルロットは勢いで一夏と一緒に更衣室に入り込んだのだった。そして、出てきた瞬間、千冬、真耶、そして翔太郎達六人に発見され、一夏とシャルロットは千冬、真耶、照井の三人に説教を受けたのだった。

ある場所では、一人の男が海を眺めていた。

「この世界は一体……海東の奴も出ていったっきり、帰ってこないし……たく、なんでまたこんな海の家の従業員みたいな格好をするハメになるんだよ。」

男の首にはマゼンタカラーのカメラがかかっており、そして、男の手には一枚のカードを持っていた、カードに書かれていたのは……

…『ディケイド』

第２０話　Ｄの再来／臨海学校へ行こう（前書き）

ようやく、ディケイドと合流です。

第２０話　Ｄの再来／臨海学校へ行こう

待ちに待った臨海学校、一夏、翔太郎、フィリップ、照井の四人の部屋割りは女子が騒ぐという理由で千冬の提案で千冬と同じ部屋となった。

「いいのか？折角の姉弟水入らずでいられるって言うのに、俺達も同室で……」

と翔太郎は一夏と千冬に聞くと、千冬は……

「さっきも言ったように、おまえたちの部屋に女生徒が入り込んで騒がれる可能性があるからな。それに姉弟水入らずなどと気にする必要はないぞ。」

「そうか、じゃあ、一夏。海にでも行くか」

「はい、翔太郎さん」

一日目は自由時間ということで翔太郎たちは着替え、海に行くと先に来ていた女子達がある建物の前で騒いでいた。

『きゃー、凄い写真』

『歪んでるけどイケメンのカメラマンですって』

と騒いでいた。するとセシリア達も来て何があったか一夏に聞いていた。

「なんですの?あの人盛りは?」

「ん、何かカメラマンが来てるらしいけど、あそこって……」

「どうみても、海の家だよね」

鈴は建物の看板に書かれていた文字を見ながら言った。看板に書かれていたのは……『海の家・光写真館』と書かれていた。

「写真館と海の家が重なってるのかな?」

「ふむ、一夏。ここは私達も……」

ラウラがそう言いながら、一夏の手をつかみ海の家に行こうとした瞬間、セシリア、鈴、シャルロットが止めに入った。

「ちょっと、何抜け駆けしようとしてるのかな?ラウラ」

「そうですわ。ここは私と一夏さんが撮るべきですわ」

「いやいや、ここは幼なじみの私が……」

(全員で一緒に写真に写ればいいんじゃないのか?)

四人が睨み合う中照井は心のなかでツッコミを入れたのだった。

「そういえば、篠ノ之箒の姿が見当たらないが……」

「そういえば、そうだな。いつもならいるはずだけど、一夏とでも喧嘩でもしたのか？」

8人はそのまま海の家に向かうことになり、たどり着くと確かに海の家の中に写真館が混ざった感じの建物があったが……女子たちが騒いでいたカメラマンに翔太郎とフィリップは驚いていた。

「お、お前は……」

「ん、久しぶりだな。仮面ライダーw」

そこにいたのは黒いスーツに首にはマゼンタカラーのカメラを持った男、一年前死人還り事件の時にアルティメットDを共に倒した最強の仮面ライダーであり、『世界の破壊者』である男門矢　士がそこにいたのだった。

その頃、浜辺の近くにある林の中でカザリとガメルがいた。

「まさか逃げ出した先が海なんてね」

「あのライダーにセルメダル取られた。」

「でも、ここにも奴らがいるみたいだから、今度はガメルがヤミーを作ってよ」

「分かった。」

臨海学校、まだ一夏達や翔太郎たちはこのさき起こる騒動に気がついていなかったのだった。

第２１話　Ｄの再来／紅いＩｓと世界の破壊者（前書き）

また三部になっちゃった。結構オーズとの話を入れるためなので長くなったりします。

第２１話　Ｄの再来／紅いＩｓと世界の破壊者

翔太郎、フィリップ、照井、一夏、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラの八人は光写真館の中にいた。

「久しぶりだな。仮面ライダーｗ。いや、左翔太郎とフィリップ」

「お前もな『世界の破壊者』門矢士。いや、」

「仮面ライダーディケイド」

「お前たちもこの世界に来ていたなんてな。どういうことだ？」

士はコーヒーを飲みながら言うと、翔太郎はこう答えた。

「ドーパントの攻撃でこの世界に来たんだよ。お前は旅の途中か？」

「あぁ、終わる旅はないからな。」

「確かに、ディケイドの旅は終わることはないと思うよ。時間が進めば進むほど世界は広がっていく。僕らが知らないライダーも生まれてくるかもしれないしね。」

「そうだな。」

翔太郎、フィリップ、士の三人は楽しそうに話をしている中、未だに状況をつかめていない一夏達の所に帽子をかぶっている老人。光栄次郎がコーヒーを持って話しかけてきた。

「いやー、こんなに大勢のお客さんが来るなんて初めてだよ。あ、コーヒーのおかわりいるかな？」

「あ、大丈夫ですけど、ここって一体？」

「どう見ても、写真館だからね。一夏」

一夏は栄次郎に質問すると、シャルロットがやんわりとツッコミを入れた。

「いや、それは分かってるけど、何かこの建物だけこう現実味がしないって言うか……不思議な感じがしてな。」

一夏は腕を組みながら考えていると、士が答えた。

「ここはあらゆる世界を旅するための場所だからな。いわば方舟みたいなものだ。時間の流れなんて関係ないからな。」

「では、門矢さんたちはどれぐらい旅をしてるんですの？」

「……大体、2年ぐらいだな。」

「あれ？」

「ん、あれは……」

すると鈴とラウラの二人があることに気がついた。一夏達も鈴とラウラに言われて気がついた。翔太郎とフィリップの後ろに飾られていた大きな絵があったが、その絵に書かれていたのは白式、ブルー・ティアーズ、甲龍、ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ、シュ

ヴァルツェア・レーゲンと紅いＩＳが空に飛んでいるような絵が書かれていた。

「これって、僕らのＩＳだよね。」

「あぁ、何でここに書かれているんだ?それにこっちの紅い奴は……」

「誰のなんでしょうか?」

と全員が絵について考えていると、いきなり部屋の扉が開き、二人の男女が入ってきた。男の方は黒い髪の明るい男で、女のほうは黒髪の女性だった。

「士くん、いつまでサボっているんですか。私たち二人だけにお店の方をやらせないでください」

「そうだぞ。士。なんか知らないけど女性客が多くて大変なんだから手伝ってくれよ。」

「夏海、ユウスケ。悪いが今は忙しいから、お前ら二人に……」

「そうはいきません。さぁ、行きますよ。士くん」

そう言って、夏海とユウスケは士の腕をつかみながら海の家の方へと向かっていった。翔太郎はため息を付き、

「しょうがない。フィリップ。照井。俺達も店のほう手伝おうぜ」

「いきなり何故だい?」

「なーに、スカルのカードを渡してくれたお礼みたいなもんだ。」

「左にしてはいい事を言うな。悪いが織斑達は遊んできて……」

「いや、俺も手伝うよ。鈴達は……」

「全く、私たちも手伝うわよ」

「そうですわ。少しぐらい手伝うのもいいかもしれませんし」

「うん、それに……」

「あぁ、手伝った報酬として……」

（（（（お礼に一夏と一緒に写真を撮ってもらうためならどんなことだって手伝う））））

（女性群の心の声が聞こえた気がしたような……）

翔太郎は心のなかでそう思っていたのだった。

その後、８人で少しだけ海の家を手伝うこととなったが、千冬と真

耶に見つかったりしたが、栄次郎が説得してくれたお陰でなんとか丸く収まったのだった。そしてこの日、午前中は海の家の手伝いで終り、午後は皆で遊んだのだった。

第２２話　Ａの挑戦／紅椿とアクセルトライアル（前書き）

今回はアクセルのＩｓが登場です。

第２２話　Ａの挑戦／紅椿とアクセルトライアル

夕日が沈む頃、箒は一人浜辺の近くにある崖にいた。

「あれ？あなたこんな所で何してるの？」

「あなたは？」

箒に声をかけてきたのは夏海だった。夏海は箒の隣に立ち、お互い自己紹介した。

「いろんな世界を旅したんですか。凄いですね」

「まぁ、成り行きで一緒に行くことになったんだけどね。箒ちゃんは何でこんな所に一人でいたの？」

「わ、私は……」

明日は箒の誕生日で、その日に行方不明の姉の束が『紅椿』という箒の専用機を持ってくるそうだ。

「本当にアイツを、一夏を護ることができるか心配で……」

「大丈夫だと思いますよ。箒ちゃんはきっとその一夏くんを護ることができると思います。そうだ、明日、その一夏くんと一緒に写真館に来て下さい。写真撮ってあげます」

「は、はい。ありがとうございます。」

次の日、一夏達は千冬にある砂浜に集合させられていたが……

「専用機持ちは全員集まったかと言いたいところだが……何故か部外者がいるのは気になるんだが……」

千冬の言葉を聞いて鈴は最初箒のことかと思っていたが、それ以上に気になったのが……

「ユウスケ、お前のことじゃないのか？」

「えぇ、俺！！士のことを言ってるんじゃないのか？」

この場にいる全員が士とユウスケの言い争いを聞いて、こう思った。

（（（（（（（（（（いや、あんたら二人だろ））））））））））

「お前ら二人のことだ。何故部外者であるお前たちがいるんだ」

千冬が士とユウスケを出席簿で叩いた後そう聞くと士がこう答えた。

「Ｉｓというのが気になってな。どういうものか見てみたかったからだ」

「だが、部外者は基本立ち入り禁止だ。」

「こんな屋外でやっているようじゃ立ち入り禁止の意味が無いだろ」

「ほう、私に口答えするか」

士と千冬がにらみ合いをしていると、ユウスケが慌てて止めに入った。

「待って、まって、俺達は確かにＩｓのことが気になってきたけど、もう一つ用事があって、実は……」

「もしかして、ディエンド……海東大樹がＩｓを盗もうとしていると言いたいのかい？」

ユウスケが言いかけた瞬間、フィリップが割り込んで言った。

「海東って、あぁ、あの泥棒の。」

翔太郎とフィリップは一度会ったことがあり、どういう人物なのかも知っていたが……

「泥棒ってやばいんじゃ……」

一夏がそう言うとセシリアとシャルロットも続けて言った。

「確かにＩｓを盗まれたら色々とまずい事になりますわね」

「うん、僕ら専用機持ちはかなり危ないよ。盗まれたりしたら国外追放なんてことがあるかもしれないし」

一夏達が話していると、千冬が咳払いをした。

「その海東って奴かは知らないが、それらしき人物が……」

「ちーちゃ～～～～～～ん！！！」

砂煙を上げながら無茶苦茶な速度で走る。臨海学校に乱入してきたのは、ＩＳ開発者である稀代の天才・篠ノ之束と何故か縄に縛られた海東がいたが……何故か死にかけていた。

「やあやあ！　会いたかったよ、ちーちゃん！　さあ、ハグハグしよう！　愛を確かめ――ぶへっ」

千冬に飛びかかった束をアイアンクローでキャッチする。もちろん手加減なしで容赦なく。

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

束はアイアンクローから抜け出し、箒の方を向く。

「やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなぁ。おっきくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが」

どこから取り出したのか、箒は木刀で束を殴った。

「殴りますよ」

「殴ってから言った。」

「はぁ、束。一つ聞きたい」

「ん～何かな？」

「お前が縛って持っているその男は誰だ？」

千冬が海東を指さして言うと束は笑顔で言った。

「あぁ、例の泥棒だよ。全くこの天才束さんの研究所を探し当てたのは凄いけど、防犯装置でイチコロだったよ」

ケロッと言いのけてしまう束に士は何故か恐怖を覚えていた。

（あの海東を防犯装置一つで倒すなんて……こいつ、ライダー以上か）

するとフィリップは束に話しかけた。

「君が、篠ノ之束だね。」

「おぉ、君がフィリップくんか。」

フィリップと束が話しているのを聞いて、一夏と箒は驚いていた。

翔太郎が何故驚いているのか聞くと……

「束さんは自分が興味ないことには無関心なんだ。それが人でも同じで唯一興味が有るのは俺と箒と千冬姉なんだけど、」

「まさか、フィリップさんと普通に話しているなんて……」

「まぁ、変人同士仲がいいんじゃないのか？」

「それじゃあ、大空をご覧あれ！」

フィリップと話が終わると束はびしっと直上を指すと、金属の塊が落下してきた。

「じゃじゃーん！　これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！　全スペックが現行ＩＳを上回る束さんお手製ＩＳだよ！」

金属の塊が開き、中から真紅の装甲に身を包んだＩＳ『紅椿』である。箒はさっそく紅椿に乗り、束の元で最終調整を行う。

「そして、私とフィリップくんとの合作であるＩｓ」

束がそう言った瞬間、地面から金属の塊が出てきた。そして金属の塊が開くと出てきたのは赤と青と白のカラーリングに左腕には巨大なガトリング砲、右腕には腕と合体した剣が合った。

「照井竜。これが君のＩｓだ。名前は、アクセルトライアル」

「『加速する挑戦』か。いい名前だ。篠ノ之、調整ついでに俺と模擬戦をしてくれないか？」

「は、はい。」

照井の提案で箒は模擬戦をすることとなったのだった。

ある場所で、カザリはガメルが創りだしたヤミーにガイアメモリを差し込もうとしていた。するとガメルがやってきた。

「カザリ、出来る限りヤミー作ったけど、どうするの？」

「見ててよガメル。君が作ったゾウヤミーが進化する瞬間、」

『プレシオサウルス』

カザリはゾウヤミーにメモリを差し込んだ瞬間、ゾウヤミーの姿がだんだんと変わっていき、プレシオサウルスの大きく伸びた首に、胴体にはゾウの牙。ヒレが四枚と巨大な灰色の両腕と両足がある姿に変わった。

「これだ、ヤミーとドーパントの合成か。水陸最凶のヤミードーパントが生まれた。さぁ、楽しもうか。仮面ライダー」

第２２話　Ａの挑戦／紅椿とアクセルトライアル（後書き）

何か凄い怪物作ちゃったけど、説明不足なので、簡単に今回出てきたゾウプレシオサウルスの見た目は、顔を首がプレシオ、首の近くにゾウの牙、両腕、両足はゾウ。しっぽと胴体とヒレはプレシオです。次回はアクセルと箒の模擬戦です

第２３話　Ａの挑戦／箒ｖｓアクセル（前書き）

今回は箒ｖｓ照井の模擬戦です。

第２３話　Ａの挑戦／箒ｖｓアクセル

紅椿を装着した箒とアクセルに変身した照井は空に上がり、模擬戦をはじめていた。

「行きます。照井さん。」

「来い。篠ノ之。」

箒は右の刀『雨月』を構え、アクセルに向かって突きを放つと赤い球体がアクセルに向かってきた。
アクセルはその光弾を右腕の剣で防ぎ、左腕のガトリング砲を放った。

「なら、これでどうだ」

箒は今度は左の刀『空裂』を抜き、一回転するように振ると、赤いレーザーが帯状に広がり、弾丸を全て撃ち落とした。

「やれる。この紅椿なら」

「なるほど、凄い機体だな。なら、俺も……」

アクセルは右腕の剣・アクセルブレードに『エンジンメモリ』を差し込んだ。

『ジェット』

アクセルブレードの刃を箒に向かって、飛ばした。箒は『雨月』で

刃を弾いたが、アクセルはガトリング砲・アクセルバスターから雷を纏った弾丸を放った。

「電気を纏った弾丸。なら、」

箒はメモリスロットを『空裂』に装着させ、

『サイクロン』

サイクロンメモリをメモリスロットに挿すと刀に風が纏い、放たれた弾丸を全て吹き飛ばした。

「なら、これだ。」

アクセルはトライアルメモリを取り出した。

地上で箒とアクセルの戦いを見ていた一夏達は……

「すごいな。箒も照井さんも」

「さすがに篠ノ之博士とフィリップさんが設計したＩｓも凄いですけど、箒さんも直ぐに対応出来てるなんて……」

一夏とセシリアが話していると、士達と翔太郎達が何かを話していることに気がついた。

「本当か？海東」

「あぁ、束博士の部屋にあったはずのガイアメモリがなくなっていた。」

「ガイアメモリがこっちに着ていることは知っていたが、どう思う？フィリップ」

「あのグリードの仕業かもしれないと考えられるが、彼らは落ちているガイアメモリを拾ったと言っていたはずだが、」

「別の奴らがガイアメモリを集めているっと言うことか。」

士、海東、翔太郎、フィリップが話している間、束が千冬にある物を渡していた。

「これ、ちーちゃんに頼まれてたメダルの解析結果。それに……」

その時、真耶が来た。真耶が千冬に耳打ちをしていると、

「篠ノ之、照井。模擬戦は中止だ。専用機持ちは旅館の大部屋に集まれ。いいな」

模擬戦は途中で終わり、一夏達は旅館の大部屋に集まったのだった。

第２３話　Ａの挑戦／等ｖｓアクセル（後書き）

次回は銀の福音が登場します

第２４話　折られたＦ／福音発見（前書き）

ついに福音の登場です。

第２４話　折られたＦ／福音発見

旅館の一番奥の宴会用の大座敷で専用機持ち達と教師陣が集められた。

証明を落とした薄暗い室内に大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

軍用ＩＳの銀の福音は攻撃と起動に特化した機体であり、専用機持ち全員で色々と意見を出し合っていく。その時、

「イヤッホー！　ここは私の出番だね！」

全員が上を見上げると、天井から束の首が逆さに生えていた。さらに襖を開けて入ってきたのは士、海東、ユウスケの三人だった。

「面白い状況になってるな。」

「確かに、お宝を捜すより、ここで話を聞いたほうがいいかもね」

「その前に、何か睨まれてるけど、」

「束、門矢、海東、小野寺。ちょっと来い。」

千冬に外に出された四人。それから数分後、四人の悲鳴が聞こえて

きたが、翔太郎たちは気にしないことにした。

「うぅ、新たな境地に達するところだったよ。」

「夏海の笑いのツボのほうがマシだな」

その後、束は紅椿が作戦の適任と言い放ち、能力を説明し、第四世代型ＩＳの『展開装甲』と呼ばれる束作成の能力に一夏達は唖然とする。

「確かに、その方が効率がいいかもね。だけど……」

フィリップは一夏と箒を見て、こう言った。

「僕もファングジョーカーで出るよ」

「フィリップ。何でだ？」

「相手の攻撃を直に見て、作戦を組み立てることもできる。それに、ファングなら一撃必殺の攻撃もできる。」

そんなこんなで数分間の話し合いの結果、一夏と箒のタッグとフィリップのファングジョーカーによる作戦が行われることとなった。各自それぞれが作戦成功に向けて、自分に出来ることを行う。そして、作戦開始が近づく中、紅椿の調整が終わり、フィリップが一夏とラウラを呼んだ。

「何ですか？フィリップさん」

「ラウラ・ボーディヴィッヒ。君のジョーカーメモリを一夏のメタ

ルメモリと交換してくれないか？」

「む、メモリをお互いに交換。……エンゲージリングか。」

「いや、ちがうとおもうぞ。ラウラ」

「今回の作戦は、さらに効率よく、箒のサイクロンメモリとジョーカーメモリの力が必要なんだ。」

フィリップがそう言うと、一夏はフィリップが何を言いたいか分かった。

「もしかして、フィリップさん達みたいにメモリの力が上がるんですか？」

「あぁ、そうだよ。ラウラ・ボーディヴィッヒ。いいかな？」

「私は構わない。」

時刻は十一時半。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

砂浜で一夏と箒はＩＳを纏う。そして、フィリップの手のひらの上にはファングメモリ。

「行くよ。翔太郎」

「あぁ、」

「「変身」」

フィリップはファングジョーカーに変身し、ＩＳを起動させ、一夏達と共に銀の福音の到達点を目指すのだった。

しばらくして、三人が到達地点に到着すると、銀の福音を発見した。

「いた。一夏集中しろ」

「あぁ、」

「僕らも一気に決めよう。翔太郎」

『あぁ、分かったぜ。』

一夏は零落白夜を発動させ、瞬時加速で間合いを詰め、Wも高く飛び上がり、タクティカルホーンを三回弾く。

『マキシマムドライヴ』

一気に飛行する銀の福音に攻撃が当たる瞬間、銀の福音が加速したまま、後方へ反転した。

「まさか」

「ここまで……」

『敵機確認。迎撃モードへ移行。《銀の鐘》、稼働開始』

急加速してきた銀の福音。Wはマキシマムドライヴを外し、タクティカルホーンを一回弾いた。

『アームズファング』

「はあああああ」

ファングの刃が銀の福音に当たる瞬間、突然、海中から灰色の触手が出現し、Wの脚が触手に捕まった。

「これは……」

『フィリップ。海の中に何かがいやがる』

そこには、カザリが創りだした合体怪物ゾウプレシオサウルスヤミードーパントの姿だった。

「くそ、」

「「フィリップさん。」」

一夏と箒がフィリップの名前を呼ぶと、翔太郎が代わりに答えた。

『二人とも、銀の福音を頼む。俺達はこいつをやる。』

第２５話　折られたＦ／一瞬の隙（前書き）

今回、銀の福音がさらに強化されます。理由は……この話で分かります。

第２５話　折られたＦ／一瞬の隙

一夏＆箒は銀の福音と戦っている中、Ｗはゾウプレシオサウルスヤミードーパント（ＺＰＳＹＤの読み方にします）と戦っていた。

『こいつ、今までのドーパントとは違うぞ』

「こいつは、あのグリードが生み出したヤミーと合体している。一気に決めよう翔太郎。」

『あぁ、早く倒して一夏達の援護だ。』

銀の福音が翼を広げると、そこには砲口があった。

「やばい。箒、」

「分かってる。」

一夏たちは回避行動を取ろうとした瞬間、銀の福音の翼から無数の光弾が放たれた。その光弾がＩＳアーマーに当たった瞬間、一瞬で爆ぜた。

（ダメージの量も凄いが……一番やばいのは、アイツの連射の

速度だ。）

連射速度が早く、さらに命中率が悪いが当たればかなりのダメージを食らうほどの力を銀の福音は持っていた。一夏と箒は左右から同時に攻撃をしようとしたが、相手に加速され避けられた。

「一夏。私が奴の動きを止める。」

「あぁ」

箒は二本の刀で銀の福音に激しい攻撃を仕掛けた。さすがの銀の福音も防御を使い出した。その隙を一夏は逃さなかった。雪片弐型にメモリスロットを付けると、ラウラと交換したジョーカーメモリを差し込んだ。すると、雪片弐型の刃の色が黒に変わった。

「零落白夜発動。切落白夜。」

黒い刃で銀の福音に斬りかかろうとしたとき、一夏はある物を見つけてしまった。それは……小型船がこっちにやってきた。

「やばい。うおおおおおおおお」

「一夏!!」

一夏は船を助けるために向かったのだった。

「あれは……」

フィリップ達も船を発見したが、ｚｐｓｙｄの攻撃が激しく助けに行けなかった。

『何だ？あの船は……密猟者か？』

「多分、こんな戦闘空域に近づくなんてバカげている。」

『だが、助けるべきだろ』

「あぁ、」

Ｗは船を目指すが、ＺＰＳＹＤも追ってきた。

一夏は船にたどり着いたが、その瞬間、白式のエネルギーが切れた。

「くそ、その船に乗ってる人。早くにげ……」

「掛かったね。」

その船に乗っていたのは金髪の男。この間、アリーナに現れた怪人の一人カザリだった。

「な、まさか……」

「面白いことになってるから、もっと面白くしてやるよ。」

カザリは銀の福音に向かって一つのメモリを投げる。

『ライトニング』

銀の福音はさっきまで銀色の翼……スラスターが銀色の光を放ったと思った瞬間、箒が海に落とされた。

「箒！」

「な、何が……」

さっきまで箒の紅椿と同じくらいの速さだったのが、眼でその姿を確認できないほどの速さに上がった。

「う…くぅ」

銀の福音は翼を広げた瞬間、銀色の光が箒に目がけて降ってきた。すると一夏とWが間に入り攻撃を防ごうとした。

「一夏、フィリップさん、左さん」

一夏とWは銀色の閃光を食らった。白式はボロボロになっていく。

『く、これは……フィリップ。何か手は……』

「……あるさ。取っておきの切り札が……」

その瞬間、フィリップが変身を解いた。

「フィリップさん」

「うおおおおおおおお」

一夏は必死に箒とフィリップを庇ったが、銀の福音が攻撃を終えた瞬間、フィリップと一夏はボロボロになり、そこには、カザリや銀の福音、ＺＰＳＹＤの姿が無かった。

「一夏、フィリップさん。いやあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ」

旅館で翔太郎が目を覚ますと、セシリア達が起きたことに気がついた。

「左さん。どうしたんですか?」

「……フィリップ。くそ、」

翔太郎は畳を殴った。それを見てセシリア達は何があったか理解したのだった。

第２５話　折られたＦ／一瞬の隙（後書き）

かなり、原作と違う感じになったけど、ここはあえて、銀の福音を強化させて、士たちを活躍させないといけないと思ったので……

……

第２６話　Ｊよ。再び／二人の決意（前書き）

ついに自分的にＷの好きなフォームが登場です。

第２６話　Ｊよ。再び／二人の決意

銀の福音の攻撃を受けた一夏とフィリップはそれぞれ、別々の部屋に運ばれた。

一夏の側には箒がいた。銀の福音の攻撃を受けて箒のリボンは焼かれて、今は何も縛っていなかった。

（私のせいだ）

一夏の身体は敵Ｉｓの攻撃を生身で受けた状態で、体中に包帯が巻かれていた。

（私がしっかりしていれば……一夏がこんな事には……）

ぎゅうっとスカートを握りしめる。その拳が白く色を失うほどに強く、強く握りしめた。

『作戦は失敗だ。以降、状況に変化があれば収集する。それまで各自現状待機しろ』

海から引き上げられ、旅館に戻った箒を待っていたのはその言葉だ。誰も箒の事を責めない。だけどそれが箒にとって一番辛いことだった。

（あの時、私が船にのっている奴らに気がついていれば……一夏やフィリップさんは……）

そんなときだった。突然部屋のドアが乱暴に開かれ、誰かが部屋に

入ってきた。だが、箒はそれが誰なのかと見る気力がなかった。

「あー、あー、わっかりやすいわね」

その声を聞いて部屋に入ってきたのは鈴だと気がついた。

「あのさ、」

話しかけてくる鈴に、箒は答えない。

「一夏やフィリップさんがこんな事になったのはアンタのせいだって思ってるんでしょ？」

「……」

「で、落ち込んでますよポーズ？――っざけんじゃないわよ」

鈴は怒りだし、箒の胸ぐらをつかんだ。

「確かにあの時、船に乗ってる奴に気がついていたら状況は変わってたかもしれないわね。でもね、あれは誰も気がつかないわよ。」

「だけど、私は……一夏を護るって決めたのに……護れなかった。私が……一夏の代わりに攻撃を喰らっていれば、一夏はこんなことには……」

バシッ、と箒の頬に痛みが走った。気が付くと鈴が頬を叩いていたのだ。

「アイツの代わりに？あんた一夏の代わりに自分が死ねばいいって

思ってるの?そんなのあいつだって、私だって許さないんだから、今は、今は後悔するよりも……」

「ーーーーー戦うべきか。」

突然声が聞こえたと思って、鈴と箒が声を聞こえた方を見ると、そこには士と夏海がいた。

「門矢さん。夏海さん」

「篠ノ之、お前は今やるべき事は後悔することか?違うだろ。やるべき事はずっとソイツに付き添うことか?違う。ソイツをやった相手をここで恨むことか?違う。お前がやることは……こいつのために戦うことだろ。違うか?」

「か、門矢さん。」

「箒ちゃん。私も旅をしてきて、ただ士くん達の帰りを待つことしか出来なかった。でも、ただ帰りを待つんじゃない、その間自分ができることがあるはずだって探しました。箒ちゃん、今一夏くんが目覚めるまでやるべきことは、もう貴方の中で見つかってるはずです。」

「……」

士と夏海の言葉を聞いて、箒は立ち上がり、涙を拭いて言った。

「私が、私がやるべき事は……戦う。戦って勝つ。そして一夏の帰りを待つ。」

「たくっ、やっと答え出せたわね。今、ラウラが奴の行動を追ってるからやるわよ」

別室にフィリップが眠っている側に翔太郎がいた。

「フィリップ。お前があの時言った言葉は……」

（……あるさ。取っておきの切り札が……）

フィリップがあの時言ったことを考えていると、部屋の中に照井と海東が入ってきた。

「左、フィリップはどうだ？」

「あぁ、一夏ほどじゃないが、かなりひどいらしい。」

「手ひどくやられたみたいだね。これじゃあ君が戦うすべはもう無いみたいだ。」

海東がそう言うと、翔太郎はある事を思い出し、自分の荷物を漁るとあるものを見つけた。

「……そうか、フィリップ。お前があの時言おうとしたこと

は……この事か」

翔太郎は照井と海東を見て言った。

「俺にはまだ戦うすべがあるんだ。海東、ありがとう。」

「ふん、僕は本当のことを言ったまでだ」

海東は照れている様子だった。翔太郎は荷物から見つけた物……
…ロストドライバーを見つけた。

そして、海岸に箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、翔太郎、照井、士、海東、ユウスケの１０人が集まった。

「みんな、行くぞ。」

箒がそう言うと、全員が頷き準備をした。

「紅椿機動」

「ブルーティアーズ機動」

「甲龍機動」

「ラファール・リヴァイヴ・カスタム二機動」

「シュヴァルツェア・レーゲン機動」

五人の少女がそれぞれのＩｓを起動させた。そして……

「行くぜ。照井、士、海東、ユウスケ。変身」

「あぁ、任せろ。変身」

「左、行くぞ。変…身」

「僕もやるべき事は分かっている。変身」

「取り戻そう。皆の笑顔を……変身！！」

『ジョーカー』

『アクセル』

『『インフィニット・ストラトス』』

『カメンライド・ディケイド』

『カメンライド・ディエンド』

翔太郎は切り札の戦士、仮面ライダージョーカーに変身。そして黒いＩｓ『Ｗボイルダー』を起動させた。

照井は加速の戦士、仮面ライダーアクセルに変身し、赤いＩｓ『アクセルトライアル』を起動させた。

士は世界の破壊者、仮面ライダーディケイドに変身。

海東は世界の終焉者、仮面ライダーディエンドに変身。

ユウスケは古代の戦士、仮面ライダークウガに変身。

１０人は銀の福音の場所へと向かうのだった。

第27話　Jよ再び／白い騎士の少女

一夏は白い砂浜にいた。

（ここは……）

いつの間にか制服に着替えており、夏の日差しがジリジリと照らす。
そんな中、歌声が聞こえてきた。

（誰か……いるのか？）

一夏は歌声の方へと向かった。しばらく進むと白い髪に白い肌、そして白いワンピースを着た少女が踊るように歌い、謡うように踊っていた。一夏は近くにあった古い流木に腰をかけ、少女の歌を聴き続けていた。

フィリップは白い空間……ガイアスペースの中にいた。

（ここは、僕は死んだのか？）

「いいえ、違うわ。来人。」

後ろから声が聞こえ、振り向くとそこには死んだはずのフィリップ

の母親、文音。シュラウドがいた。

「か、母さん。僕は一体どうなったんだ？」

「……敵の攻撃を受けてあなたは今は眠っている状態。」

「そうか。それで母さんはどうしてこの空間に僕を呼んだんだい？」

「この世界に、ガイアメモリを創りだそうとしている人間がいるわ。」

「ガイアメモリを……それは一体誰なんだ？」

「……それは」

海上２００メートル。そこで静止した『銀の福音』はまるで胎児のような格好でうずくまっている。膝を抱くような身体を守るように頭部から伸びた翼が包む。その時だった。不意に銀の福音が顔を上げた瞬間、超音速で飛来してきた砲弾が直撃し、爆発した。

「初弾命中。続けて砲撃を行う」

五キロ離れた場所に浮かぶ『シュヴァルツェア・レーゲン』とラウラは福音が次の行動に移る前に次弾を装填する。だが、今の銀の福音はガイアメモリ『ライトニング』の力もあってかラウラがいる場所に直ぐに接近してきたが……ラウラはにやりと口元を歪めた。

「セシリア」

銀の福音がラウラに攻撃しようとした瞬間、上空からセシリアが『スターダスト・シューター』の砲撃を放つ。銀の福音はその攻撃を避けた。

『敵機B発見。排除行動に移る』

「それはさせないよ。」

『ルナ』

セシリアの後方にいたシャルロットが銀の福音の動きをルナメモリのムチで縛った。

『銀の鐘発動後、敵機Cを排除』

銀の福音が銀の鐘を発動する瞬間、シャルロットはムチを解除し、持っていた二丁のショットガンで岩礁を砕き、上空に浮かせると同時にショットガンを上に投げると……

「超変身」

『フォームライド・クウガ・ベガサス』

クウガペガサスフォームとディケイドが変身したペガサスフォームが動きまわる銀の福音に数発弾丸を放つと、見事に命中した。そして……

『カメンライド・カブト』

『トライアル』

海の中にいたアクセルがトライアルメモリを使い、アクセルトライアルの全武装が外れたと思うと、装甲の色が白と青に変わり、超高速で銀の福音に向かって行った。ディケイドはヒヒイロの戦士仮面ライダーカブトに変身し、アタックライド『クロックアップ』でシャルロットが先ほど打ち上げた岩に飛び乗りながら、銀の福音に向かった。

「次は、海東。鈴。頼んだぞ」

アクセルとディケイドの同時蹴りで吹き飛ぶ銀の福音。だが、その吹き飛んだ先には……ディエンドと『甲龍』に乗った鈴が待ち構えていた。

『ヒート』

『ファイナルアタックライド、ディディディ、ディエンド』

鈴はヒートメモリをメモリスロットに挿し込み、双天牙月は真っ赤に燃え上がり、ディエンドはライダーの図柄が描かれた半透明のカードが照準となって標的を補足、カードのエネルギーを込めた巨大なビームを発射する「ディメンションシュート」を放つ体制に入った。

「行くわよ。『炎熱天牙月』」

「後は、君らに任せるよ。」

鈴とディエンドが銀の福音の翼を破壊すると、ジョーカーが接近した。

『ジョーカーマキシマムドライヴ』

拳にエネルギーを貯めこむジョーカー。銀の福音は直ぐに体制を整え、ジョーカーに拳をぶつけようとしたが、ジョーカーの方が早く、銀の福音は吹き飛ばされた。

「浅いか。メモリブレイクが出来なかった。だが、箒任せたぞ」

「はい」

銀の福音が吹き飛んだ先には、黒い刃と風の刃を持った『紅椿』に乗った箒がいた。そして、銀の福音が接近したと同時に、箒は刀を構えた。

「これが、私の切り札だ。『疾風・風椿』」

十字に切られた銀の福音は装甲が破られ、操縦者の姿が見えた。

「これで……」

全員が終わったと思った瞬間、突然、水の波動が全員に襲いかかってきたのだった。

第２７話　Ｊよ再び／白い騎士の少女（後書き）

次回と次の回で臨海学校編が終わります。さらに、Ｗとディケイドやっとあっちと合流できるかも、

第２８話　Ｘの輝き／戦う意味。（前書き）

ｗのＯＶＡ出るみたいですね。結構楽しみでしょうがないです。

今回と次回でついに臨海学校編終了です。そのあとは夏休み編です。

第２８話　Ｘの輝き／戦う意味。

突然、翔太郎たちを襲った水流はゾウプレシオサウルスヤミードーパントだった。そして、その背中に乗るのは怪人化したカザリとガメルがいた。

「しょうこにもなく挑んでくるなんてね。」

「またこいつらか。箒、こいつらの相手は俺たちライダーがやる。」

ジョーカーは箒たちにそう言うと、箒達は頷く。ジョーカーたちはヤミードーパントの背中の上に乗った。

「見ない間に、ライダーが増えたみたいだね。」

「こいつら……見たことがない怪人だな」

ディケイドがそう疑問に思うと、ディエンドが答えた。

「彼らはグリード。オーズの世界の怪人さ。僕らはまだその世界にいったことがないから分からなくって当然だよ。」

「オーズの世界か。」

士達にとって、カザリ達はまるで未知の怪人に近い存在だ。カザリたちがどうな攻撃をするかまるで読めなかった。

「それにしても、君たちは考えもなくこの背中の上に乗ったのかい？」

その瞬間、ディエンド、クウガ、アクセルの前にゾウヤミー、プレシオドーパントの分身体が十体現れた。

「これは……」

翔太郎が気を取られた瞬間、カザリの竜巻が襲いかかり、翔太郎は海に落とされそうになった。

「くっ、」

「左。」

「お前の相手は俺だ」

駆けつけようとしたディケイドだったが、ガメルによって前を塞がれた。

「くそ、重量系か。なら、これだ。」

『フォームライド　電王アックスフォーム』

電王のアックスフォームに変身したディケイドはガメルと力勝負を挑んだ。

翔太郎たちのピンチを見て、箒達も駆けつけようとしたその時だった。さっきまで停止していた『銀の福音』が見る見るうちに姿を変えて言った。

「まさか、『第二形態移行（セカンドシフト）』か。」

ラウラがそういった瞬間、銀の福音の姿が消え、気づいたときにはラウラの目の前にいた。

「まずい。こいつは……」

アクティブ・イナーシャル・キャンセラーを発動させようとしたラウラだったが、発動される前に銀の福音の『銀の鐘』を至近距離で喰らってしまい、ラウラはＩＳごと海に落ちていった。

「ラウラ。ラウラ。」

シャルロットが落ちるラウラに呼びかけるが、反応が無かった。シャルロットは銀の福音を見ると、さっきまでいた場所から既にいなかった。

「いない。」

「シャルロット。逃げろ」

箒の呼びかけにシャルロットが気がついた瞬間、銀の福音がオレンジ色のエネルギーブレードでシャルロットが持っていた武器を全て

破壊し、『銀の鐘』を放った。

「きゃあああああああああ」

「なんですの？あの動きといい。強さ。それにあの見た目は……」

今の銀の福音は背中と頭に銀色のエネルギーウィングを広げ、速さもさっきまでの速さと違い、目を離した瞬間、すでに目の前に着ているほどだった。

「セシリア。後ろから来てる」

鈴がそう言った瞬間、セシリアの後ろから銀の福音が接近していた。鈴はセシリアの所に向かい、崩山を放った。だが、

「そんな、ＡＩＣ？違う。それよりも強いバリア？」

放った攻撃は銀の福音が張ったバリアによって防がれた。そして、鈴とセシリアは『銀の鐘』を喰らい、海に落ちていった。

「みんな、よくも、私の仲間を」

箒は銀の福音に接近し、雨月の打突を放つ瞬間、下から竜巻が襲ってきた。

「これは……」

箒が下を見ると、カザリが竜巻を使って箒の妨害をしていた。そして、カザリに気を取られていた瞬間、銀の福音の砲撃を受けてしまい、銀の福音に首を掴まれた。

（ここまでか……すまない。皆。）

「箒。くそ。」

翔太郎は何とか這い上がり、Ｉｓを起動させ、箒を助けに行こうとしたのだが、

「させるか。」

カザリが後ろから竜巻を放ち、Ｗボイルダーはコントロールを失い、さらに、合体怪人の砲撃を喰らい海に沈んでしまった。

ガイアスペース

「なるほど、それがガイアメモリを作っている組織だね。ありがとう母さん」

「いいのよ。必ず奴らを止めて、」

「あぁ、任せて、僕には大切な相棒がいるから」

フィリップはシュラウドからガイアメモリを作っている組織について話を聞いて、目覚めようとしているとき、シュラウドがある質問をした。

「来人、あなたに最後に聞きたいことがあるの」

「何だい？」

「あなたは何のために戦うの？」

シュラウドがそう聞くと、フィリップは笑顔で答えた。

「この世界を悲しませないためだよ。それが、僕の、いや、僕らの戦う理由さ。」

「そう、気をつけてね」

さざ波の音を聞きながら、一夏は飽きもせずに女の子を眺めていた。ところが、ふと気がつくと少女の歌は終わっていた。踊りも止めて、

少女はじぃっと空を見つめている。一夏は不思議に思い、座っていた木から離れて少女の隣へ向かう。

「どうかしたのか？」

一夏は声をかけるが、少女はまだじぃっと空を見つめたまま動かない。

なんとなく空を眺めてると、ふと少女の声が耳に届いた。

「呼んでる……行かなきゃ」

「え？」

一夏は視線を戻すと、もうそこに少女の姿はなかった。

（……あれ？）

「力を欲しますか……？」

「え……」

急いで振り向くと、波の中――膝下までを海に沈めた女性が立っていた。その姿は白く輝く甲冑を身に纏った騎士さながらの格好だった。大きな剣は自らの前に立て、その上に両手を預けている。その顔は目を覆うガードに隠されて、下半分にしか見えない。

「力を欲しますか……？　何のために……」

「ん？　んー……難しいことを訊くなぁ……そうだな。友達を――

いや、仲間を守るためかな」

「仲間を……」

「仲間をな。なんていうか、世の中って結構色々戦わないといけないだろ？　単純な腕力だけじゃなくて、色んなことでさ」

「そういうときに、ほら、不条理なことってあるだろ。道理のない暴力って結構多いぜ。そういうのから、できるだけ仲間を助けたいと思う。この世界で一緒に戦う――仲間を」

「ねえ、早く行こう」

後ろから声をかけられると、白いワンピースの女の子が立っていた。人懐っこい笑みで一夏の手を取る。

「ほら、ね？」

少女はにこりと微笑み、一夏は頷く。

「ああ」

すると、この世界が眩いほどに輝きを放ち始める。

「な、なんだ？」

真っ白な光に抱かれて、まるで夢の終わりのように目の前の光景が徐々にぼやけていき、この世界から一夏は消えた。

（そういえば、あの娘。誰かに似ていたな）

白い……騎士の少女

第２８話　Ｘの輝き／戦う意味。（後書き）

次回ついにエクストリーム登場です。

第２９話　Ｘの輝き／発動ダブルエクストリーム（前書き）

今回でやっと臨海学校編が終わります。次回は夏休みですが、最後辺りにちょっとしたゲストが登場です。

第２９話　Ｘの輝き／発動ダブルエクストリーム

カザリと合体怪人の攻撃を受けた翔太郎は変身が解け、海の中に沈んでいった。

（くそ、折角フィリップが残してくれた切り札が……）

薄れゆく意識の中、翔太郎はあるものを見た。それは、海の中に鳥が飛んでいた。

（コレは……幻覚？そうだよな。海の中に鳥が……鳥？いや、違う。あれは……）

翔太郎はダブルドライバーを装着し、ジョーカーメモリを入れた。その瞬間、右側にサイクロンメモリがあった。

（やっと、起きたか。フィリップ。）

『サイクロン・ジョーカー』

Wに変身し、ダブルドライバーに鳥型のガイアメモリエクストリームメモリが装着された。

『エクストリーム』

銀の福音に捕まった箒。銀の福音は箒の首をぎりぎりと締め上げられた。さらに、紅椿を銀色の羽が包み込んだ。

（私は……ここで終わるのか。すまない。一夏。最後に……一夏に会いたい。）

羽の輝きが増す中、箒はまぶたを閉じた。

「うくっ、まずいですわ。箒さんが」

落とされた四人の中、一番最初に目覚めたのはセシリアだったが、機体が損傷されて箒を助けることが出来なかった。

「これじゃあ、一夏さん、顔向けが……」

セシリアがそう思った瞬間、上から声が聞こえた。

「後は、任せろ。」

「えっ、あれは…・……」

突然、銀の福音が箒の拘束を解いた。箒は何があったか理解できなかったが、銀の福音が荷電粒子砲による砲撃で吹き飛んでいた。

（な、何が起きて……）

そして、箒は自分を助けた姿をみた。猛々しい白い翼を広げ、左手には多機能武装腕「雪羅」が身につけられ、右手には零落白夜を発動させた第二形態移行（セカンド・シフト）した白式を身に纏った一夏の姿だった。

「俺の仲間に手を出すな。」

一夏の復活をディケイド達も見ていた。

「やっと、復活か。」

「馬鹿な。あの時完全に倒したはずなのに……」

驚くカザリだったが、その瞬間、合体怪人の首が切り落とされた。カザリが攻撃した犯人を見ると、そこには、サイクロンジョーカーエクストリームに変身したWの姿とそれに進化したWボイルダーの姿があった。

「待たせやがって、遅刻だぞ。フィリップ」

『悪かったね。翔太郎。だけど、間に合ったろ。』

「あぁ、そうだな。」

「馬鹿な。あのボロボロの姿でどうやって復活できた。それに、あの人間の武装も進化した。どういう事だ。」

カザリが叫ぶと、ディケイドがこう言った。

「人はどんな困難でも倒れ、くじけてしまう。だけど、それでも、立ち上がれる。」

『人は困難を乗り越えるからこそ、強くなれる。』

「あぁ、そして、大切な人が傷つこうとしたとき、ああやって、ピンチに駆けつける。それが、人だ。」

士、フィリップ、翔太郎がそう言うと、カザリは震えながら聞いてきた。

「お前たちは一体何者だ。」

「「『覚えておけ！』」」

「俺は」

「俺達は」

『僕達は』

「通りすがりの」

「『2人で1人の』」

「「『仮面ライダーだ!!』」」

三人が決め台詞を言った瞬間、ディケイドの前に一枚のカードが現れた。

「新しい力だ。」

『アタックライド・インフィニット・ストラトス』

アタックライドを発動させた瞬間、ディケイド、ディエンド、クウガの三人にそれぞれのＩｓが装着された。

ディケイドはマゼンタカラーに四肢と胸に１０人のライダーのエンブレムが刻まれたＩｓ『ディメンション』。ディエンドはシアンカラーに両腕には大型の超電磁砲を身につけた『終焉』クウガは右腕は赤、左腕は青にロッドが握られ、右足には緑に腰にはボウガンが装着、左足は紫に腰には剣が装着。胸には黒にクウガのエンブレムが刻まれた『空我』が装着された。

崩壊する怪物の中、カザリとガメルの二人は海に飛び込み、姿を消した。アクセルは飛び、Ｉｓを発動させ、一夏達の方へ向かった。

一夏は箒の元に駆けつけた箒は一夏の体のことを心配していた。

「一夏、お前、身体は大丈夫なのか？」

「おう、待たせたな。」

「よかっ……よかった。本当に……」

泣きじゃくる箒を一夏は頭をなで、箒にリボンを渡した。

「これ、やるよ」

「これは……」

「今日、誕生日だろ。こんな時に渡すのはアレだけど、箒は髪を縛ってないとな。」

「……一夏。ありがとう。」

箒は顔を赤らめながら言った。すると、銀の福音が体制を整え、攻撃してきたが、

「やれせるか。プリズムビッカー」

銀の福音の砲撃をwが防いだ。

「間に合ったみたいだな。一夏」

「はい、翔太郎さん。」

『さぁ、ここから再戦だ。織斑一夏、篠ノ之箒。今の君たちならこれが使えるはずだ。』

そう言って、渡してきたのはXと書かれたガイアメモリだった。すると、メモリが白い指輪と赤い指輪に変わり、一夏と箒の指にはめられた。

「フィリップさん。これは……」

「それに、指輪の位置が……」

『エクストリームの力だ。今君たちふたりなら、使えるはずだ。アクセル、ディケイド、ディエンド、クウガ。僕らは奴の動きを止めよう。』

「「「「あぁ」」」」

『敵機、エネルギー増大。撤退行動に移る。』

銀の福音が逃げ出そうとした瞬間、アクセルがトライアルを発動させ、銀の福音の前に出た。

「させるか。」

『トライアル・マキシマムドライヴ』

アクセルが超高速の蹴りを放つ。銀の福音はその攻撃に耐えながら、翼を広げた。だが、後方からディエンドが向かっていた。

「まずは、その翼をもらうよ。」

『アタックライド・ツインカノン』

ディエンドの両腕の超電磁砲と肩に現れた大型の砲台が銀の福音の翼に狙いを定め、放った。銀の福音は攻撃を受け、翼が壊された。

『機体損傷。撤退行動不能。よって、接近する敵機を近距離戦で仕留める』

銀の福音はエネルギーブレードを展開させ、一夏たちの所へ向かった。だが、クウガがその行動を抑えた。

「やらせない。」

腰にあるタイタンブレードを抜き、銀の福音のブレードを破壊すると、ドラゴンロッドで銀の福音の装甲を破壊した。そして……

「行くぜ。ディケイド」

「あぁ、任せろ。W」

『ファイナルアタックライド。ディディディ、ディケイド』

『エクストリームマキシマムドライヴ』

wは緑と黒の2色の竜巻に包まれながら上昇し、エクストリームメモリのエネルギーを宿して放つ両足蹴りを、ディケイドは自分と標的との間に現れる複数のホログラムカードを通過することで、それらのエネルギーを自身に集中させて跳び蹴りを放った。その瞬間、操縦者がほおり投げられた。wはその操縦者を上手く助けられたのだが、操縦者を失った銀の福音は見る見るうちに姿を変えていく。

「一夏、箒。チャンスだ。」

一夏と箒は手を握りながら、刀を構え、接近してくる銀の福音に狙いを定めた。

「行くぞ。箒」

「あぁ、一夏。」

二人は同時に刀を振った瞬間、赤と白の斬撃が銀の福音を斬りつけ、銀の福音は爆発した。

銀の福音を倒した一夏たちを待っていたのは千冬のお説教だった。

「作戦完了と言いたいが、お前たちは独自行動という重大な違反を犯した。学園に戻ったら反省文だ。分かったな。」

「「「「「「「「「「はい」」」」」」」」」」

その後、一夏たちは診断を受けることとなり、説教も終わったのだった。

翔太郎とフィリップは砂浜に行くと、そこに士とユウスケと海東がいた。

「説教は終わったのか？」

「まぁな。お前らも行くのか？」

「ここでやるべき事は終わった。俺達は次の世界へ旅に出る。」

「そうか、また会えるか？」

翔太郎がそう言うと士が笑いながらこう答えた。

「世界はつながってる。いつでも会える。俺はライダーという物語が続く限り、旅を続ける。」

「そうか、じゃあ、またな。」

「今度は争いのないときに会いたいものだね。」

翔太郎とフィリップが別れを告げ、旅館の戻ろうとしたとき、突然、五人を銀色のオーロラが包み込んだ。そして、たどり着いたさきは……崩壊した世界だった。

「ここは……」

翔太郎がそう言った瞬間、赤い光が見えた。そして、全員が光が見えた場所を見ると、そこには黒髪の少女が巨大な物体に攻撃を受けていた。

「まずい。これではあの娘が……」

翔太郎とフィリップは変身しようとしたが、体が動かなかった。そして、五人の前にひとりの男が現れた。

「ディケイド。」

「鳴滝。なんの用だ。」

士がそう言うと、鳴滝は突然膝をついて土下座をした。

「頼む。この世界を、暁美ほむらを救ってくれ。彼女を永遠の牢獄から救い出してくれ」

突然の鳴滝の願いに、五人が動揺する中、フィリップはある物を発見した。

「あれは……オーズ？」

「何だって、」

翔太郎も見ると、オーズともう一人のライダーが赤い巨人と白い怪人と戦っていたが、今にも負けそうだった。士達も辺りを見渡すと倒れた三人の少女たちを見つけた。

「鳴滝。これはどういうことだ。」

「この世界は、滅びかけている。そして、ある少女がある少女を助けるために時間を巻き戻しかけている。その結果、この世界のバランスが崩れかけている。少女は交わした約束を守るためにああやって戦っているが、インキュベーターはそれすら許さない。今、必要なのは希望の力を持ったライダーだ。頼む。ディケイド、お前の力でこの壊れかけた世界を破壊し作り直して欲しい。」

鳴滝は必死に頼み込んだ。すると士はため息を付き、答えた。

「世界に迷惑を掛けるのは俺だけで十分だ。行くぞ。ユウスケ、海東。この世界を破壊（すくう）1ために」

元の世界に戻った翔太郎とフィリップは一旦士達と別れ、千冬を捜すと千冬と束がいるのを発見した。

「織斑先生」

「むっ、左、フィリップ。どうした?」

「慌てて何かな、かな。もしかして、束さんとの別れを惜しんでるのかい?大丈夫。連絡はフィリップくんが」

「いや、違う。俺とフィリップは今すぐ行かなければならないところが……」

翔太郎が言いかけた瞬間、千冬が目を閉じた。

「学園からは適当にいっておく。私が眼を閉じているうちに、さっさと助けに行って来い。その間私は何があったかは知らない。分かったな。」

「あぁ、ありがとう。行くぞ、フィリップ。」

「あぁ、」

二人が士の所に向かおうとした瞬間、束が三枚のメダルを渡した。

「これは……」

「この間、ちーちゃんからもらったメダルを解析して、創りだしたメダルだよ～ん。もしかしたら必要かもしれないからね。」

「ありがとう。篠ノ之束。」

「ふっふ～ん。任せなさい。」

士達のところに戻ると、そこには照井がいた。

「照井。」

「お前たち二人で行くつもりか。手なら貸す。その救いを求める世界に行こう」

「あぁ、」

「行こうか」

六人は写真館に入ると写真館は銀色のオーロラに包まれこの世界から消えたのだった。

第２９話　Ｘの輝き／発動ダブルエクストリーム（後書き）

というわけで、ゲストとして、オーズとバースとまどか☆マギカのキャラと鳴滝さんでした。

束さんが創ったメダルについてはオーズの方で明かします。多分、まどかの方、オリジナル展開で最終決戦やるかも……

次回はＩｓの世界に戻ってきた翔太郎たちの夏休みです。

第３０話　新たなＯ／戻ってきたＩｓ学園（前書き）

というわけで、今回からはオーズとディケイドが完全参戦します。

第３０話　新たなＯ／戻ってきたＩｓ学園

ある日の午後、職員室で千冬は書類を片付けながら、お茶を飲んでいた。

「平和だな。先日の銀の福音事件が嘘のようだな」

臨海学校で暴走した銀の福音を止めた一夏達と仮面ライダー。今仮面ライダーである翔太郎とフィリップと照井はまだ帰ってこない。

「……あいつら、無事だろうか？」

千冬はそう言いながら、一枚の書類に目をやった。その書類に書かれていたのは、黒い怪人と銀色の怪人の姿。この二人はＩｓ学園を襲撃し、そして、銀の福音の時も絡んでいた。

「こいつら、『奴ら』以上に危険かもしれないな。」

ふっと、窓に目をやると、校庭に一夏達いつものメンバーが何かをやっているのに気がついた。

「あいつらは、平和でいいな。」

その時だった。突然銀色のオーロラが一夏達の前に現れた。

「あれは……もしかして……」

一夏たちが外を歩いていると、突然銀色のオーロラが現れた。そしてオーロラが消えるとそこには翔太郎たちと見知らぬ男女が４人いた。

「やっと、戻ってこれたな。」

「まぁ、ずいぶんとあっちの世界にいたからね。」

「久しぶりに帰ってきたな。」

「ここが別の世界なんだ。」

「私たちの世界とあんまり変わらないですね」

「そうだな。だが、少しだけ違うところがあるな。」

「メダルの匂いが少しするな。」

戻ってきた翔太郎たちは、一夏たちに気がついた。

「お、久しぶりだな。一夏」

「しょ、翔太郎さん。戻ってきたんですか？」

「あぁ、ようやくな。とりあえず、千冬先生に報告したいんだが……」

「じゃあ、俺達も付いていきます。」

一夏たち、翔太郎たち、そして、謎の四人と一緒に職員室に向かっている途中、箒が翔太郎に聞いた。

「左さん。この人達は？」

「ん、あぁ、そういえば、紹介がまだだったな。」

「どうも、はじめまして、火野映司です。それで、こっちのヤンキー風なのが……」

「……アンクだ。」

アンクは機嫌悪そうに言った。

「それでこっちが、伊達さん」

「伊達明だ。よろしくな。」

「それでこっちは、マミちゃん」

「はじめまして、巴マミです。」

四人が自己紹介し終わると、翔太郎があることを言った。

「火野と伊達は俺達と同じ仮面ライダーだ。」

「他にも仮面ライダーがいたなんて……」

一夏が驚いていた。すると、千冬がやってきた。

「戻ってきたみたいだな。左、フィリップ、照井。」

「久しぶりだな。千冬先生」

「あぁ、そうだな。所で、そっちのやつらは？」

「あぁ、とりあえず、色々と事情を説明するか。」

職員室で翔太郎たちは行ってきた世界について話した。話し終えると千冬は少し考えながらこう言った。

「別世界か。それにあの怪人たちの情報を持っているのか。分かった。火野たちは私たちの方でどうにかする。それに、巴はまだ中学生だが、素質の方を調べてみたい。」

「え、はい。」

こうして、オーズを交えたＩｓ世界は騒がしくなるのだった。

第３０話　新たなＯ／戻ってきたＩｓ学園（後書き）

次回はディケイドが合流です。

第３１話　新たなＯ／蠢く闇

マミの適正試験が行われている中、学園の屋上にアンクは一人柵の上に座っていた。

「確かに、この世界にセルメダルがあったことは確かだな。だが、何故この世界にきてから悪意の波動が感じるんだ？まさか、奴の残留思念がこの世界にあるのか？」

アンクがそう言っていると、突然後ろから気配を感じ、振り向くとそこにはラウラがいた。

「お前か、化物」

「ひどい言い草だな。人間。映司にでも俺のことを聞いたか？」

「いや、お前の正体については何一つ聞いていない。だが、お前から私にメダルを埋め込んだ奴と同じような感じがする。」

「ほう、メダルを埋めこまれた経験があるのか。カザリか。アイツも仕事が早いな」

「カザリ？あの黒いヤツの名前か。まぁいい。もしお前が奴らと同じように悪事を働き、私の仲間に手を出せば……殺す」

「ふん、やってみろ」

あるマンションの屋上に、グリードの四人が集まっていた。

「へぇ、ウヴァ達も別世界に行っていたんだ。」

「あぁ、オーズの奴もな。」

「だけど、収穫は色々とあったわ。そっちは？カザリ」

「僕らの方も彼女たちと出会って、素晴らしい力を手に入れたよ。」

「あれなら、オーズを倒せる。」

「新しい力？」

メズールが不思議そうに聞くと、カザリは黒い腕輪を見せた。

「これが、新しい力。僕専用の『黒き竜巻』だ。」

カザリがそう言うと、ガメルも銀色の腕輪を見せた。

「これ、俺の専用機『銀の重力』」

二人は腕輪を見せるなか、一人の女性がやってきた。

「やぁ、カザリ、ガメル。僕らが与えた専用機、喜んでくれてありがたいよ。」

「君か。まぁ確かにあいつらに勝つにはこの力が必要だからな。それに交換条件が君たちのメンバーにヤミーを埋めこんでくれときたからね」

カザリがそう言うと、謎の女性は笑った。

「『彼ら』はメモリの力を利用して、仮面ライダーを倒そうとしたけど、違うんだよ。本当に必要なものは、メモリと欲望をどう使うかだ。メモリに執着した『彼』に勝てるわけ無いよ。」

女性がそう言っていると、メズールが睨みながら言った。

「いい加減、あなたの名前を教えてくれないかしら?」

「そうだったね。私の名前はオルタター・リーン。そしてライダーとしての名前は……」

リーンはWドライバーでもオーズドライバーでもない黒いベルトを腰に装着し、全身黒と赤の姿に、白いマントを纏った仮面ライダーに変身した。

「私は、仮面ライダーブラッド。悪意と云うなの血染めの戦士。」

それから、数日後、映司とアンクは学校の清掃員としてバイトすることに、伊達は保健医として働き、マミは現在、千冬のもとでＩｓについて学んでいる。箒達とも仲が良い。そんななか、もう一行の乱入者が……

現国の授業、そこにいた教師に、一夏達と翔太郎たちは絶句していた。

「今日から、新しく現国を教える。門矢士だ。俺が授業をやるんだ。赤点なんか取るなよ」

こうして、新たな参入者を迎えたＩｓ学園は夏休みになるのだった。

第３１話　新たなＯ／蠢く闇（後書き）

というわけで、次回からそれぞれの夏休みです。

第３２話　始まるＮ／プールでの騒動（前書き）

今回からしばらく夏休みの話が始まります。

第３２話　始まるＮ／プールでの騒動

ウォーターワールド、夏に入って完成した新しいプール施設だ。そこに鈴とセシリアが暗い顔をしていた。理由は……

「何で、一夏の奴が来ないのよ。」

「どうして、鈴さんと一緒に遊ばなければいけないんですか？」

二人が落ち込んでいる理由というのは……先日、鈴が一夏をウォーターワールドに誘ったのがいいが、一夏は白式のデータ取りに協力しなければならなくなったのだった。一夏は鈴に悪いと思って一夏のチケットをセシリアに渡したのだった。

「はぁ、まったく、折角水着新調したのに」

「本当ですわ。せっかくのデートが……」

二人はため息を付き、泳ぐ気分でもないので、帰ろうとすると園内放送が響き渡った。

『本日のメインイベント、水上ペアタッグ障害物レースは午後１時より開始いたします。優勝商品は沖縄五泊六日の旅をペアでご招待』

二人はその放送を聞いて、二人は手を取り合った。

「やるわよ。セシリア、」

「えぇ、鈴さん」

二人は早速申し込み、レースは始まろうとしていたのだったが……
…ある一組以外は全員女性だったが……その一組がかなり見覚え
があった。男の方は黄色いマスクをし、女性のほうは赤いマスク
をしているのだが、鈴とセシリアはそれが誰なのか分かった。

「ふぃ、フィリップさん？」

「そ、それに篠ノ之博士まで、」

二人が声をかけると、男のほうが言った。

「フィリップ？誰のことだい？僕らは通りすがりの仮面アスリート
さ」

「そして、私は私で、そのパートナーさ。」

と二人はとぼけるが……明らかに正体がバレバレだった。何でこの二人がこんな所にと鈴とセシリアがそう思っていたのだった。

第３２話　始まるＮ／プールでの騒動（後書き）

短めでスミマセン。次回はプール後編です。そのつぎの回は学園での事件が起こる話になります。

第３３話　始まるＮ／プールでの戦い。（前書き）

今回はプールでの話の後編です。

第３３話　始まるＮ／プールでの戦い。

そんなこんなで、水上ペアタッグ障害物レースは始まろうとしていたのだが、鈴とセシリアにとってはそこまで難しい競技ではなかったのだが……

『おーっと、これはすごい、女子高生のペアが現在トップに居る仮面アスリートペアを追い上げている。』

そう、問題は現在トップを走る仮面アスリート、束とフィリップのペアだった。何故か変装して参加をしていた。

「くっ、あの二人早すぎよ」

「さすがは、仮面ライダーと篠ノ之博士ですわね。」

「でも、私たちには勝てないわよ。」

「えぇ、そうですわね。」

二人は全速力で前を走る二人を追うのだった。

トップを走るフィリップと束は二人の様子を見ていた。

「さすがは、専用機もちだね。」

「ふっふ～ん、箒ちゃんやいっくんまでとは行かないけどね。でも、このままじゃ私たち負けちゃうわね」

「なら、これだ。」

フィリップが取り出したのは、ファングメモリだった。フィリップはファングメモリを後ろに投げると、ファングメモリがセシリアと鈴に襲いかかってきた。

「きゃあ、」

「さすがにそれは卑怯ですわ。なら……」

「そうね、そっちがそれなら……こっちは……」

鈴とセシリアの二人はＩＳを起動させた。起動を見て、観客たちは驚きを隠せてなかった。

『おー、まさか、ＩＳ学園の生徒だ。これは凄いことになってきたぞ。どうする仮面アスリート』

と実況がそんな事を言うと、何故か束が大砲が六門あるＩＳに乗っていた。

「甘いね。この束さんを甘く見過ぎだよ。」

「な、さすがは束博士。一気に行くわよ。セシリア」

「えぇ、鈴さん。」

三人は互いの武装を展開させ、同時放つ。だが……

「へ、」

「あ、」

「やちゃった」

「やれやれ」

一斉に放った攻撃で爆発が起こり、ウォーターワールドは揺れたのだった。

その後、鈴、セシリア、フィリップ。（束は逃げ出した）の三人は従業員にこってり怒られていたのだった。

「はぁ、折角の景品が……」

「まさか、パァになるなんて……」

「まぁ、あんなところでＩｓを起動させるからだよ。」

「というか、フィリップさんは何で束さんと一緒にいたんですか？」

「ん、あぁ、少し話を聞きたくってね。僕らが扱う仮面ライダーのＩｓについてだよ」

「そうなんですか。それで、何か分かったんですか？」

鈴がそう聞くと、フィリップはしばらく考え、答えた。

「実は……」

「おーい、三人とも」

フィリップが言いかけた瞬間、一夏が遠くから呼んでいた。どうやら、迎えは一夏らしい。フィリップはそのまま帰ろうとすると、突然腰にダブルドライバーが出現した。

「どうやら、翔太郎がピンチみたいだね。」

第３３話　始まるＮ／プールでの戦い。（後書き）

次回は学園で起こる事件です。

第３４話　始まるＮ／Ｉｓ学生襲撃事件（前書き）

今回と次回の話で、翔太郎に恋人ができます。それが誰かって？それは見てからのお楽しみで、

第３４話　始まるＮ／Ｉｓ学生襲撃事件

ある日の朝、照井は千冬と一緒に学園の屋上に来ていた。そこには獣のような爪痕がそこかしこにあった。

「これで、五件目だな。」

「あぁ、そうだな。襲われたのは学園の生徒か。どう思う?千冬先生」

千冬はしばらく考え込んでいた。事件の始まりは一週間前だ。一週間前、Ｉｓ学園の生徒が制服をビリビリに破られ、倒れている姿を発見された。この時、まだ翔太郎たちが戻ってきておらず、千冬は生徒に気をつけるようにと伝えただけだったが、それから何度も同じようなことがあり、千冬は刑事である照井に捜査協力を依頼したのだった。

「明らかにＩｓ学園に恨みがある者の犯行だと思うが……この爪あとはどう説明する?」

「ドーパントか、それかヤミーの仕業か。これはフィリップに聞いてみる価値があるな。」

照井と千冬の二人は現場を他の職員に任せ、翔太郎たちのところへ向かったのだった。

その頃、翔太郎は一夏と共に食堂にいた。

「へぇ、フィリップさん出かけてるんですか？」

「あぁ、何か調べたいことがあるって、地球の本棚でも調べられないらしいからだってよ。」

「ふーん、」

一夏はお茶を飲み干し、席を立った。

「それじゃあ、俺これから白式の検査なんで」

「おう、頑張れよ。」

翔太郎は一夏を見送り、自分の部屋に戻ろうと思い、食堂の入り口にたどり着くと誰かとぶつかった。

「おっと、大丈夫か？」

「あ～、しょうしょうだ。」

ぶつかったのは布仏　本音、一夏はのほほんさんと呼んでいる。

「おっ、本音か。どうしたんだ？何か急いでるように見えたけど、」

「う～、しょうしょう。今時間ある？」

「まぁ、やることないし、何だ？」

「ここじゃ、あれだから、ちょっとしょうしょうの部屋でいいかな？」

「まぁいいけど、」

翔太郎は本音を自分の部屋に招き入れた。いつもニコニコしている本音だが、何だか少し元気が無い。

「それで、話って何だ？」

「実は……私、誰かに狙われてるの。」

「狙われてる？」

あまりにも現実離れがしている内容だった。こう言った場合、狙われるのは男である一夏とかだと思うが……何で本音が狙われているんだ？

「実はね、昨日、学校に忘れ物しちゃって、夜遅くに取りに行ったんだけど……屋上の方で物音がして、行ってみたら……黒い影が誰かを襲ってるの見ちゃって、逃げ出そうとしたときに目があった気がして……それで、今日に何だか視線が感じるの」

「う～ん、黒い影か。こういう時にフィリップがいればな。」

「そういえば、フィリ～は？」

「ん、出かけてる。」

「そうなんだ。」

トントン

突然ドアのノックが聞こえた。翔太郎は『どうぞ』と言い、部屋に招き入れると……来客は照井と千冬だった。

「左、フィリップはいるか？」

「残念ながら、出かけてる。てか、織斑先生、何で睨んでるんだ？」

「左、何自室に女生徒を連れ込んでいるんだ？お前はそんなに反省文を書きたいか」

「ま、待ってくれ、これには事情が……」

「相談に乗ってくれてありがとうね。しょうしょう」

本音は部屋を出ていき、翔太郎はというと千冬にこってり絞られたのだった。

夕方、本音は学園から寮に戻る途中、妙な気配を感じた。

「ほぇ？だれかいるのかな？」

後ろを振り向くと、そこには黒い豹の怪人がいた。

「見つけたぞ。女。まさか、犯行現場を見られていたとはな。お前はここで消えてもらう」

「え、え、」

怪人が本音に飛びかかった。本音は目をつぶった。だが、何時まで経っても痛みが来ない。恐る恐る目を開けるとそこにはコウモリとクワガタとクモの玩具が怪人を牽制していた。

「こ、これって」

「ガジェットに警護させていて成功だったな。」

「左の狙い通りだな」

そこには翔太郎と照井がいた。

「き、貴様ら、邪魔をするな」

「はん、女性を襲うなんてくだらない真似をしやがって、照井、行くぞ」

「あぁ、」

翔太郎はダブルドライバーを装着し、照井はアクセルドライバーを装着し、二人は同時にメモリを入れた。

「『変身』」

「変……身」

第３４話　始まるＮ／Ｉｓ学生襲撃事件（後書き）

というわけで、次回は戦闘です。オーズとディケイドメインの話はこの次の話で、

第３５話　始まるＮ／ばらまかれたガイアメモリ（前書き）

今回、翔太郎に恋人が……まぁ、相手はあの人ですけどね

第３５話　始まるＮ／ばらまかれたガイアメモリ

本音のピンチに駆けつけた翔太郎と照井の二人はライダーに変身するのだった。

『サイクロン、ジョーカー』

『アクセル』

「『さぁ、お前の罪を数えろ』」

「振り切るぜ。」

「く、くそがまさか仮面ライダーがいるなんて……だけどよ。俺のスピードについてこれるかな？」

怪人は超スピードで、Ｗとアクセルに襲いかかった。鋭い爪がＷとアクセルを襲う。

「くっ、こいつ。速すぎる」

『どうやら、こいつはブラックパンサーのドーパントだね。だけど、』

「あぁ、分かってる。スピード勝負なら俺が相手だ。」

『トライアル』

アクセルはトライアルに変身し、パンサードーパントに追いつく。

「な、俺のスピードについてこれるだと」

「まずはその速度を落とす。」

アクセルはパンサードーパントに蹴りを放ち、パンサードーパントは動きが止まった。その隙を突き、Wはメモリチェンジを行い、ヒートジョーカーに姿を変えた。

『ヒート、ジョーカー』

「一気に行くぜ。」

『あぁ、』

『ジョーカーマキシマムドライヴ』

『トライアルマキシマムドライヴ』

Wは半分に割れ、両腕に炎を込め、何度も叩きつける。そして、後方からトライアルの蹴りがTを描き、マキシマムドライヴを決めた。

「9・8秒。それがお前の絶望までのタイムだ。」

「『ジョーカーグレネード』」

二人はドーパントを倒し、男の身柄を千冬に渡した。男が何故こんな事をやったかというと、それは……女性に恨みを持っていたから。そのため無差別に襲っていたのだった。何故Ｉｓ学園を襲ったかというのはある女に命令されたからだと言っていた。事件はこうして終を告げたのだったが……翔太郎にある事件が起きた。

「ん、本音。」

翔太郎は寮の廊下を歩いていると、本音と会った。何故か本音は顔を真赤にしていた。

「あ、あの、翔太郎さん」

何故かいつもあだ名で呼ぶ本音だったが、何故か名前で呼んでいる。翔太郎は何故か分からなかった。だが……

「好きです。付き合ってください」

「な、なにぃぃぃぃぃぃぃぃぃ」

その翔太郎の声はＩｓ学園に響くのだった。こうして、Ｉｓ学園で

起きた事件は終わりを告げるのだったが……

あるマンションでカザリは黒い袋を持っていた。

「言われたとおり、メモリをばらまいといたよ」

「ありがとう。カザリ。ふふ、様子見に送ったドーパントがやられたね。」

リーンは不敵な笑みを浮かべた。

「これで、何が分かるんだい？」

「仮面ライダーの実力だよ。どうやら私の実力には及ばないみたいだね。さて、今度は私たちが仕掛ける番だ。」

第３５話　始まるＮ／ばらまかれたガイアメモリ（後書き）

次回はオーズとディケイドメインです。

第３６話　Ｉとの接近／血の戦士（前書き）

オーズとディケイドメインですが、基本箒視点です。

第３６話　Ｉとの接近／血の戦士

篠ノ之神社、そこは箒の実家でもある。箒はそこで一人ため息を付いていた。

「はぁ、」

何故ため息を付いているかというと、この間の臨海学校で一夏と急接近しかけていたのだが、見事に失敗に終わっていた。

（あのまましていたら、やっぱり……キスを……）

「箒ちゃん。どうしたの？」

箒は自分の唇に触れていると、突然後ろから声をかけられた。振り向くと雪子叔母さんだった。

「あ、いえ、ちょっと考え事を……それでどうかしたんですか？」

「あぁ、箒ちゃんにお客さんよ。黒髪の女の人」

黒髪の女の人？箒は真っ先に思い浮かんだのは……海で出会った夏海だった。

境内に出るとそこには案の定、夏海と士の二人がいた。

「箒ちゃん。」

「夏海さん。それに士先生も」

士はＩｓ学園で今教師をやっている。何故またこの世界にいるかは分からないらしい。まだやるべきことがあるとか……

「あの、いきなりどうしたんですか？わざわざ家に来て……」

箒がそう聞くと、夏海は一枚の写真を渡した。その写真に写されていたのは……銀の福音との戦いを終えたあと、一夏と一緒に撮った写真だった。確かその後、別世界に行っていたのでまだ写真を貰っていなかった。

「なかなか渡すことが出来なかったから、」

「いえ、ありがとうございます。」

箒はそうお礼を言うのだった。

士と夏海は箒と別れ、神社の階段を降りていると、士はある気配に気がついた。

「何だ？この感じは……」

「士くん？」

「気をつけろ。夏海。何かがいる。」

士はディケイドライバーを用意すると、茂みの中から一人の女性が現れた。

「こんにちわ。世界の破壊者。」

「お前は……」

「私はオルター・リーン。まだ本当のことは言えないけど、少しばかり破壊者の顔を見ておきたいからね。」

「何者だ。」

「……悪のライダーというべきかな。」

「夏海、下がってろ」

士はディケイドライバーを装着し、カードを差し込んだ。

『カメンライド・ディケイド』

「ここで殺る気なんだ。いいよ。私も少しばかり遊んであげる。変身」

リーンは黒いベルトを装着し、自分の指をナイフで切りつけ、ベルトに血を落とすと全身黒と赤の姿に、白いマントを纏った仮面ライダーに変身した。

「仮面ライダーブラット。悪意という名の戦士だ。」

ディケイドとブラットの戦いが始まろうとする中、篠ノ之神社の近くに二つの影があった。それはメズールとカザリだった。

「二つのヤミーを合成ね。可能なのかしら?」

「やってみなきゃ分からないよね。本当なら君のコアメダルを僕が取り込んで作り出したいけど、いやだろ」

「まぁ、そうね。それに今の私はコアメダルを取り出すことが出来ないのよね。」

「魔法少女だっけ。面白い力を手に入れたみたいだけど、少しばかりキツイよね。」

「そうね。そろそろやるわよ。」

カザリとメズールは神社にいた一般客にセルメダルを埋め込むのだった。

第３６話　Ｉとの接近／血の戦士（後書き）

次回オーズとディケイドの戦いが始まり、一夏と急接近するかも

第３７話　Ｉとの接近／アンクの憂鬱（前書き）

今回はオーズ視点です。バトルあたりは次回くらいにやって、Ｉｓ本編に戻りたいです。

第37話　Iとの接近／アンクの憂鬱

ディケイドとブラットが遭遇する数時間前、アンクは一人学園のベンチに座ってため息を付いていた。

「何だ？何なんだ。あの空間は……」

とアンクが独り言を言っていると、そこに一夏と翔太郎、フィリップ、伊達の四人がやってきた。

「お、アンクじゃねぇか。」

と翔太郎が話しかけるが、アンクは翔太郎たちの方を見て、直ぐに下を向いた。

「何だか元気がないみたいですね。」

「メダルでも不足しているのかい？」

と一夏とフィリップが心配そうに言っているが、アンクが元気が無い理由は伊達は予想が付いていた。

「アンコ、まさかあの空間が広がってるのか？」

「あぁ、アレはグリードでもキツイものだ。」

「何だ？何かあったのか？」

いまいち状況が理解出来ない翔太郎が質問すると、伊達がアンクの

代わりに答えた。

「まぁ、何というか、火野とマミちゃんって付き合ってるだろ。」

映司とマミが付き合っているというのは、翔太郎たち別世界組やＩＳ学園の生徒は全員知っている。なので、一夏も話の内容は理解できている。

「火野さんと巴さんの二人か。その二人が何かあったんですか？」

一夏がそう聞くと、アンクは答えた。

「あの二人、朝からいちゃいちゃいちゃいちゃと……おかしな空間を広げてやがるんだ。何が『あ～ん』だ。何が『いってらっしゃい。お仕事頑張ってください』だ。朝から晩までピンク色の空間を広げやがって……ヤミーやグリード以上に厄介なんだよ！！」

アンクは若干キレ気味だった。伊達の場合はこう言うことが起きるだろうと予想を立てていたため、あきれ果てていた。

「とりあえず、アンコ。少し落ち着けな。ヤミーが出ればきっと元に戻るさ。」

伊達はアンクを必死に落ち着かせていたのだった。翔太郎たちはとりあえずアンクのことは伊達に任せて、歩き出した。

「そういえば、一夏。今日出かけるって言ってなかったか？」

「あ、はい。ちょっと夏祭りに……」

「夏祭り？何だデートか？」

「あ、いや、そういうわけではなく、何というか……息抜きですよ。」

一夏は少し顔を赤らめていたが、翔太郎とフィリップは一夏は誰かとデートするんだと予想を立てていたのだった。そんな事を話していると、ふっとフィリップが一夏に言った

「織斑一夏。今度君の家で翔太郎たちを連れていっていいかい？」

「え？まぁいいですけど、何でですか？」

「少しね。僕はこれからやることがあるから、翔太郎も行くんだろ？祭り」

「ん、まぁな。本音が行きたがってるからな」

翔太郎とのほほんさんは先日の事件以来恋人同士になった。だが、夏休みに入ったことであまり学園で二人がいる姿は見られていない。

「じゃあ、織斑一夏と一緒に行ってきなよ。」

「そうだな。行くか。一夏」

「はい。」

こうして、夏祭りデートが始まろうとしていたのだったが……翔太郎、フィリップ、映司、アンクはそこでとんでもないことに巻き込まれつつあったのだった。

篠ノ之神社近くの森では、ディケイドとブラットが激しいぶつかり合いをしていた。

「くっ、これならどうだ！！」

『アタックライド　ブラスト』

ライドブッカーを銃に変え、何十発ものマゼンタ色の銃弾を放つディケイド。だが、仮面ライダーブラットは手刀で自分の腕を傷つけ、血を流し、血の盾を出現させた。

「『ブラッティーカーテン』」

血の盾で銃弾を全て防ぎ、その盾を今度は剣に変えた。

「『ブラッティーブレード』」

血で出来た剣を使い、ディケイドに襲いかかったが、ディケイドはライドブッカーを剣に変え、ブラッティーブレードを受け止める。

「さすがは、破壊者だね。私の攻撃を受けきるなんて、」

「お前、全然本気じゃないな。遊んでるのか？」

「そうさ、私は遊んでるよ。何てたって、もうすぐ祭り、人々の叫びで血の祭りに変わるんだから」

「何！！」

「今頃、グリードがヤミーを作り出してる頃さ。こう言ったイベントだと人々の欲望が集まりやすいからね。」

「くっ、こんな所で油を売っている暇は無いということか」

「そうだね。早く売り切っちゃいなよ。その油をさ。」

二人は再びぶつかり合った。

一方、箒は一夏と一緒に祭りを楽しんでいた。二人は森奥深くへ行こうとしていた。箒の話だと花火が見れるベストスポットがあるらしい。だが、そんな楽しそうな二人の後を付ける一人の男がいた。

男の体には灰色の模様が描かれていた。

「楽しそうにしやがって、ぶち壊してやる。」

男の右腕が鮫の口のようなものに変わり、楽しげな一夏と箒に襲いかかる。だが、突然茂みの中から手が現れ、男は茂みの中に入った。

「ん?」

「どうしたんだ?一夏?」

「いや、何でもない」

茂みの中に入った男は自分をここに連れてきた人物を睨んでいた。

「何だ?お前は?」

「たくっ、人の恋路を邪魔するちゃ、野暮な奴がいやがったな。そうだろ。ヤミー」

その人物は、翔太郎だった。翔太郎は男の存在に気が付き、本音を避難させ、男の後を追っていたのだった。

「ぐっ、ぐおおおおおおお」

男はいきなり叫び、そして体から両腕がサメで、しっぽはサメのヒレ、ほかはトラの怪人が現れた。

「貴様、よくも邪魔をしやがって」

「はん、お前がいうか。行くぜ。フィリップ」

『ジョーカー』

翔太郎はダブルドライバーを装着し、ジョーカーメモリを差し込んだ。

『サイクロン』

そして、フィリップからサイクロンメモリが送られた。

「『変身』」

そして、翔太郎とフィリップはWに変身した。

「『さぁ、お前の罪を数えろ』」

「これはヤミー」

アンクも祭りの会場にいた。理由はマミと映司に頼まれ、渋々了承した。

「行きたくなかったが、稼ぎどきだな。おい、映司」

アンクは映司の方を向くと、映司はマミと一緒にリンゴ飴を食べていた。

「どうしたんだ?アンク?」

「ヤミーだ。行くぞ」

「分かった。マミちゃん。ここで待ってて、」

「はい」

映司とアンクはヤミーの元へ向かっていったのだった。マミは一人あたりを見渡していた。

「映司さんも大変ね。」

「なら、あなたは私と遊びましょう」

突然声をかけられ、後ろを振り向くとそこには人間体に浴衣をきたメズールがいた。

「あなたは……」

「前の世界以来かしら?巴マミ。今回はあなたに面白いことを教えてあげる」

ディケイドｖｓブラット　W&オーズｖｓシャークタイガーヤミー　マミｖｓメズール。今祭りの会場に激しい戦いが始まろうとしていた。

第37話　Iとの接近／アンクの憂鬱（後書き）

多分、しばらくはライダーらしい戦いをやります。この話が終わったら、一夏の家での話をやり、文化祭編をやりたいです。

第３８話　Ｉとの接近／二人に捧げる花火（前書き）

今回で、夏祭り編終了です。次回あたりで夏休み編は終わりです。

第３８話　Ｉとの接近／二人に捧げる花火

Wとヤミーは森の奥で戦っていた。シャークタイガーヤミーは腕から水流を吐き出す。Wはその攻撃を避けるが、さっきからヤミーの攻撃が激しく接近できなかった。

「やばいな。」

『なら、遠距離でやろう。』

フィリップの提案でWは二つのメモリを取り出した。

『ルナ』

『トリガー』

右が金色のボディ、ルナ。左が青に手にはトリガーマグナムが握られている。Wのルナトリガーだ。Wは金色の変則的な動きをする銃弾を放つ。ヤミーも変則的な攻撃で避けきれず、攻撃を受けた。

「がああああああああ」

「よし、一気にトドメだ！」

トリガーマグナムにトリガーメモリをマキシマムスロットに挿し込み、エネルギーを貯めた。

「『トリガーフルバースト！！』」

変則的に軌道が変わる黄色と青のエネルギー弾を無数に撃ち出した。
ヤミーは避けきれずこのまま倒せるとWは思っていたが……突然
黒い影が現れ、黄色い竜巻を放ち、銃弾を全て吹き飛ばした。

「何！！」

『どうやら、ヤミーだけじゃなかったみたいだね。』

そこに現れたのは、グリードの一人、カザリだった。

「やぁ、久しぶりだね。仮面ライダーｗ」

「お前は、カザリ。」

『どうやら、君のヤミーみたいだけど、何故水系のヤミーも混ざっているんだい？』

「それは、このヤミーは合成ヤミーだからさ。以前ヤミーとドーパントとの合成怪人を創り上げただろ。それと似たようなものさ。まぁ、メズールの力が必要だったけどね」

カザリはそう言って、竜巻を放った。Wはその攻撃を避けようとしたが、竜巻の速度が早く避けれず攻撃を受けた。

「うあああああああああ」

『さすが、グリード相手ではきついね。』

カザリの攻撃を受け、倒れてしまったW。カザリとヤミーは止めを刺すため接近してきた。だが、その時だった。突然、赤い手が現れ、

カザリたちを妨害した。

「くっ、この腕は、アンク。」

現れたのはアンクだった。その後ろには映司もいた。

「映司、メダルを稼ぐぞ。」

「あぁ、」

アンクは三枚の赤のメダルを渡した。映司はそれを受け取りオーズドライバーに入れ、オースキャナーでスキャンした。

「変身!!」

『タカ・クジャク・コンドル。タ～ジャ～ドル～』

オーズはタジャドルコンボに変身をし、赤い風があたりを包んだ。

マミはメズールと出会っていた。さすがに人が多く魔法少女に変身できなかった。

「安心しなさい。今回は戦うつもりはないわ。ただあなたに面白い情報をあげるわ」

「えっ、」

メズールの口からとんでもないことが出てきた。マミはここでメズールが戦いを挑んでくると思っていたが……それは違ったらしい。

「さすがに私はカザリと違って勝手に動きまわらないの。でも、面白いことが分かったから、あなたに教えようと思うの」

「何かしら？」

マミは警戒しながらメズールの話を聴くことにした。するとメズールは自分のソウルジェムを見せた。ソウルジェムはこの間のインキュベーターとの戦いでかなり安全なもの変えられたマミだったが……メズールのは変化してなかった。

「どうして、門矢さんの力でソウルジェムの形や能力も変わったのに、何で貴方のは……」

「簡単な話よ。コノ世界にはインキュベーターやディケイドの力を超える奴がいる。それも魔女を凌駕するほどにね」

「魔女を凌駕する？」

「ここは別の世界、いえ、あなたがいた世界とはさらに違う世界である女の子が神となった。そのおかげで世界は新しく作り変えられた。でも、その世界には魔女とは別に魔獣が蔓延る世界。その魔獣がこの世界にきているとしたら？」

「まさか、貴方が……呼び出したというの？」

「いいえ、違うわ。インキュベーターに悪意を埋め込み、そしてその悪意を回収し、私たちを招いたライダーがいるとしたら、あなたはどうする？」

「……それは誰？」

「ふふ、血と傷と魂。それが今ある場所に集まってるわ。楽しみね本当に……」

そう言い残し、メズールは姿を消した。残されたマミはただ呆然と立ちすくすのだった。

ディケイドとブラットのぶつかり合いはまだ続いていた。ディケイドもカメンライドで多彩な攻撃をしているが、すべてブラットの血の前で防がれていた。

「さすがに、もうあきてきたね。」

「何？」

ディケイドは肩で息をしながら、ブラットを睨んだ。ブラットは少し後ろに下がり、ブラッティーブレードで自分の脚を傷つけ、跳び上がった。

「喰らえ、ブラッティーブレイク！！」

ブラットの体中から流れる血が空に舞い、その血が小さな槍に変わり、ディケイドを襲う。そして、さらに両足を血が集まりドリル状に変化に、ディケイドにぶつけた。その瞬間、ディケイドの体が貫かれ、爆発した。

「ぐあああああああああああああ」

「悪いけど、これでも遊びレベルだから」

そう言い残しブラットは姿を消した。だが、ブラットは気がついてなかった。二人が戦っていた場所の茂みからディケイドを背負うディエンドがいた。

「どうやら、間に合ったみたいだね。」

「か、海東」

「『アタックライド。ダミー』さすがに僕らじゃ彼女に勝てないよ。」

「なにか知ってるのか?」

「あぁ、それに彼女はまだ本気を出していない。気付いていただろ。彼女の右腕にあったリングを」

「あぁ、Ｉｓか。」

士もブラットがＩｓを使えることに気がついていた。だが、彼女はそれを使用しなかった。そう、使えなかったのではなく、使わずに

ディケイドを倒せるという強さがあったからだ。こうして、ブラットの戦いは何とか終わった。

Wとオーズはヤミーとカザリを追い詰めていた。

「さぁて、止めと行くか。」

『あぁ、』

ヒートトリガーに変わったWはシャークタイガーヤミーを追い詰めていた。シャークタイガーヤミーはこれ以上やってもWに敵わないと思い、逃げ出そうとしたが……既にWマキシマムスロットにトリガーメモリを差し込んでいた。

「『トリガーエクスプロージョン』」

トリガーマグナムから赤い炎が放たれ、ヤミーを包みこみ、ヤミーは爆発し大量のメダルを出したのだった。

「やれやれ、ヤミーがやられたか。」

オーズと対峙していたカザリはヤミーがやられたのを見て、逃げようとした。だが、オーズはそれを見逃さなかった。

『スキャニングチャージ』

羽を広げ、、クロー状に展開したコンドルレッグで炎を纏った急降下蹴りを叩き込む破壊力１２０ｔの「プロミネンスドロップ」をカザリに向かって放った。だが、カザリは黒い腕輪を見せた。

「機動『黒き竜巻』」

突然まぶしい光が放たれ、そして、オーズはカザリを包み込む黒い竜巻とぶつかった。だが、オーズの攻撃はカザリに届かず、跳ね返

された。

「何だ？」

「カザリ。お前」

「ふふ、今度はもっと楽しいことをしよう」

謎の装備に包まれたカザリはそのまま姿を消すのだった。

その頃、なにも知らない一夏と箒はというと……ベストスポットで花火を見ていた二人。箒はこれはチャンスだと思い、一夏に告白するのだが、その言葉は花火の音によってかき消されたのだった。一夏と箒の淡いデートはこうして終わったのだが……次の週、ちょっとしたハプニングがあったのだった。

第３８話　Ｉとの接近／二人に捧げる花火（後書き）

次回で夏休み編は終わります。次回はＩｓメンバーと一部のライダーを活躍させます。

早く生徒会長を出したいです。

第３９話　Ｉとの接近／最後のハプニング（前書き）

最初にいっておきます。今回はただ自分の好みです。まぁ、最初あたりはシリアスです。

第３９話　Ｉとの接近／最後のハプニング

シャルは一人、とある家の前で立っていた。シャルはその家の表札を何度も読み返す。表札には『織斑』と書かれていた。

（大丈夫、大丈夫。今日は家にいるっていってたから……一夏迷惑じゃないよね。）

そう思いながらインターホンを押すと、家から声が聞こえた。シャルはきっと一夏が出迎えてくれるんだと思っていたが……

「ん、シャルじゃねぇか」

出てきたのは一夏ではなく、翔太郎だった。その後ろにはフィリップもいる。

「あ、あれ？左さん？あれ？」

シャルはもう一度表札を見るが……やっぱり『織斑』と書かれていた。シャルは何が何だか分からなかった。すると、家の奥から一夏がやってきた。

「あれ？シャル。どうしたんだ？」

「一夏。僕家間違ってないよね。」

「あ、いや、話がよく分からないんだけど……とりあえず上がれよ」

シャルは一夏の家に上がり、リビングに案内されるとそこには翔太郎とフィリップの他に、アンク、伊達、海東がいた。

「よっ、シャルちゃん」

「あ、こんにちわ。伊達先生。」

伊達はＩｓ学園で保険医をしているため、シャルとは少し顔なじみであった。だが、シャルにとっては関係なかった。何で一夏の家に翔太郎たちが集まっているかだ。

「ねぇ、一夏。何で左さんたちが一夏の家に集まってるの？」

「ん？何というか……俺もよく分からないんだ。フィリップさんが話をする場所を提供してくれって言われて……」

と一夏が言うと、フィリップは笑顔で答えた。

「少し面白い話をある人物から聞けたからね。織斑一夏。悪いけど、しばらくリビングを使わせてもらってもいいかな？」

「まぁ、いいけど、シャル。とりあえず俺の部屋に行くか」

「え、えええええ、いいの？」

「まぁ、邪魔しちゃ悪いからな。」

一夏とシャルの二人はそのままリビングを出て行った。そして、フィリップは神妙な面持ちで話しだした。

「少し重要な話だけど、火野映司と巴マミとディケイドにも聞いて欲しい話だったんだけど……彼らは少し手を離せないらしいね。」

映司は仕事に、マミは真耶に呼び出されて来れないため、代わりにアンクと伊達が着ていた。士は先日の戦いの傷が癒えない為、代わりに海東が来ている。

「アンク。君に一つ聞きたい。合成ヤミーというのは作れるのかい？」

フィリップはアイスキャンディーを食べるアンクに聞いた。アンクはアイスをかじりながら答えた。

「さぁな。俺自身もこの間の奴を見て、初めて知ったが……可能だ。だが、それにはコアメダルを取り込むくらいしないとな。だが、メズールのコアメダルはソウルジェムに変えられている。多分だが、

同時にセルメダルを埋めこんで作ったかもな。」

「そうか。そんな方法でも可能なら大丈夫みたいだね。次に海東大樹。ディケイドが戦った仮面ライダーについて知っているかい？」

今度は海東に話を振った。海東は腕を組みながら答えた。

「どうだろうね。世界は無数にある。彼女みたいなライダーがいるかもね。」

「じゃあ、もう一つ。次元を渡ることが出来るのは、君たち世界を渡るものと鳴滝以外にいるかい？」

「僕が知る限りじゃ、ある程度の力を持ったものなら出来るね。」

翔太郎とアンクと伊達とフィリップはある人物を思い出していた。インキュベーターもまた次元を超えることが可能だったかもしれない。そして、大ショッカーの幹部クラス。アンクと伊達は大ショッカーについては話くらいしか知らない。

「なるほどね。じゃあ、僕から」

今度はフィリップが話しだした。だが、その話は翔太郎だけに話す感じだった。

「僕らが使うＩｓについてだけど、どうやらかなり特殊みたいだ。」

「特殊って……どういうことだ？フィリップ」

「ディケイド達が使うＩｓはディケイドの能力の一つ。照井竜は束

が創り上げたもの。じゃあ、僕らは？ディケイドみたいな能力もない。束が作ったものでもない。」

「確かに、じゃあ、何なんだ？」

「束が言うには、何者かの意思によって、ハードボイルダーの性質が変えられたらしい。僕らのＩＳはどの世代にも属さない。アナザー世代らしいね」

「アナザー世代。」

翔太郎も少し険しい表情を浮かべる中、海東がある質問をした。

「ねぇ、フィリップ。」

「何だい？」

「何か重大な事を話してて突っ込まなかったけど、さっきからあの博士を呼び捨てにしてるけど、君たちはそんなに仲よかったっけ？」

海東の言葉を聞いて、フィリップと海東以外の全員が確かにと思った。フィリップは信頼したものを下の名前で呼ぶか。フルネームで呼んだりしているが……束を束と呼んでる自体、かなり信頼している証拠だった。すると、フィリップの口から驚くべきことが……

「あぁ、僕ら付き合ってるから」

「は～ん、そうなんだ。って、えええええええええええええええええええ」

その事実に翔太郎は驚きを隠せずにいたのだった。そして、翔太郎の声は二階にいた。一夏達（翔太郎たちが話している間に箒達も着ている）に聞こえていた。

「な、何かあったのか？」

「「「「「さぁ？」」」」」

しばらく時間が過ぎ、重大な話から何故か男達の恋愛話に変わったのだった。そして、下に降りてきた一夏達が夕食を作りたいと言う事で、全員で夕食を作るのだった。そんな時ちょっとしたハプニングがあった。シャルが一夏に味を見て欲しいと一夏の所に行くと……

「えっきゃあ」

「あ、シャル。危ない」

何故かシャルの足元でスリープモードのファングメモリにシャルが踏みそうになり、避けそうになったが、そのせいでバランスを崩し、一夏の方へと倒れこんでしまった。

（いたた。シャルの奴。大丈夫かよ。ん？何か唇に柔らかい感触が……）

一夏が目を開けるとシャルの顔が近かった。シャルも現状を理解し顔を真赤にしていた。そう、倒れた拍子で二人はキスをしてしまったのだった。

「あ、悪い。シャル」

「あ、ううん、大丈夫だよ。」

と二人は弁明しあってる中、一夏とシャルは殺気を感じていた。振り向くとＩｓを起動させている四人の少女たちがいた。

「一夏。風と極限の刃を受けたいらしいな。」

「じゃあ、私は炎の刃だね。」

「それじゃあ、私はエネルギー無制限の銃弾を」

「なら、私は切り札の力を……」

「「あ、あはははは」」

気が付くと翔太郎たちは既に逃げ出していた。さらに置き手紙も…

……

『頑張れ、一夏。ｂｙ仮面ライダー』

「仮面ライダーなら助けてくれよおおお

いスーツをきた男。もう一人は黒いスーツに手には小型のテレビを持っていた。

「どうやら、奴らが現れたみたいだな」

「では、」

「あぁ、俺達も行くぞ。ＩＳ学園に」

夏休みが終わり、一夏たちは新たな戦いに巻き込まれるのだった。

第３９話　Ｉとの接近／最後のハプニング（後書き）

自分的には一夏×シャル派です。ちなみに最後に出てきた二人はあの二人です。まぁ、なんとなくわかると思います。次回ついに会長が登場できます。

第４０話　Ｓの登場／呼び出された者たち（前書き）

今回会長の登場です。やっと出せました

第４０話　Ｓの登場／呼び出された者たち

翔太郎とフィリップの二人は生徒会室に呼び出されていた。理由は数分前のこと……翔太郎とフィリップの二人が校舎の廊下を歩いていると、いきなり翔太郎が誰かに後ろに抱きつかれた。

「うわ、何だ。本音か」

「えへへ～、しょうしょう。」

翔太郎と本音の二人は学校公認のカップルとなっているため、周りにいる学生たちはもう慣れている。フィリップもそれに慣れていた。

「やぁ、布仏本音。今日はどうしたいんだい？二人っきりになりたいんなら僕は構わないけど、」

「フィリくん。大丈夫だよ。今日は会長から二人を連れてきて欲しいって言われたから連行しに来たの～」

「「はぁ？」」

本音の言葉を聞いて二人はただ驚くのだった。そしてとりあえず本音の言う通りに生徒会室を訪れる二人だったが……

「あら、貴方が妹をたぶらかせた左さん？」

と生徒会室にいたメガネを掛けた少女に言われる翔太郎であった。

「たぶらかしてない。というか本音からだからな」

「うふふ、本当かしら？ねぇ、フィリップくん」

「そうだね。翔太郎はたぶらかしたかもしれないね。布仏虚」

「あら、話がわかるわね。」

「お前ら……って、布仏？もしかして……本音の」

「はい、姉です」

「お姉ちゃんだよ～」

と姉妹同時に言うのだった。

「だめだよ。翔太郎。それくらい知らなくちゃ、」

「おい、フィリップ。お前まさか……」

「あぁ、すでにこの学園の生徒は検索済みさ。」

フィリップの地球の本棚は臨海学校からようやく安定したので、暇な時を見つけては検索をしている。それが授業中でも……そのせいで千冬に怒られる確率が多くなったのは別の話だ。

「それで何で俺達が生徒会室に呼び出されたんだ？」

「それは会長が来てからよ。」

と虚は微笑みながら翔太郎とフィリップの二人に紅茶を出しながら

答えた。そしてしばらくしてから、その会長がやってきた。ある三人を引き連れて……

「やぁ、お待たせ。」

「あれ？左さんとフィリップさん」

「おい、離せ。くそ。」

「アンクさん。あんな風に反抗するからですよ」

会長らしき人と一緒にやってきたのは、一夏とマミと会長に耳を引っ張られているアンクだった。会長はアンクを離すと椅子に座り扇子を広げた。

「これで揃ったみたいだね。」

「アンタが会長？」

「翔太郎。この間の生徒集会で見た時あるだろ。」

とフィリップは翔太郎にツッコミを入れるのだったが……とある事情があって生徒集会に出れなかった。それはというと……

「あぁ、その時は一夏の家の修理をしに行ってたからな。」

「そういえば、そうだったね。」

先日の箒たちによる制裁で一夏の家は半分以上破壊され、大人である翔太郎が止めなかったので、千冬が罰として伊達と一緒に一夏の

家を修理に行っていた。なので生徒会長とは初めて会うのだった。

「それでその生徒会長が俺達に何の用だ？」

翔太郎は帽子をかぶり直しながら聞いた。

「そうだね。まずは自己紹介だね。私は更識楯無。このＩＳ学園の生徒の長だよ。仮面ライダーくん」

第４０話　Ｓの登場／呼び出された者たち（後書き）

次回は翔太郎たちが呼び出された訳と、ウヴァが動き出します

第４１話　Ｓの登場／ウヴァの暗躍（前書き）

今回はウヴァが動き出します。

第４１話　Ｓの登場／ウヴァの暗躍

「君たちに来てもらった理由は二つ。一つは独自のルートで手に入った情報で、君たち仮面ライダーやグリードに興味深い話があるんだよ。」

「興味深い話？」

「なんだい？それは」

「はん、つまらないことだったら、俺は帰るぞ。」

翔太郎とフィリップとアンクの三人は更識の話に耳を向けた。

「ここ最近君たち仮面ライダーｗやオーズ、そしてディケイド以外のライダーが目撃……いや、これについては君たちは知っているね。」

「あぁ、仮面ライダーブラット。ディケイドを倒すほどのライダーだと聞いているが……」

フィリップが答えると更識は扇子を開いて微笑んでいた。

「彼らはアンク以外のグリードと共謀をしているという情報が入ったんだよね。そこのところどう思う？アンクくん」

「ちっ、ガメルならともかく、カザリやメズールがそいつらと組む理由が何かあるな。大方メダルを与えるか何かだ。」

アンクはめんどくさそうに言うと、更識は少し興味深そうにしていた。

「そうかもね。今回君たちを呼んだのはその事を伝えるためだけ。そして二つ目は……一夏くんとマミちゃんをちょっと鍛えたいんだよね。」

「へっ、なんでまた」

「私はいいですけど、織斑先生から専用機を用意すると聞いたんですけど、」

「そうだね、マミちゃんの場合は基礎的な動作の訓練を……一夏くんの場合は今のままだと弱すぎて弱すぎて、直ぐに誰かにやられちゃうね。」

「は、はぁ、」

「だから、学園祭が始まるまでは二人を徹底的に鍛えようと思うから。」

こうして、一夏とマミの二人は更識からＩｓの特訓を受けることになったのだった。

同時刻、ある場所でウヴァと一人の女性が一緒に行動していた。

「それでその檻斑一夏ってやつとは接触できたのか？」

「あぁ、上手く武装追加とかの話で奪ってやろうと思ったんだけど、ダメだね。」

「なら、無理やり奪うのだな。」

「あぁ、学園祭という面白いイベントでな。既に私のヤミーいや、あんたのヤミーが動いてるところだろうね。」

「ふん、人間どもに取っては地獄の祭りになるが、俺達にとってはオーズを倒すいいチャンスだ。」

ウヴァは人間体から怪人体に姿を変えた。そしてウヴァの左手首には蟲の様な腕輪があった。

「感謝するぞ。この力をくれてな。」

「本当に感謝してほしいね。ウヴァくん」

突然後ろから声をかけられ、ウヴァ達は振り向くとそこには幼さが

残る少年と白髪の青年がいた。

「お前か、オルター・ムーン。そっちのガキは？」

ウヴァが聞くと、ムーンと呼ばれる青年は微笑みながら答えた。

「君たちの仲間の片割れ。そうだね名前はロストアンクかな」

「……」

第４２話　Ｍとの遭遇／黒髪の少女の幽霊？（前書き）

久しぶりの更新です。今回はあのキャラが登場です。

第４２話　Ｍとの遭遇／黒髪の少女の幽霊？

一夏とマミの二人が更識の教導のもとでＩｓの訓練を行っている頃、翔太郎は彼女である本音から面白そうな話を聞いていた。

「はぁ？学園に現れる幽霊？なんだそりゃ」

「しょうしょう、知らないの？ほら今学園祭の準備期間だからみんな遅くまで残ってるじゃん。」

「まぁ、確かにそうだな」

学園祭準備期間中、学園に泊まりこむ生徒が多いと千冬や箒達から話は聞いていた。翔太郎とフィリップは他にやることがあると準備を手伝うことが出来ないと言っておいたために準備に参加できなかったのだが、学園祭当日はなるべく手伝おうと話していたの時だった。

「それでね、準備してる時に教室に残ってた人が何だか変な視線を感じてふっと教室の窓を見たらそこには……黒髪の女の子がじっとこっちを見てて、その娘が一瞬視線をずらしたら既にその娘がいなかったんだって、これってやっぱり幽霊だよね。」

「幽霊って、なぁ本音。その話どうせ噂程度だろ。友達の友達から聞いたとか……」

「えぇ～、違うよ～。この話の当事者から聞いたんだから～」

「誰だよ。」

「箒ちゃん」

「箒かよ！！」

まさかの目撃者が箒だとは翔太郎も思ってもいなかった。二人はそんな話をしながら寮に戻ろうとすると寮の入り口に千冬が立っていた。

「織斑先生。どうしたんだ？」

「左と布仏か。丁度いい。左に依頼を頼みたい」

「依頼？もしかして幽霊騒ぎのことか？」

千冬の依頼について大体の予想を立てていた翔太郎だった。千冬はそう頷いた。

「このままだと学園祭の準備に支障が出る。篠ノ之なんかビビってしまっている」

「確かにほおっておけないな。だったら今から行くか。」

「それだったら、私にいい案があるよ。」

と寮の中から更識が出てきた。

「いい案なんだ？」

「ふふ、左くん。さすがに君やフィリップくんなどの仮面ライダー

だけで調べるなんてことは数が少なすぎる。だったら……」

この時、千冬は更識が何を言いたいのかを理解してしまい、額に手をやった。

「一夏くん争奪戦メンバーや仮面ライダー達による肝試しをやろうではないか」

「はあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ」

翔太郎の驚きの声が響くのであった。

ＩＳ学園とある教室に一人の少女が立っていた。

「この世界にもいない。どこにいるの。……か」

第４３話　Ｍとの遭遇／肝試しに現れる怪人（前書き）

今回で肝試しは終わりですね。次回は学園祭編に入ります。

第４３話　Ｍとの遭遇／肝試しに現れる怪人

千冬の依頼で夜の学校を見まわる事になった翔太郎だったが……更識の提案により一夏達も強制参加の肝試しが始まろうとしているのだったが……

「絶対に無理だ。会長、何で私たちまで巻き込むんだ」

と怯えながら一夏の後ろに隠れながらいう箒、普通なら鈴たちは箒を引き剥がそうとするがかなり怯えているため可哀想なのでやらなかった。

「あら、こういったイベントはみんなで楽しもうと思ったのに……それにフィリップくんはやりたがってるみたいだしね。」

更識がそう言いながらフィリップの方を見ると、フィリップは興奮しながら翔太郎と話していた。

「まさか幽霊と出会える機会があるなんて……これは興味深いよ。翔太郎」

「分かったから落ち着け。たくっ、幽霊ごときでビビり過ぎなんだよ。なぁディケイド、アンク、照井」

「左、お前そう言いながら脚が震えているぞ。」

「はん、お前がびびってるじゃないか。」

「というより、俺らを巻き込むのはどうかと思うぞ。なぁ、生徒会

長」

「ふふ、門矢先生は監視役として来てもらってるからね。まぁ、参加するしないはどうでもいいとして……」

「どうでもよくないです！！」

と半切れ状態の箒が言うのだった。だが、更識は箒の言葉を無視してクジを取り出した。

「さて、これで何人かのグループで校舎を回ってもらうわよ。」

こうして更識が用意したクジを引き、６グループが出来るのだった。

第１グループ　一夏・箒・シャルル

第２グループ　翔太郎・本音・ラウラ

第３グループ　フィリップ・セシリア・照井

第４グループ　海東・士・ユウスケ

第５グループ　映司・マミ・更識

第６グループ　アンク・鈴・伊達

第1グループ

「さぁて、早いところ回ろうぜって……なぁ、箒」

「な、なんだ。一夏」

「くっつかれてると歩きにくいんだが……」

箒は一夏の腕に必死に捕まっているなか、一夏は隣を歩くシャルルに話しかけた。

「シャルは平気そうだな」

「ん、まぁ平気ってわけじゃないけど……一夏がいるからあんまり怖くないかな」

「シャ、シャル。お前……」

「貴様ら、私がいることを忘れてないか？一夏、ぐずぐずせずに早く向かうぞ」

「おっ、戻った。」

箒がいつもの調子に戻り、一夏はひと安心した。箒は先に歩こうとしたのだが……すぐに戻ってきた

「す、済まない。やっぱり三人でいこう」

「やっぱ、戻ってないな。」

「あ、あははは」

シャルルが箒を見て苦笑いする中、シャルルは廊下の先にあるものを見た。

「あれ？」

「どうしたんだ？シャル」

「ま、まさか、幽霊を……」

「い、いや、何かさっき黒い髪の女の子がいたような……」

「やっぱり幽霊だあああああああああああああああああああああああああ」

第2グループ

「うお、何だ。今の悲鳴は」

箒の悲鳴が第2グループの翔太郎たちのところにまで届いていた。
すると本音とラウラは冷静になっていた。

「しょうしょう、今の多分箒ちゃんの悲鳴だよ。きっと何か見たんだよ。」

「ふん、専用機持ちの癖に幽霊程度にビビるとはな。情けない」

「二人は平気そうだな。」

「そりゃ、しょうしょうがいるからかな。」

「幽霊などの見たことのない物にビビるわけがない」

と本音は照れながら言い、ラウラは冷静に言った。すると翔太郎がとある教室の中を覗く

「教室には誰もいないな。てか、学園祭の準備中だから色々とすごいな。」

「遅くまで残ってる生徒がいるらしいが、今回は教官が私たちだけにしたらしいからな。」

「あぁ、でも知ってる～、ＩＳ学園の七不思議～」

「そんなモノがあるのかよ」

「うむ、聞いたことがない。」

「確かね～一つがアリーナに現れる黒い獣とか、それと出会ったら怪物になるんだって～」

「それ、グリードじゃないのか？」

翔太郎は本音の怪談を聞くと思い当たる物だった。ラウラがヤミーを植えつけられたときのことが噂になっているらしい。

「二つ目は……夜な夜な蠢く腕とかかな」

「それはちょっと興味深いな」

ラウラが少し興味を持った。すると翔太郎がある物を見てしまったそれは廊下の先に赤い腕が浮いているものを……

「で、出たあああああああああああああああああああああああああああああああああ」

第3グループ

「今悲鳴が聞こえませんでしたか？」

「ふふ、きっと誰かが幽霊に出会ったんだろ。僕らも早く会ってみたいね。」

「フィリップ、あんまり興奮するな」

幽霊に対して興奮しているフィリップをなだめる照井。セシリアは一夏とペアに慣れなかったのを最初は残念がっていたが、今はそうではなかった。

「それにしても、その幽霊ですが、本当に存在するものなのですかね」

「何故そう思う」

「いえ、普通なら怖がったりしますが……ガイアメモリとが原因とかじゃ……」

「俺はその線を疑っているが……フィリップ、そういったメモリはあるのか？」

「さぁ、相手に幻覚を見せるくらいのメモリはあるらしいけど、少し検索を……」

フィリップが検索を始めようとした瞬間、セシリアの額に何かが落ちてきた。

「あら、なんですか……これは、血？」

「何、まさか殺人事件か」

「いいや、それだけではないみたいだね。廊下があんなになるとは思えない」

「「え？」」

セシリアと照井が廊下を見ると廊下がグネグネと曲がっていた。さらに、黄色い炎までもが現れていた。

「どうやら、これは……フィリップ。こいつは」

「うん、怪奇現象だね」

「そうですの」

「違う。これは……」

照井が何かを言いかけた瞬間、突然黒い影が三人を飲み込んだ。

第4グループ

「やれやれ、怪我が治ったと思ったら今度は肝試しと来たか」

「まぁ、俺は面白いからいいけど……」

「それより、士。いつになったら次の世界に行くんだい？僕らのやるべき事はもう終わっているはずだよ。」

海東がそう言うと士が険しい表情をしていた。

「いや、俺達がやるべき事はまだある。それはきっと学園祭で何かがあるはずだ。」

「何かって……分かるのか士」

「何となくだ。それより、先に進むぞ。」

士がそう言いながら歩こうとした瞬間、突然三人は黒い穴に吸い込まれたのだった。

第5グループ

「それにしても、夜の学校ってやっぱり不気味だね」

「そうですね、映司さん」

「ふふ、お二方は仲がいいみたいですね。」

二人のいちゃつきを茶化す更識。二人は少し恥ずかしそうにしていた。

「所で火野さんに聞くけど、ヤミーで幻覚を見せる相手とかいるのかな?」

「ん、いや、いないと思うけど……人の欲望を利用するぐらいなら……」

「へぇ、それじゃあ、あれは？」

更識が指を刺した場所には、黒い影が蠢いていた。その影は三人を見つけると突然襲いかかってきた。

「うわ、もしかしてヤミー、だったら……ってメダル、アンクに預けてたんだっけ」

黒い影はそのまま三人を飲み込むのだった。

第６グループ

鈴、伊達はアンクを抱き抱えていると、腕の状態のアンクが戻ってきた。

「どうやらこの先には何もなかったぜ。」

「たすかります。アンクさん」

「さすがはアンコだぜ。先の様子を見れればこっちのものだ」

「だが、どっかのグループには見られたが……まぁ大丈夫だろ。」

アンクはすぐに体に戻ると、先に進んだ。すると鈴はとある質問をしたのだった。

「そういえば、今回はヤミーが原因とかじゃないんですか？」

「いや、ヤミーの気配は感じ無いな。」

「俺のゴリちゃんも反応しないし、本当に幽霊とかだったりしてな」

「それはそれで怖いですけど、」

二人がそんな事を話していると、アンクは険しい表情をしていた。

(突然現れて、突然消えるか。幻覚か。それとも瞬間移動……いや、黒い髪の女。何かが引っかかるな)

すると、廊下を歩いていた三人の前に巨大なトラが突然現れた。トラは今にも三人に襲いかかりそうだった。

「おい、チャイナ娘。ペットが逃げ出しているぞ」

「いや、アンクさん。私はペットなんて……それに学校にトラなんて……」

「これはやばいぞ。」

伊達はメダルとベルトを取り出した。

「変身」

メダルをベルトの中に入れると、伊達はバースに変身した。鈴も右腕だけ部分展開をさせるが……

「この虎ちゃんは俺が食い止めるから、先に進め」

「え、でも、」

「いいから、こりゃ、幽霊騒ぎじゃないぞ」

「行くぞ、チャイナ」

「だから、チャイナじゃないです。」

アンクと鈴はトラを伊達に任せると、階段を一気に駆け下りようとするが……何故か階段の下から水がどんどん溢れていた。

「これって、」

「どうやら、上に行くしかないな。おい、チャイナ。Ｉｓとかで上に行くぞ」

「だから、ああもう、Ｉｓ機動」

鈴はＩｓを起動させ、アンクは甲龍の背に乗りながら、二人は上を目指していくと屋上にたどり着いた。

「どうやら、ここがゴールだな」

「ちょっと待って、あそこ……」

鈴が指さした場所に、黒い影に飲み込まれたグループ達が気絶していた。鈴は駆け寄ろうとするが、突然黒い影が道をふさいだ。

「ちょっと、どきなさいよ。」

『ヒート』

鈴はメモリスロットにヒートメモリを挿し込み、炎の剣を取り出し、黒い影に攻撃するが、黒い影は剣を軽々と受け止めた。

「どうやら、ヤミーじゃないみたいだな。」

「くっ、こいつ、」

鈴は蹴り飛ばし、上に飛ぼうとするが何故か頭に強い衝撃を受けた。

「いった、何、こいつどんな攻撃したのよ」

「何を言ってる。お前がいきなり下に向かって飛ぼうとしたんだろ」

「へっ、」

鈴は気が付くと地面にいた。黒い影はそれを見て嘲笑っていた。

「こいつ、一体……」

黒い影はムチを取り出し、鈴に向かって攻撃しようとした瞬間、何かがそれを阻んだ。

「遅くなった。」

そこにいたのは一夏とシャルと箒の三人だった。

「一夏、それに箒にシャルルも、無事だったんだ」

「まぁな、シャルルのお蔭でな」

「へっ、どういう意味？」

「実はメモリスロットを懐中電灯に付けて、ルナメモリを起動させてたら襲ってきた黒い影とかが一瞬で消えちゃったんだよ。」

「そ、それじゃあ、あの怪物は？」

「ドーパントだ。」

遅れてきたのは翔太郎達のグループだった。本音はバットメモリを持っていた。

「ルナの光で黒い影が消えてたからな。さぁて、いい加減終りにしようぜ。ドーパント。」

翔太郎はロストドライバーを取り出し、ジョーカーメモリを差し込んだ。

『ジョーカー』

「変身！！」

翔太郎はジョーカーメモリを使い、仮面ライダージョーカーに変身を遂げ、ドーパントに向かっていこうとした瞬間、

「ご、ごめんなさい。」

突然、ドーパントがそう言ってきた。すると、ドーパントは変身を解除するとＩＳ学園の生徒だった。

「ど、どういうことだ？」

「じ、実はお化け屋敷の制作をしてたんですが、こう、リアリティがないなと思って……それで拾ったこのメモリを使ってみたんですけど、すごく出来が良かったんですが……ガイアメモリって怖いものって知って、生徒会に提出しようとしたら、会長が、使ってもいいよって」

「ほ、ほう、それで俺たちを襲ったのは先生たちかと思って、すぐに追いだそうとしたと」

「は、はい。そしたら全然違って、本当にすいませんでした。」

女の子は必死に謝った。翔太郎と鈴はすぐに解除をし、倒れている更識を見た。

「さて、この責任は……どうするかだな。なぁ、鈴」

「そうだね、一夏。今すぐ織斑先生に言ってきて、生徒会長の悪戯だったって」

「あ、あぁ、」

こうして、少女は織斑先生から注意を受け、反省文を書くことに、更識は5時間ほど、説教を受けたということだった。少女が使ったガイアメモリ『トリック』はすぐに破壊したのだったが……ひとつだけ問題があったのだった。それは……

「ふん、ドーパントだったら怖いものもないな。」

「はは、箒が戻ったな。」

「うん、あの女の子もドーパントだったんだね」

「えっ、女の子？」

一夏達の話を聞いていた少女だったが、何故か驚いていた。不思議に思った一夏が更に聞いた。

「い、いや、黒髪の女の子だよ。君が出したんだろ」

「い、いえ、人を幻覚で出すのは無理でした。こう、複雑で……トラとかなら出したんですけど……」

「そ、それじゃあ、」

「あれは……」

「もしかして……」

「「「本物の幽霊えええええええええええええええええええええええ」」」

校舎で一夏達の様子を見ていた少女が一人いた。

「……巴マミがここにいるのは良かった。けど、まどかは……

…」

第４４話　Ｃの演劇／始まる学園祭（前書き）

今回から学園祭が始まります。今回は喫茶店での話です。

第４４話　Ｃの演劇／始まる学園祭

いよいよ始まった学園祭、一般公開されないためか花火などはあげられないが、生徒たちのテンションはかなり凄かった。何故かというと……

「嘘、一組であの織斑くんや左さんやフィリップくんの接客が受けられるの！？」

「しかも、燕尾服の執事で」

「きゃあああああああ、見てみたーーーい」

「それにゲームで勝ったり写真とってくれるんだって、それもツーショットで」

などの声が聞こえていた。一組は『ご奉仕喫茶』の噂が盛り上がっていた。そして翔太郎たちはというと……

「何というか、これ誰の案だ？セシリアか？」

「いいえ、違いますわ」

とメイド服を着たセシリア。ちなみに翔太郎や一夏やフィリップは執事服、メイド服は箒、セシリア、シャル、ラウラが着ていた。翔太郎の場合は色々とあったせいで話し合いなどに参加出来なかったため当日になって執事服をクラスのみんなに着せられていた。

「それじゃあ、こういうの考えそうなのは……一夏か本音か？」

「それも違いますわ。案を出したのがラウラさんですの」

それを聞いて、翔太郎は少し衝撃を受けていた。まさかあのラウラがこんな案を出すなんて……

「何故か突然メイドとかに興味を持ったらしいですわ。」

「なんつうか、アイツも色々と変わったな。」

翔太郎が素直な感想を言うと、突然廊下が慌ただしくなった。多分一夏辺りが見つかったんだと思う。

「結構大変だな。一夏も」

「あら、左さんも頑張ってもらわないと、」

翔太郎とセシリアがそんな事を話していると、突然言い争う声が聞こえた。翔太郎は気になって様子を見ると、ラウラとお客の一人が言い争いをしているのだが、その客というのが……

「ここにはアイスなんてない。」

「はん、お前は俺が気に入らないからそういう事を言っているだけだろ」

「貴様はただいちゃもんを付けに来ただけか」

「はっ、そう言うのはすぐに思いつくんだな。」

その客というのはアンクだった。近くにいた一夏と様子を見に来た鈴が呆れていた。

「一夏、どういう事か説明してくれないか？」

「翔太郎さん。聞いてる限りですよ。アンクさんがメニューにアイスキャンディーが無いことに文句を言っていて……ラウラもラウラでいちいち相手にしてて……」

「何というか、あの二人。仲がいいわよね。」

「とりあえず、火野辺り呼ぶか。」

翔太郎はそう思い、スタッグフォンを取り出そうとしたのだが……一夏があることに気がついた。

「ちょっとまってて下さい。俺が何とかします」

「ん？」

そう言って、一夏が調理場に入ってから、数分しないうちに一本のアイスキャンディーを持ってアンクに渡した。

「アンクさん。今回はこれで良ければ……」

「はん、あるんじゃねぇか。」

アンクはそう言って、アイスキャンディーを受け取り、食べ始め、翔太郎たちの所に戻った。

「よく、アイスキャンディーなんかあったな。」

「いや、火野さんがちょっと前にアンクが来たらアイスでも出しておいてくれって言ってもらったんですよ。」

「火野の奴。しっかり手を打ってるな。」

アンクの騒動を一夏が収め、翔太郎は次に気になったフィリップの所へ行くと、フィリップは意外と接客をしていた。客はメニューにある『執事にご褒美セット』頼んでいた。そのセットというのは、サービスということで執事がお客に食べされるというのだが……

「では、お嬢様、口を開けてください」

「は、はい。」

とフィリップは甘い声とかなりの執事スキルで接客をしていたのだった。そこにシャルと箒が話しかけてきた。

「あの、翔太郎さん、フィリップさんがノリノリで接客してるんですが……」

「あぁ、多分前々からクラスの出し物について知ってたから地球の本棚で検索して、勉強したんだろうが……そういえば、箒。前々から聞きたいことがあったんだが……」

「はい？」

「フィリップが束と付き合ってるって本当か？」

「はぁ、そ、それはさすがに知らなかったが……フィリップさん本人が言ってたんですか？」

「あぁ、未だにどういった経緯でそうなってるか知らないんだが……」

「まぁ、物好き同士ひかれ合ったんだと……」

箒は呆れながらそう言っていた。すると、今度は本音がやってきた。

「しょうしょう、そろそろ行こう～」

「ん、本音。そうだな。箒、シャル。悪いけど俺と本音は休憩に入るぜ。」

「はい、」

「で、デートか。私も一夏と……」

「それだったら～、順番でデートに誘ったら～」

と本音が言った言葉によって、少し経ってから一夏は五人の少女たちとデートをすることとなったのだった。

ＩＳ学園の校門に四人の男女が立っていた。それは人間形態のグリードたちだった。

「作戦までは何をしている？」

とカザリが三人に聞くと、ウヴァは興味なさそうに言ってきた。

「俺は埋め込んだヤミーを見てくる。カザリ、お前は？」

「折角のお祭りだからもっと派手に盛り上げるためにヤミーを大量に産ませてくるよ。ウヴァも彼女に言われたクズヤミー製造をやっておくんだね」

「メズールは？」

「そうね、適当にぶらつくわ。ガメルは普通に楽しんできたら？」

「うん、分かった。」

メズールはカザリたちを別れ、適当にぶらつくことにした。すると突然後ろから声をかけられた。

「そこのお姉さん。ちょっといいかしら？」

「あら、何か用かしら？」

声を掛けてきたのは楯無だった。楯無は扇子を扇ぎながら一枚の紙を渡してきた。

「これは……シンデレラ？」

「えぇ、今日の午後からやる演劇なんだけど……普通の演劇じゃ面白くないから、お姉さんに協力してほしいのよ。」

「まぁ、別にやることもないから……いいわよ。」

「そう、ありがとう。お姉さん。」

この時、メズールはあんな事に巻き込まれるとは思ってもいなかった。

さらにはこの少女も……

楯無がメズールと出会う十分前のこと。

黒髪の少女は校内を一人で歩いていると、楯無が声をかけてきた。

「君、ちょっといいかな？」

「……はい？」

「ちょっと困ったことがあってね。実は午後からやる演劇にちょっと協力してくれないかしら？」

「……別にいいわよ。」

「そう、じゃあ、あなたの名前は？」

「……暁美ほむらよ。」

第４４話　Ｃの演劇／始まる学園祭（後書き）

次回はオーズ組の話をやりつつ、シンデレラの劇が始まります。

第４５話　Ｃの演劇／始まる舞踏会（前書き）

今回はオーズ組の話をやり、演劇が始まります。

第４５話　Ｃの演劇／始まる舞踏会

翔太郎たちが喫茶店で頑張っているその頃、映司はというと……

「それにしても賑やかだね。」

「そうですね。映司さん」

マミと一緒に学園祭を回っていた。マミは現在千冬の提案で特別のクラスに席においている。中学生ということもあってか、普通のクラスに入ることが出来なかったためにこのクラスに入っている。担任は士と照井と千冬となっている。たまに一夏達が遊びに来ていた。

「本当は鹿目さん達も誘いたかったけど、門矢先生がいうにはその世界への橋が消えているって聞いたんですけど……みんな大丈夫でしょうか？」

マミは心配そうに言うと、映司は笑顔で答えた。

「大丈夫だよ。きっと直ぐに連絡がとれるよ。もしまどかちゃん達が来たらみんなで遊んだりしよう」

「そうですね。」

「そこのお二人、ちょっといいかな？」

二人がそんな話をしていると、楯無が話しかけてきた。

「楯無さん。どうかしたんですか？」

「えぇ、ちょっとお二人に頼みたいことがあるのよ。」

楯無は扇子を広げ、二人にある手伝いをしてくれるように頼んだそれは……

「演劇ですか」

「えぇ、ちょっとまだ人手が足りないから、折角だから手伝ってもらえないかなと」

「私はいいですが……映司さんは？」

「俺もいいよ。折角だからアンクにも声をかけてもいいかな？」

「えぇ、アンクなら既にアイスで手を打ちました。」

映司とマミは楯無の頼みを快く承諾してくれた。そして楯無は次に向かった場所は学園祭の救護テントだった。そこには忙しそうにしている伊達がいた。

「伊達先生。ちょっといいですか？」

「おっ、お前は……生徒会長だったな。何の用だ？」

「えぇ、ちょっとした頼みごとをしたかったのですが、どうやら忙しいみたいですね。」

楯無はそう言って、直ぐにその場から立ち去ったのだった。

第四アリーナの更衣室で、一夏、翔太郎、映司の三人は何故か演劇の王子服を着ていた。

「なぁ、一夏。俺は更識の奴に何の説明もされずに連れてこられたんだが……何か聞いてるか？」

と翔太郎が聞くと、一夏は楯無に頼まれたと言う。映司もそう答えていた。すると、楯無が更衣室の扉を開けた。

「みんな、ちゃんと着たー？」

楯無が３人分の王冠をもって入ってきた。

「はい、みんな王冠を被ってね」

翔太郎たちは王冠を被り、３人の王子様の完成だった。

「さて、そろそろはじまるわよ」

3人が覗くと、第四アリーナいっぱいに作られたセットはかなり豪華だった。ちなみに、演劇の演目は『シンデレラ』で、翔太郎達は王子様役である。

「基本的にこちらからアナウンスするから、みんなはその通りにお話を進めてくれればいいわ。あ、もちろん台詞はアドリブでお願いね」

（（（大丈夫か……？））））

3人は不安を抱えつつ、舞台袖に移動する。

「さあ、幕開けよ！」

ブザーが鳴り響き、証明が落ちる。幕が一斉に上がり、アリーナのライトが点滅し、演劇が始まる。

「むかしむかしあるところに、シンデレラという少女がいました」

楯無が出だしを喋る。ここまではまともに聞こえるが、次の説明でシンデレラとはかなりかけ離れた演劇が始まろうとしていた。

「否、それはもはや名前ではない。幾多の舞踏会を抜け、群がる敵兵をなぎ倒し、灰燼を纏うことさえいとわぬ地上最強の兵士たち。彼女らを呼ぶにふさわしい称号……それが『灰被り姫（シンデレラ）』！」

「待て、何か話が違うぞ」

翔太郎のツッコミは楯無に届かず、次の説明が始まった。

「今宵もまた、血に飢えたシンデレラたちの夜がはじまる。３人の王子の冠に隠された隣国の軍事機密を狙い、舞踏会という名の死地に少女たちが舞い踊る！」

それが開戦の合図だった。翔太郎たちに約５０人ものシンデレラが襲いかかってきた。翔太郎と映司と一夏は全力で逃げ出した。

「待て、なんだこれは……」

「そ、そういえば、楯無さんが確か観客参加型って言ってましたけど……」

「それでこの人数はおかしいから、」

三人は必死にシンデレラ達の追撃から逃げ続けていた。だが、三人も前に五人の少女達が待っていた。

「一夏、その王冠を渡せ」

「大丈夫。素直に渡してくれればいいから」

「そうですわ。逃げようとすれば痛い目に合うことをお忘れなく、」

「まさか、一夏は僕に渡してくれるよね」

「安心しろ。私に渡せば全てが終わる。」

箒、鈴、セシリア、シャル、ラウラが立ちふさがっていたのだった。

一夏に取ってかなりのピンチなのだが、翔太郎と映司はある決断をした。

「頑張れ、一夏。狙いはお前だから俺達は関係ないな。」

「ごめん、後で埋め合わせするから」

「翔太郎さん、火野さん。裏切るつもりですか」

そう言って、二人は一夏を置いて逃げ出そうとするのだが……二人の足元にナイフが突き刺さった。
投げた犯人は……ラウラだった。

「悪いが、兄貴、それに火野映司。貴様らを逃がすなと言われているんだ。」

「だ、誰にだ。」

翔太郎がそう言った瞬間、ラウラが指を挿す。翔太郎と映司は指を刺した方向を見るとそこにはドレス姿のマミと本音がいた。

「ごめんなさい。映司さん。私はどうしてもその王冠が欲しいんです」

「ごめんね～しょうしょう。私もだよ～」

「おいおい、どうする？火野。これはある意味ピンチだろ」

「うん、さすがに箒ちゃん達だけならと思ってたんだけど……これはちょっと厳しい戦いになるね」

三人が囲まれ、大ピンチの所に楯無のナレーションが聞こえてきた。

「シンデレラ達に囲まれた王子たちは、奥の手とばかりに自分たちを護る騎士を呼び寄せるんでした。」

その声が聞こえた瞬間、突然上から三つの影が落ちて来た。そしてそれは地面にうまく着地すると……そこにいたのはアンク、士、フィリップだった。

第４５話　Ｃの演劇／始まる舞踏会（後書き）

まだシンデレラの話が続きます。あの二人も参戦させます

第４６話　Ｃの演劇／巻き込まれた二人（前書き）

今回は巻き込まれたメズールの話をやります。ちなみに何となくの思いつきである人が一夏に一目惚れさせます。さらに、最後辺りに戦闘が始まります

第４６話　Ｃの演劇／巻き込まれた二人

生徒会主催の演劇『シンデレラ』を見に来た観客の中にとある三人が混ざっていた。

「こ、これは……」

「さすがの僕でもこれは……」

「ねぇ、メズールどこ？」

ウヴァ、カザリ、ガメルの三人が観客に混ざって演劇というものに興味を持ち、見に来ていたのだが……それは女たちの修羅場だった。

「どうする？いい感じに欲望が渦巻いてるぞ。」

「そうだね、だけど、僕はさすがに埋め込みたくないよ。一応何人かに埋め込んできたけど……」

「俺もだが……この女たちにヤミーを埋め込めば簡単にメダルが集まるぞ」

「僕は遠慮するよ」

「俺もだ。」

「「あの中に入ったら、グリードとか関係なしに殺される。」」

「とりあえず、メズールでも探そうか。」

「アイツ、適当にぶらつくと言っていた気がするが……」

ウヴァとカザリがメズールの行方について話していると、突然ガメルが叫んだ。

「メズールがドレス着てる」

「はぁ？全く何を言ってるんだ？メズールがこんな人間たちの遊戯に参加するわけ……」

カザリがそう言おうとした瞬間、メズールが蒼いドレスを着て立っているのを見つけてしまった。さらにはアンクまでもがそれに参加していた。

「……ウヴァ、これはどういう事だい？」

「俺が知りたい。」

王子の王冠を狙って走りまわる参加者を眺めながらメズールはため息を付いていた。

「全く、何でこの私がこんな事に参加を……あの女。いくら参加者が少ないからっていっても……十分に足りてるじゃないのよ」

メズールは王冠などに興味がなく演劇が終わるまでどこかに隠れようと歩き出そうとした瞬間、突然誰かとぶつかり、尻餅をついてしまった。

「いたっ、たく、誰よ」

「わ、ごめん。」

ぶつかってきたのは一夏だった。メズールはため息を付き直ぐに立ち上がった。

「貴方もものすごい面倒事に巻き込まれてるわね。それにいくら何でも騒ぎすぎだわ。」

「そうなんだ。もしかして楯無さんに無理やり参加させられた感じ？」

「楯無？あぁ、あの女ね。まぁ、そんな感じよ。」

「色々と大変だな。……っ」

「？どうした……の……」

一夏とメズールは殺意という名の視線を感じた。二人は視線を感じた場所を振り向くとそこには……日本刀を持った箒、指を鳴らす鈴、笑顔だけど目が笑っていないシャルの三人がいた。

「な、何で……門矢先生は……」

助けに来てくれた士だった。士は五人の少女を抑えこみ、一夏はその間逃げていたのだが……

「ラウラとセシリアが食い止めてくれた。」

「まぁ、ジャンケンで決めたんだけどね。これでライバル減ったからいいかなって思ってたんだけど……」

「一夏は楽しそうに知らない人と話してたね。」

シャルがそういった瞬間、三人の後ろに阿修羅が見えてしまった一夏だった。

「一夏……その王冠渡すか。ここで切られるか。どっちかを選べ」

「ふふ、コロソウ」

「浮気はだめだよね。一夏」

（ヤバい、こ、こ、殺される。逃げるべきか。でもここで逃げたらこの人が……ああくそ、）

一夏は突然蚊帳の外だったメズールを抱え、逃げ出した。いわゆるお姫様抱っこをしながら……

「ちょ、話しなさいよ。」

「ごめん、でも君を置いて逃げたら、絶対にアイツらに質問攻めにあうから……君は絶対に俺が護る」

「……面白い坊やね。」

その瞬間、メズールの中に何かが芽生えるのだった。

一方で翔太郎は……

フィリップと一緒に部隊のセットの裏に隠れていた。

「はぁ、はぁ、一体どういう事だよ。」

「さぁ、僕も更識楯無に君を護るようにと言われてね。それでどうするんだい？このまま隠れ続けているといつかは見つかると思うよ。」

「たくっ、俺はさっさとこの舞台から降りるか。」

翔太郎は王冠を外し、そのまま王冠を置き去りにして更衣室に戻るのだった。そんな時、フィリップは何かに気がついた。

「翔太郎。僕はちょっとこの事を彼女に言ってくるよ」

「ん、あぁ、楯無か。頼んだぞ。」

翔太郎はそのまま更衣室に向かうのだったが、フィリップは怪しい笑顔をみせていた。

「さて、これを彼女に渡すか」

そして、映司は……

「映司さん。その王冠を渡してください」

「い、いや、待って。この王冠に何があるんだ?まずはその理由を……」

「え、そ、それは……言えません。」

とドレス姿のマミが映司に接近していた。アンクはというとその光景をアイスキャンディーを食べながら眺めていた。

「ちょ、アンク。見てないで助けて」

「悪いが、マミに邪魔をするなと言われてな。契約料としてこれをもらった」

アンクはアイスキャンディーを見せた。映司はもう諦め、素直に王冠をマミに渡すのだった。

「これでいいんだよね。」

「は、はい。ありがとうございます」

マミは何故か映司から受け取った王冠を抱きしめながら嬉しそうにしていた。映司は何が何だか全く分からないでいた。

一夏はというと、一緒に逃げたメズールとはいつの間にかはぐれてしまい、アリーナの通路をうろうろとしていた。すると前からスーツの女性がやってきた。

「こんにちわ」

「あ、どうも、」

ニコニコと笑った女性が挨拶をした。一夏は最初迷子になったのかと思ったが、女性が次に言ったセリフを聞いて戦慄を覚えた

「てめぇの白式を私に寄越せ」

その瞬間、女性は一夏の腹に思いっきり膝蹴りを食らわせた。一夏は一瞬胃の中のものを吐きそうになったが何とか耐え切るが……

「おらおら、さっさとゲロっててめぇの白式を寄越せって言ってるんだよ。」

女性は何度も腹を蹴り続け、一夏はそれに耐えながら咄嗟に白式を起動させ、『雪片弐型』を発動させるが、女性の背中から八本の爪が伸びていた。

「それを出すのを待ってたんだよ。出番だぜ。ヤミー」

突然一夏の体が白い糸が巻きつかれ、一夏は身動きを取れなくされた。

「な、なんだ、これは……」

すると、女性の隣に黒い蜘蛛みたいな怪人がいた。その怪人のお腹に赤の砂時計状のマークがあった。背中からは女性が出した八本の爪とは違う、黒い爪が伸びていた。

「クロゴケグモヤミー。私のヤミーだよ。そうだった、自己紹介が遅れた。私は秘密結社『亡国機業』が、一人、オータム様って言えばわかるがぁ！？」

女――オータムが叫ぶと、一夏に装置が取り付けられる。

「さあ、てめぇのＩＳとのお別れだ！」

その瞬間、体に電流に似たエネルギーが流される。そして白式の起動が解除された。一夏は自分の手首を見るとそこには白式が無かった。

「へっへっ、お前の大事なＩＳならここにあるぜ」

オータムの手には菱形立体のクリスタルだった。

「さっきの装置はなぁ！　『剥離剤（リムーバー）』っつうんだよ！　ＩＳを強制解除できるっつー秘密兵器だぜ？　生きているうちに見れてよかったなぁ！」

「かえ……せ……」

「あぁ？　聞こえねーよ」

「返せ！　てめぇ、ふざけんな！」

一夏は糸を引きちぎって、コアを取り戻そうとするが、破れそうもなかった。そしてクロゴケグモヤミーが一夏の頭を掴んだ。

「知ってるか？クロゴケグモはかなり猛毒を持っていてな、噛まれたらすげぇ痛みを感じて、咬まれた場所が腫れ、全身症状が現れて、手当てが遅れると毒素の効果により皮膚が腐っていくことがあるらしいぜ。こいつも同じ毒を持ってる体験してみようぜ。なぁ、ガキ」

ヤミーの口が大きく開かれ、一夏の首筋を噛もうとする。一夏は為す術がなく目をつぶった。

「あら、そういうのは困るわ。一夏くんは私のお気に入りだから」

突然、扉が開かれ、ＩＳを身に纏った少女が現れた。それは水色のＩＳ『ミステリアス・レイディ』を纏った楯無だった。

「何だてめぇは……」

「貴方に答える必要はないわ。」

楯無はランスを取り出し、ヤミーを攻撃する。ヤミーはその攻撃を咄嗟に避ける。楯無は一夏の拘束を破った。

「た、楯無さん。どうしてここに……」

「姿が見えないから、君の可愛い友達が探してたからね。さて、ここは私が来たからもう安心だよ。君は白式を取り戻す事を考えなきゃね」

「取り戻すって……どうやって……」

「君が願えば答えてくれるはずだよ。」

楯無の言葉を聞いて、一夏は自分が何をすべきか理解した。一夏は右腕に心を集中させた。

（楯無さんが言ってくれた。願えば答えてくれるって……それなら俺は……）

「来い。白式」

一夏がそういった瞬間、クリスタルから白式が解放され、一夏の腕に戻った。そして一夏は白式を起動させ、メモリスロットにジョーカーメモリを差し込んだ。

「行くぜ『切落白夜』起動」

黒い刃を展開させ、オータムとヤミーに向ける。だが、オータムはまだ余裕そうな顔をしていた。

「白式を奪い返されたのは驚いたが……甘いんだよ。もう祭りは始まってるんだ。」

オータムがそう叫んだ瞬間、後ろにいた楯無が吹き飛ばされていた。

「楯無さん」

「くっ、油断してたよ。まさかグリードもいたなんて……」

一夏は後ろを振り向くと黒い怪人、グリードの一人カザリがいた。

「お前は……」

「やぁ、オータム。危ないところだったね。でも、これで形勢逆転。」

カザリは右腕の黒い腕輪を出し、黒い光を放ちながらそれを展開させた。

「起動『黒き竜巻』」

カザリの体中に黒い装甲が纏い、両腕には鋭いエネルギーの爪が伸びていた。

「起動完了。さて、やろうか。他のみんなも始めてるからね」

「助かったぜ。カザリ。さて、もう一回奪わせてもらうぜ。今度は抵抗なんてさせないようにしっかり殺してやるから」

オータムのＩｓ『アラクネ』の八本の爪が一夏と楯無に襲いかかってきた。だが、その爪は二人に届かず、白い塊によってアラクネの爪が全て切り落とされた。

「どうやら、間に合ったみたいだね」

一夏と楯無が声がした方を振り向くと、そこにはファングメモリを持ったフィリップがいた。

「ふぃ、フィリップさん」

「何だ今度は……」

「織斑一夏。更識楯無。大丈夫みたいだね。さて、これで丁度三対三だ。準備はいいかい？翔太郎」

フィリップはダブルドライバーにファングメモリを差し込んだ。その瞬間ジョーカーメモリも転送され、フィリップがダブルドライバーを開いた。

「変身！！」

『ファング・ジョーカー』

フィリップはファングジョーカーに変身し、さらにＩＳを起動させるのだった。

第４６話　Ｃの演劇／巻き込まれた二人（後書き）

次回はかなりすごい戦闘が始まります。そしてあの人達も出ます。

第４７話　集結のＧ／牙ｖｓ黒き竜巻（前書き）

今回はＷとカザリの戦いが始まります。そして、ウヴァ達の計画も開始されます。

第４７話　集結のＧ／牙ｖｓ黒き竜巻

ファングジョーカーに変身しＩｓを起動させたフィリップ。対するカザリは余裕の表情を浮かべていた。

「オータム。君はさっさと退却したほうがいいよ。その状態じゃ戦うことが出来ないだろ」

「はん、そうだな。ガキ。次は絶対にそれを奪ってやる。」

オータムとクロゴケグモヤミーは天井に穴を空けて逃げ出した。一夏と楯無はオータムたちを追いかけようとするが……フィリップがそれを止めた。

「二人とも、今は追う必要はない。それに……君たちが考えてる以上に状況が悪すぎる。」

『あぁ、何をやったか知らねぇが、外に大量のヤミーとドーパントが現れやがった。今アイツを追って戦力が削られるのは痛すぎる。二人は外でみんなの手伝い……』

翔太郎がそう言うと、楯無は一夏の腕をつかみ、空に浮かんだ。

「ちょ、楯無さん。」

「左くんの言うとおりよ。状況は私が思っている以上に悪いらしいからね。仮面ライダーｗ。頼んだわよ」

「任せてくれたまえ」

『さぁ、行け。』

二人はそのまま外へ向かった。残ったのはwとカザリの二人だった。

「いいのかい？君じゃ、僕に勝てないよ。」

「それはどうかな？」

Wはタクティカルホーン一回弾くとＩｓの腕の装甲に白い刃が現れた。

『アームズファング』

「はぁ！！」

Wはカザリに向かっていった。カザリは両手の爪を鋭く伸ばし、Wの攻撃を防いだ。

「その程度かい？はぁ！！」

カザリは刃を弾き、wの胸を引っ掻く。だが、Wはそれを避け、天井を突き破り外に飛び出し、タクティカルホーンを二回弾く。すると両肩に二本の刃が現れた。

『ショルダーファング』

Wは両肩の刃を引き抜くとカザリに目がけて投げつける。カザリはその攻撃を防ぐ。

『どうする？フィリップ。ＩＳ使えることにも驚いたが、こいつは海で戦った以上に強くなってるぞ』

「あぁ、ずっとこいつの相手をしている暇はない。一気に決めよう」

Ｗはタクティカルホーンを三回は弾いた。

『ファング・マキシマムドライヴ』

ファングの刃が両足に刃が出現し、カザリに向かって二発の回し蹴りに二本の刃がカザリを切り裂こうとした。

『「Ｗファングストライザー」』

Ｗのマキシマムドライヴがカザリに向かって放たれる。だが、カザリは両腕に黄色い球体を貯め始めた。

「甘いよ。その程度の攻撃じゃこの『黒き竜巻』は破壊できない。『デザートレイン』」

二つの弾から砂の雨が放たれ、ｗは防御も出来ずにその攻撃を受けてしまい、下にそのまま落ちてしまった。

「さて、止めを刺そうか」

Wとカザリが戦ってる中、オータムとヤミーは屋上に逃げていた。

「ちっ、派手にやってるな。グリードが」

オータムは外でドーパントとヤミーが人々を襲っているのを見て、言った。

「それに、まだ迎えこないのかよ。くそが……」

「やっと見つけましたわ」

突然、上から声が聞こえたと思うと何発ものビームがオータムとヤミーを目がけて放たれた。オータムはそれを避け、上空を見るとそこにはブルーティアーズを纏ったセシリアがいた。

「襲撃者の一味ですわね。」

「ちっ、ヤミー。こいつを始末しろ」

オータムがヤミーに指示をして、ヤミーはセシリアに向かって糸を

吐こうとするが、突然ＡＩＣがセシリアの前に貼られ、防がれるとヤミーの背中に爆発が起きた。

「甘いな。亡国企業。ここでお前を拘束させてもらう。」

オータムの後ろにはシュヴァルツェア・レーゲンを纏ったラウラがいた。ラウラはオータムに銃口を向けた。二人はオータムを追い詰めるが……

「甘いな。小娘」

どこから男の声が聞こえた瞬間、セシリアとラウラの地面にたたきつけられた。

「危なかったね。オータム」

「てめぇ、呼び捨てにするな。オルタームーン」

「あはは、折角ピンチだから迎えに来たんですけど……でもアラクネが破壊されましたね。このままじゃ戦えませんね。なのでこれを使ってください」

オルタームーンはオータムに何かを投げ渡す。オータムはそれを受け取ると一瞬驚いた。

「おいおい、ガイアメモリかよ。それも蜘蛛繋がり。いいね」

オータムは手の甲にガイアメモリを差し込んだ。

『スパイダー』

オータムの体がだんだんと蜘蛛の怪人に姿を変えた。

「はは、こりゃいい。まさに化物の力だ。」

「喜んでくれて嬉しいですね。ちなみにそれは僕らが独自に改造した特別で、本来の能力は無くしましたが……あなたが放つ糸に触れたものは全て毒に侵されます。どうです？彼女たちで実験してみます？」

「いいね。」

「そ、そんなことさせませんわ。」

セシリアはピットをオルタームーンとスパイダードーパントに向かって放った。だが、ヤミーの糸とドーパントの糸がピットを全て縛り付け行動不能にした。

「さてと、どう言う風に毒を植えつけようかな？愛する人の目の前でやってみるか。」

オータムは何本かの糸を下に向かって放った。

オーズに変身した映司は大量に出現したヤミーとクズヤミーとドーパントを倒し続けていた。

「これ多すぎだろ。アンク。何か一気に倒すメダルないの？」

「メダルジャリバーでどうにかしろ。それに……この大量のドーパントはなんなんだ？」

ドーパントはガイアメモリを使わないといけないがここまで大量にいると何かがおかしかった。だが、その答えは直ぐにわかった。それはオーズが倒したドーパントが爆発すると半分に割れたメダルが一枚現れた。

「これは……まさか……」

「お前の想像通りだ。アンク」

アンクが声がする方を向くとそこにはウヴァが立っていた。

「ウヴァ、貴様の考えか。クズヤミーにガイアメモリを埋め込んだのは。」

「あぁ、そうだといいたいが、協力者の提案だ。奴は俺達にこの力を提供してくれたからな」

ウヴァはそう言って、左腕にはめられた腕輪を見せた。

「Ｉｓか。」

「オーズ。お前はここで終わりだ。『深緑の蟲』起動」

ウヴァがそう言うと、腕輪がそれに反応をしウヴァの体を緑色の装甲が纏い、両腕に蟷螂の鎌が身につけられた。脚には虫のような爪が鋭く伸びていた。

「さぁて、時間までもう少しだ。」

ウヴァは上から伸びた白い糸を見て言った。アンクはそれに気がついた。

（ウヴァの奴。何を待っている。いや、あの糸は……まさか……）

「アンク、空中戦はやっぱりタジャドルだ。」

「ちっ、無くすなよ。」

アンクはオーズに二枚のメダルを渡し、直ぐにそのメダルをスキャンした。

『タカ・クジャク・コンドル。タ～ジャ～ドル～』

タジャドルコンボに変身したオーズは上空に飛び上がろうとしたが、突然白い糸に体を縛られた。

「うわ、なんだこれ」

「やっぱり罠か」

アンクは急いで拘束を解こうとするが、アンクも糸に縛られた。

「どうやら、集合の合図か。それも、楽しいな。」

屋上には糸に縛られたセシリアとラウラの二人がいた。その近くにはオルタームーンとスパイダードーパントのオータムとクロゴケグモヤミーがいた。

「さて、集合の合図はこれでいいんだな。」

「あぁ、さすがはオータムだね。」

オルタームーンがそう言うと、糸に縛られたオーズとアンクがやってきた。そして遅れてウヴァもやってきた。

「ここは……セシリアちゃんにラウラちゃん。どうして……」

「罠か。」

「はじめまして、仮面ライダーオーズ。君はここで見学してなよ。そろそろくるから」

オルタームーンがそう言うと、次々と屋上に何人かが集まった。それは一夏たちだった。

「オータム。セシリア達に何をした。」

一夏は怒りを顕にしながらオータムを睨むが、オータムは笑いながら答えた。

「蜘蛛で伝えたとおりだ。この女たちに毒を植えつけられたくなかったら、てめぇの白式を寄越せ。」

「くっ、」

一夏がオータムと対峙する中、箒、鈴、シャルの三人は隙を伺っていた。隙があれば直ぐにセシリア達を救い、オータムたちを倒す事

ができるはずだと……だが、オルタームーンはそんな期待を裏切った。

「だめだよ。オータム。そんなんじゃ、」

「あん？」

「だって、こいつらきっと隙を付けば何とかできるって思ってるよ。だからさ……カザリ」

突然箒達が黄色い竜巻の中に閉じ込められた。そしてその近くにはカザリがいた。

「そんな、フィリップさんは……」

「あぁ、奴は既に倒したよ。あとアンク。君に感動的な再会だよ」

カザリがアンクに向かってそう言うと、アンクはカザリが言った言葉を理解した。

「まさか……」

「そのとおりさ。これで全員集合だよ。」

突然屋上の地面が突き破られると、ガメルとメズール。そして赤い怪人が姿を現した。

「俺の体。」

「そうだよ。これで僕らグリードがここに集結だよ。さぁ、始めよ

うか。欲望と狂喜の宴を」

第４７話　集結のＧ／牙ｖｓ黒き竜巻（後書き）

次回、ついにあの人が登場です。

第４８話　集結のＧ／集結ライダー（前書き）

今回はあの人が登場です。やっと出せました。

第４８話　集結のＧ／集結ライダー

カザリの攻撃を受け、とある教室に落ち、変身を解除したフィリップは何とか立ち上がった。

「さすがに油断したよ。」

フィリップは教室の窓から下の様子を見た。そこではうようよとドーパントとヤミーがいた。どうやら生徒たちは避難出来たみたいだった。

「早く。変身してみんなと合流を……」

フィリップはサイクロンメモリを取り出した。

変身解除をされ、翔太郎が目覚めた場所は体育館だった。どうやら誰かが運んできてくれたみたいだった。そして腰にはＷドライバーが装着されていた。

「くそ、まだ奴らはいるみたいだな。」

『ジョーカー』

翔太郎は急いで変身し、外へ向かおうとしたが……マフラーを誰かに掴まれた。振り向くとそこには本音が泣きそうになりながら立っていた。

「しょうしょう、また戦いにいくの？」

「本音。あぁ、これ以上ここは傷つけはさせない。」

「でも、危ないよ。死んじゃうよ」

「本音。大丈夫だ。俺達は死なない。俺たちライダーは人々の希望だ。その希望がある限り俺達は死なない。そうだろ。」

「しょうしょう、彼女に心配掛けさせたしょうしょうは、今度デートだよ」

「あぁ、約束だ。」

翔太郎は本音に見送られながら、みんなと合流をしに行った。そんな中フィリップは……

『やれやれ、彼女を泣かせるとは……君はまだまだだね。』

「あぁ、そうだ。俺はまだ半人前だ。だけど、それは俺一人の場合だ。なんせ、俺達は……」

『ふふ、そうだったね。僕らは二人で一人。二人で一人前。そして』

「仮面ライダーだ。」

『セルバースト』

ブラストキャノンで大量の怪人軍団をなぎ倒す、バースとアクセルとディエンド。だが、数は減る感じはしなかった。

「たくっ、さすがに多すぎだろ。なぁ、照井。」

「あぁ、奴らはこれのためにずっとこいつらを貯めこんでいたんだ。」

「この数の多さじゃ、いつかは僕らは力尽きてしまうね。」

三人は一緒に固まった。三人を囲むのは三十体もの怪人軍団。ディエンドが言うようにこのままだと力を付き果たしてしまう。さらに伊達はずっと頭の痛みをこらえていた。

（最初に力尽きるのは俺みたいだな。どうする？これじゃあ勝ち目がない。）

伊達が諦めかけた瞬間、怪人たちは一斉に飛び掛ってきた。三人は覚悟を決めた。だがその時……

『アタックライド・クロックアップ』

「ティロフィナーレ」

突然、全ての怪人たちが一気に吹き飛ばされる。そして三人の前にディケイドとマミが現れた。

「危なかったな。」

「士。遅かったね。」

「大丈夫ですか？伊達さん？」

「マミちゃん。よくこの怪人達の軍団をくぐり抜けてきたね。」

「はい、彼女の協力で……」

マミがそう言って、振り向くとそこには黒髪の少女が立っていた。

「君は……」

屋上には集結したグリードとオータムとオルタームーンが一夏達を追い詰めていた。

「ねぇ、彼が僕？」

「あぁ、そうだよ。アンク。」

ロストアンクがアンクを見て、カザリに聞いた。カザリはそのまま答えた。

「ちっ、何でこいつがここにいるんだ」

「それは僕が連れてきたんだ。折角だからこの場で感動的な出会い

をさせたくってね。」

オルタームーンがそう答えると、ロストアンクはアンクの首を掴んだ。

「ねぇ、早く一つになろう。」

「くっ、」

身動きがとれないアンク。一夏は直ぐにアンクを助けようとするが……スパイダードーパントにそれを止められた。

「おっと、動くと。こいつらは死ぬぜ。さぁ、早く白式を解除して渡せ。早くしないとこいつらに毒を埋め込む。」

「……くそ。」

一夏は悔しそうな表情を浮かべた。セシリア達はさっきから自分たちの事は気にするなと言っていたが……一夏はそれは出来なかった。

「分かった。白式をお前達に渡す。だから、仲間を開放してくれ。」

「あぁ、分かった。」

一夏は白式の起動を解除すると、スパイダードーパントは口から二本の針を取り出した。

「殺してから開放してやる。」

「お前、約束を破るのか」

「約束したぜ。だけど、生きて解放しろとは聞いてないからな。」

スパイダードーパントはセシリアとラウラに目がけて、針を飛ばした。一夏はそれを止めようとするが……間に合わなかった。針はセシリア達に刺さろうとしていた。

「セシリア、ラウラ。やめろおおお

「叶わない夢を見失い。他の世界を巻き込む。それがお前たちオルターのやり方か。」

「まさか、僕らのことを知っているのか。」

「……」

「答えろ。」

「邪魔な男だ。ハァ！！」

スパイダードーパントはオルターを睨んでいる男に向かって糸を放つ。だが、その糸は赤い弾丸によって燃え尽きた。

『ヒート・トリガー』

「やっぱりここか。って、えっ、」

『ま、まさか……』

駆けつけたwは男を見て驚いていた。すると、今度はクロゴケグモヤミーが一夏達に向かって攻撃をしようとするが、突然現れた爆弾を食らった。するとオーズ達の拘束もいつの間にか破られていた。

「……見つけた。オルタームーン」

オーズ達の前には黒髪の少女が立っていた。オーズはその少女に見覚えがあった。そして遅れてきたディケイド達は箒達の拘束を破った。

「どうやら、これで全員集まったな。」

ディケイドがそう言うとバースの隣にも見知った男がいた。

「あれ？後藤さん？」

後藤はバースバスターをグリード達に向け、放った。グリード達はそれを防いだ。

「火野。無事か。」

「あ、はい。でも、なんで後藤さんが……」

「話は後だ。今はこいつらを倒すぞ」

「は、はい。」

「行くぞ。翔太郎。」

男はロストドライバーとガイアメモリを取り出し、ロストドライバーを腰に装着し、ガイアメモリを挿し込んだ。

『スカル』

男の体が見る見るうちに仮面ライダーとなった。翔太郎たちはその姿を知っていた。それは翔太郎たちの師匠であり、居るはずのない男。鳴海荘吉だった。

「さぁ、お前の罪を数えろ」

第４９話　集結Ｇ／それぞれの戦い（前書き）

今回はそれぞれの戦いが始まります。

第４９話　集結Ｇ／それぞれの戦い

一夏たちのピンチを救ったの翔太郎の師匠・鳴海荘吉だった。荘吉はスカルに変身し、オルタームーンに銃口を向けた。

「総力戦だ。覚悟は出来ているな。」

「待ってくれ。おやっさん。何でおやっさんが……」

翔太郎は動揺していた死んだはずの壮吉がこの場にいて、一夏たちのピンチを救ったことに……だが、壮吉はその問に答えなかった。

「翔太郎。理由を話す場ではない。今はこいつらを倒すぞ。」

「おやっさん。分かった。フィリップ、いいか？」

『あぁ、任せたまえ。』

オルタームーンは集結したライダー達に驚きを隠し切れなかった。だが、その驚きの直ぐに消えた。

「どういった理由でこの場に集合したのかは置いとこう。来い、仮面ライダーｗ、スカル。おまえたちの相手はこの僕だ。」

オルタームーンは黒いベルトを腰に装着し、ナイフで軽く傷つけると黒いオーラがオルタームーンの体を包みこみ、体中が傷ついたライダーに変身した。

「仮面ライダースカー。さぁ、この場所では戦うには狭すぎる。ス

カーデッドフィールド」

スカーの体から黒い渦が出現し、屋上を黒いドームに包まれた。そして屋上にいた全員がバラバラに別れてしまった。

「さて、僕の相手は……W、スカル、それに織斑一夏、篠ノ之箒か」

「他のみんなは？」

『どうやら、別の場所に隔離されてしまったみたいだね。織斑一夏。篠ノ之箒。君たちも覚悟出来てるね』

「はい、フィリップさん」

「さっきの借りは返させてもらう。」

「ふっ、さすがは千冬が期待している奴らだ。」

壮吉は一夏と箒に向かっていった。

「姉さんと知り合いなんですか？」

「それも後で話そう。今はこいつを倒すぞ。」

「余裕かましてんじゃねぇぞ。貴様らはズタズタの傷だらけにしてやるよ」

スパイダードーパントと対峙するは、セシリア、ラウラ、アクセルだった。

「てめぇらが相手か。あのクソガキをやりたかったが……てめぇらで我慢してやる。」

「ラウラ。セシリア。油断するな。こいつから情報を色々と引き出す。」

「照井教官。分かっています。」

「えぇ、もう油断はしません。」

ラウラとセシリアはメモリスロットにそれぞれのメモリを挿入した。

『トリガー』

『メタル』

「怪物相手に遠慮はしませんわ。」

「あぁ、もう容赦はしない」

「ウザってーガキどもが……毒を埋めこまれて死ねよ」

カザリ・ロストアンクと対峙するのはオーズとバース、そして後藤だった。

「後藤ちゃん。こいつらの相手は俺達に任せておきな。」

「でも、後藤さん。俺、アンクを別れてコンボが……」

「任せなって……」

「火野、会長から届けものがある。」

後藤はオーズにとある物を渡す中、カザリとロストアンクは二人に目がけて攻撃を開始した。

「すでに戦いは始まってるんだよ。」

「僕の邪魔をするな。」

ウヴァ・クロゴケグモヤミーと対峙するのはディケイド・アンク・鈴だった。

「ちっ、お前らが相手か。」

「ウヴァ、残りのメダル寄越せ。」

「下がってろ。アンク。今回は俺達に分がある。」

「あん？」

「頼んだぞ。鈴音」

「へっ、」

ディケイドが何を言いたいか理解出来ていない鈴だが、アンクは直ぐに気がついた。

「なるほどな。相性が良すぎる。」

「もしかして……」

鈴はメモリスロットにヒートメモリを挿入した。

『ヒート』

双天牙月は真っ赤に燃え上がった。ディケイドも一枚のカードを入れた。

『カメンライド・ヒビキ』

仮面ライダー響鬼に姿を変え、ウヴァ達と対峙した。

メズール・ガメルと対峙するのは、ディエンド・シャルロット・マミ・ほむらだった。

「あら、黒髪のお嬢ちゃん。まさかあなたもここに来てたのね」

「えぇ、オルタームーンから大切な友達を奪われたから。」

「暁美さん。それってもしかして……」

「……貴方を倒して、直ぐにオルタームーンから話を聞かせてもらうわ。」

「その前にグリードが相手だろ。さぁ、行こうか」

ディエンドは直ぐにエネルギー弾をメズール達に放つ。だが、メズールの水流に防がれ、ガメルが突進してきた。だが、シャルロットはガメルの突進を利用し、灰色の鱗殻(グレー・スケール)1でガメルの腹を貫いた。

（さすがに力がありすぎて……だけど……）

ガメルに向かって何発が爆撃し、一度引いた。そして近接ブレードにメモリスロットはめこんだ。

『ルナ』

シャルロットはブレードをムチのように使い、メズールとガメルに攻撃するが……

「調子にのるんじゃないわよ。」

メズールは直ぐに水流をシャルロットに向けて放った。だが、その攻撃はシャルロットに届かなかった。いや、放つ瞬間、爆発が起きた。

「くっ、いつの間に爆弾が・・……まさか」

メズールが気がついたときには辺りに何十個の爆弾が設置されていた。

「終わりね。」

爆弾は同時に爆発し、メズール達は吹き飛んだ。その隙を付き、ディエンドとマミはメズールとガメルに銃口を向けた。

「終わりだね。」

「はい」

『ファイナルアタックライド。ディ、ディ、ディエンド』

「ティロフィナーレ」

二人の攻撃がメズールとガメルに向かって放たれた。だが、その攻撃は何者かによって防がれてしまった。そこには……

「やれやれ、危ないね。私が来なかったら死んでたよ。」

オルターリーンがいた。直ぐにディエンド達は体勢を整えるが……

「先に返しておくね。まだウヴァ達がいるからね」

第５０話　集結のＧ／仮面ライダースカー（前書き）

久しぶりの更新です。あと報告としてはこの学園祭編でこの作品は終わりです。まだあんまり解決してない事は別の作品でやるつもりです。決めているのはゴーカイジャーｖｓディケイド、まどマギ。オーズ、Ｗ、ｖｓフォーゼの話を書くつもりです。

第５０話　集結のＧ／仮面ライダースカー

オルタームーンと対峙するＷ、スカル、一夏、箒の四人

「さぁ、見せてあげるよ。僕の力を……スカーペイン」

オルタームーンは自分の胸を黒いナイフで刺した。だが、その傷口から黒い刀が現れた。

「僕は自分を傷つけることで力を付ける。さぁ、僕の前にひれ伏せばいい。」

黒い刀を持ってものすごいスピードで向かってくるオルタームーン。だが、その攻撃を一夏と箒が零落白夜と箒の双刀で受け止める。

「お前だけは許さねぇぞ。」

「一夏。エクストリームだ。」

箒がエクストリームメモリを一夏に渡し、一夏はメモリスロットに差し込んだ。そして……

『エクストリーム』

「うおおおおおおお」

一夏と箒はオルタームーンの体を十字に斬りつける。オルタームーンの体から血が吹き出した。だが……

「無駄だ！この程度で僕は倒せない。スカーミラー」

一夏と箒が斬りつけた傷が二人に移し返され、一夏と箒の二人は倒れた。

「まずはＩＳ使いだ。あとは君たちだよ。仮面ライダー」

オルタームーンはＷとスカルの方を向いた言うと、Ｗは……

「こいつ……厄介だな」

『傷を移し返るか。確かに厄介な能力だが……』

「フィリップ。既に準備はできているな。」

『あぁ、来いエクストリーム』

どこからとも無く飛んできたエクストリームメモリがＷに装着すると、Ｗはサイクロンジョーカーエクストリームに変身した。そして、プリズムビッカーにプリズムメモリを差しこみ、プリズムソードで辺りを切り裂くと、そこから別々の時空に閉じ込められた仲間たちとグリードたちが戻ってきた。

「オルタームーン。どういうことだ」

カザリがそう言うと、オルタームーンは……

「ば、馬鹿な。僕の空間が……」

「この責任は貴様にあるんだぞ。」

ウヴァもそう言い、オルタームーンは追い詰められた。すると、どこからかオルターリーンがやってきた。

「随分としてやられたみたいだね。それもこの世界にライダーを集めた君のせいだ。この責任は君に任せたよ。さぁ、カザリ、ウヴァ、ロストアンク。君たちは次の世界へ行くよ。この世界の悪意は集め終わった。」

リーンはそう言って、カザリ、ウヴァ、ロストアンクを連れて消えようとした。

「あぁ、あと、この世界に落ちたガイアメモリは私達が回収したから……それじゃあね。」

そして、リーンたちは完全に姿を消した。残されたムーンは……

「こ、此の僕が…・……ふざけるな!!ここで君たちを全滅させてやる。」

「それはどうかな?」

するとオルタームーンの前にライダーが集結した。

「オルタームーン。これでお前は終わりだ」

『ファイナルアタックライド。ディディディケイド』

『ファイナルアタックライド。ディディディエンド』

『スカル。マキシマムドライヴ』

『アクセル。マキシマムドライヴ』

『エクストリーム。マキシマムドライヴ』

『スキャニングチャージ』

『セルバースト』

全てのライダーがオルタームーンに向かって、それぞれの必殺技を食らわし、オルタームーンはその攻撃すべて受け、ライダー形態が解除された。

「がはっ、ば、馬鹿な。僕が負ける……」

その瞬間、オルタームーンの体が塵となって消えていいた。

第５０話　集結のＧ／仮面ライダースカー（後書き）

久しぶりのせいか駄文です。次回でこっちは第一部が終わりです。新作の方はゴーカイジャーのほうは早めに……フォーゼはフォーゼが始まってからです。

第一部終　ＩＳの世界／２つの世界へ（前書き）

今回で第一部終わりです。といっても戦いはまだ続く予定です。

第一部終　ＩＳの世界／２つの世界へ

学園祭での戦いから一夜が明けた。そして翔太郎たちは光写真館である話をしていた。それは……

「おやっさんが……俺達が来る前に来ていた？」

「あぁ、あの日、異次元空間に巻き込まれて、俺はこの世界で千冬に救われたんだ。それでしばらくラウラの国で後藤くんと共に教官として働いていた。」

「なるほどね。それより、暁美ほむら。君はどうしてこの世界に？」

フィリップはほむらに質問するとほむらはうつむきながら答えた。

「私は……まどかを助けにここに来た。」

「まどかちゃんを？誰に攫われたんだ？」

映司がそう聞くと、アンクがとある人物たちを思い浮かべた。

「あのオルターとか言う奴らか？」

「えぇ、奴らはあらゆる世界の悪意を集めてるわ。そしてまどかを攫った理由は……まどかを新たな神にするつもりなの」

「神様と来たか。なるほどな。あの腐れ人形が言うだけあるな。」

すると士があることに気がついた。それは写真館の絵が半分ずつに

描かれた絵に変わっていた。左は宇宙ロケットの絵。右は海賊船みたいな絵だった。

「どうやら、新たな世界に行く必要があるみたいだな。それも急いでな。」

一方、オルターたちは……

「さて、私たちは2つの世界に行くよ。」

リーンが言うと、カザリが……

「2つの世界？」

「えぇ、悪意を集めるためにね。さぁ、行こうか。新たな世界へ」

翔太郎とフィリップは千冬に一時的に世界から離れると告げた。

「そうか、しばらくいなくなるのか」

「あぁ、悪いな。だけど、これは俺たちライダーの仕事なんだ。」

「もしも、やつらがこの世界に戻ってきたら、直ぐに分かるように装置を束に渡しておいた。」

「ふむ、では、生きて戻ってこいよ」

「「あぁ、」」

「教官。」

ラウラは壮吉と話していた。

「ラウラか。お前の最初の目的は達成できたみたいだな。」

「はい、教官は兄貴達と一緒に別の世界へ？」

「あぁ、本当はこの世界であらゆる敵からお前たちを守っていきたいが……今のお前たちなら俺達は必要ないな。翔太郎たちから受け取ったガイアメモリを大事に使うんだぞ」

「はい。」

翔太郎たちはＩＳ学園でお世話になった人物たちに別れを告げ、オルターたちを追うこととなった。だが、数カ月後、この世界で新たな戦いが巻き起こるのだった。

次回作予告

「「「「「「ゴーカイチェンジ！」」」」」」

士達が訪れた世界は以前訪れたシンケンジャーの世界から二年の月日が経った世界だった。

「レジェンド大戦？」

「もしかしてライダー大戦みたいなものでしょうか？」

『世界の破壊者が鍵だよ。』

ゴーカイジャーとディケイドが出会った瞬間、新たな戦いが始まる。

「仮面ライダーの大いなる力。もらいに来ました」

現れるバスコ

「コノ世界のお宝は……僕がもらうよ」

「あんたから奪えばいいんだよね。大いなる力。」

バスコｖｓディエンド

そして現れるオルターリーン。

「ザンギャックのみなさん。共闘しようじゃないか。」

「いいだろう。異世界の住人よ。我らと手を組もう」

そしてゴーカイジャーＶＳディケイドの戦いが始まった。

「お前、ザンギャックか」

「それぞれの戦隊に変身か面白い。」

『シーンケンジャー』

『カメンライド・ブレイド』

オルターリーンＶＳゴーカイジャー＆ディケイド

「力を貸せ。キャプテン」

「いいぜ。破壊者」

「来いよ。君たちを倒し、悪意は私達がもらう。」

タイトル予定『仮面ライダーディケイドＶＳ海賊戦隊ゴーカイジャー』

近日更新

「ここがオルター一味の最後の敵がいるかもしれない世界か」

「それにしても、別に変わった世界でもないな」

「ん？この感じ……グリードがいやがる。」

W、オーズが訪れた世界は一体……そして暗躍するグリード

「これを使えば、九枚コアメダルを集めなくても、君たちは完全体になれる」

最後のオルターが渡した黒いメダル。それを取り込んだグリードたちは完全体へ、

「やぁ、アンク。君に相談があるんだけど、」

「なるほどな。それはいい手だ。」

カザリとアンクがとある取引を……そして、

「ぼ、僕を裏切ったな。」

「欠けた存在はいらないな。必要なのは完全なお前だ。ロストアンク。」

ロストアンクから抜き取るコアメダル。そして、

「アンク。お前、裏切ったのか」

「あぁ、こっちのほうが全てのメダルを集めることが出来る。」

裏切るアンク。そして、映司の体に後藤が持っていた紫のメダルが

……

『プットティラ～ノ～ザウルス～』

紫のコンボとは、そして謎の仮面ライダーも登場

「俺は全ての仮面ライダーと友だちになるんだ。」

そして、始まるオルター一味最後の一人との決戦。

「さぁ、貴様らの魂を頂こうか」

「やってみやがれ、」

『僕らの魂はそう簡単に奪われはしない』

「人の魂を利用するなんて、卑怯だ。」

仮面ライダーW&オーズvs仮面ライダーフォーゼ。（タイトル仮）

9月頃に更新。

第一部終　ＩＳの世界／２つの世界へ（後書き）

いきなり完結にしてすみません。とりあえず、前々から学園祭編で終わらせる予定だったのもあり、そして、ゴーカイジャーとかのコラボとかやってみたかったので……こっちでは明かされなかったオルター一味の目的とグリード完全復活、プトティラコンボとかやる予定です。ディケイドｖｓゴーカイジャーは近日更新予定です。Ｗ＆オーズｖｓフォーゼはフォーゼが始まってからですね。お楽しみに

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0057r/

ＩＳとＷ　コアに続く新たな戦いＩＳ大戦

2011年8月22日05時00分発行